

547  
134



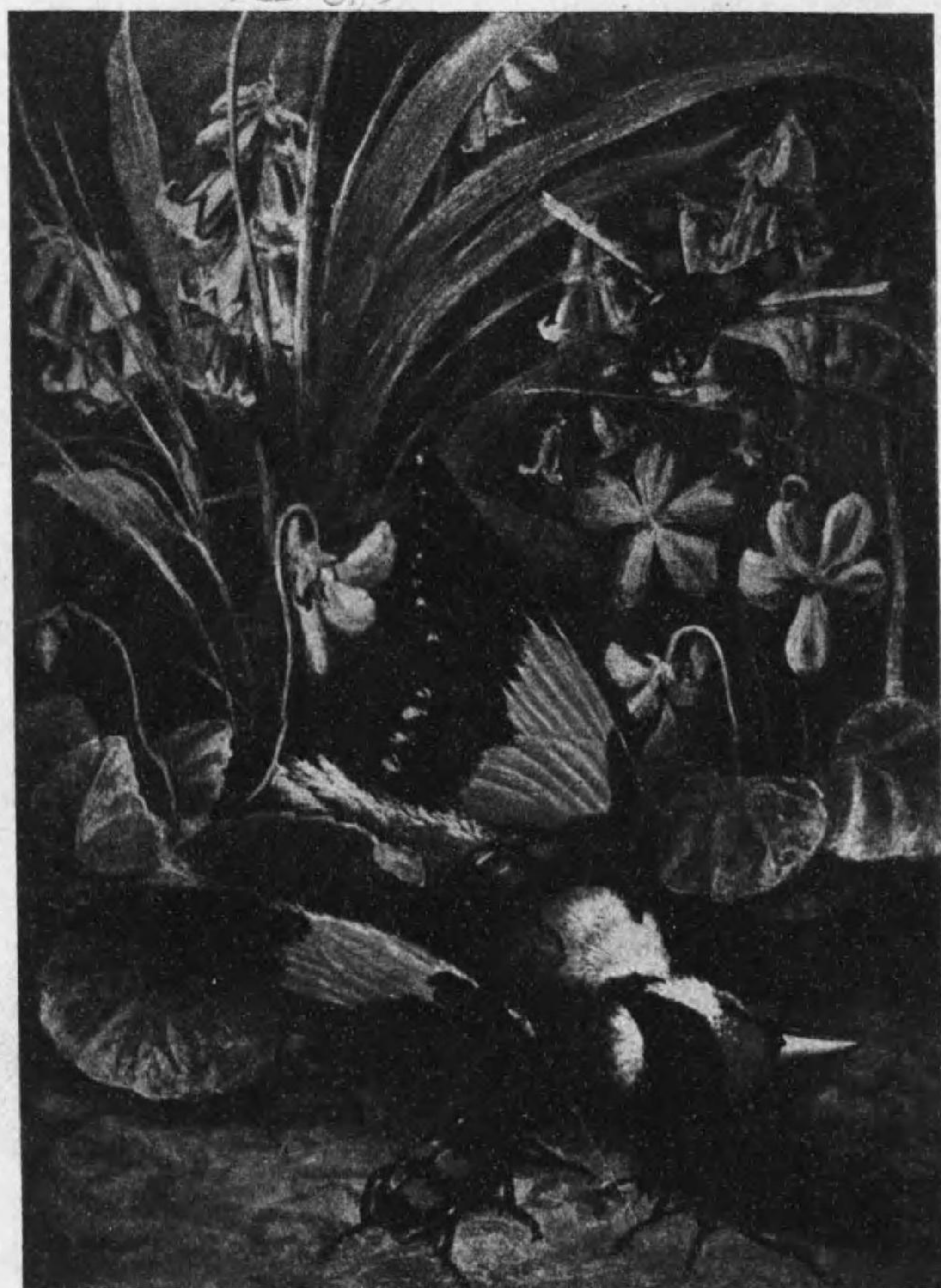
始





著 郎 桐 山 橫 士 博 學 農

大 正  
15. 3. 9  
内 交



すか 蠢鼻に臭屍の鳥小  
『しむでし』家食悪の界蟲昆

## 序

學問の研究は眞理の追求であり眞理の追求は文明向上の基礎である、殊に生物學の研究に於て然りであると思ふ。然し此事たる言ふ可して行ふに難く、白眼凡庸の士の到底企て及ぶ處ではない。顧みれば十年の昔君と初めて青山の寓居に會した時、君は未だ紅顔の若人であつたが、而も當時既に昆蟲學の造詣深く、又常に蟲の友達、蟲の味方を以て任じて居た。日に夜に究むる處、語る處、いつも必らず蟲の事であつた、そして其毛蟲の如き太い眉の下、長き睫の蔭に怪しくも輝く君の瞳を見る毎に、好漢大業の材なりと私は睨み、君は又私の脱け上つた前額を見ては之れ將相の器なりと言つて笑ふのが常だつた。

爾來親交漆の如く、談論風發後日活舞臺の人とならば、必ずや共に各自志す専門の學を一般社會に普及せしむる事に努力せんと約した。

學を卒へて東西に分れ七星霜、君は孜々として研鑽遂ひに年若くして學位を得、今や其蘊畜を

披き、昆蟲生活の真相と興味とを世人と共に分つべく「蟲」の原稿を作り携へて余に示し、往時の約を茲に果さんと言ふ。

繙けば昆蟲生活の走馬燈を見る如く、興味津々として盡きず、殊に君の鋭敏なる詩感と犀利なる批判とは遺憾なく紙上に輝き、余の如き生物學には全くの素人をして恍惚稿を覆ふ能はざらしめた。今にして自分は自己の志す法律學に於て、未だ君との約を果し得ぬのを恥づるとは言へ、又吾が炯眼の遠はざりし誇を持ち、尙此書の上梓こそ吾事の如く嬉しい。

宜なる哉今夕、石川千代松翁博士父子と食を共にし、談偶々君の事に及んだ時、老博士は吾事の如く満面に笑を湛へ乍ら「横山は立派な息子を持ちました、あの子は親父さん以上の學者になります」と、蓋し君の尊父は化石學の權威横山次郎博士である。此石川博士の一言こそ君の眞價を語るもの、又以て此著を江湖に勸むるに確信ある所以である。

大正十四年十二月十二日夜

於大番町新居

田代山朗

## 自序

私は少年時代から生き物が好きだった、中でも特に蟲に親しみを持つて居た。いろ／＼な「ふ」や「とんぼ」を捕まへ、夫れを針付にして箱に並べて眺めては獨り悦に入つて居たものだ。だが、決していつも／＼蟲の敵ばかりはなかつた。時には味方にもなり、同情者にもなつて「くも」の巢にかゝつて震へてゐる「せみ」を救つてやつたり、水溜りに落ち込んで溺れかゝつて居る「蟻」を助けてやつたりもした、又無情な悪童の手から「とんぼ」を掠奪して逃がしてやり、義侠的優越を感じた事もある。兎に角、蟲と共に生きたいといふのが、私の生活上の第一の望であり、又曲りなりにも今日迄蟲と親しんで生きて來た。

此書は少年時代から今日まで、いろ／＼な蟲に就て私が觀た事、感じた事、嬉しく思つた事、憤慨した事などの赤裸々の記録である。又時に人間に向ひ、社會に對する憤慨や批評もあるけれど、それは私一個の感想であつて、決して請求でも要求でもない。

私は此昆蟲觀は、確に從來の傳統的記述法を破壊して、新しい觀察と批判とに立脚した現代的の昆蟲記だと自ら信じて疑はない。

蟲の生活を觀る事は、生物生活研究への第一歩であり、又人間生活、社會思想問題考察の知識の基礎である。

「か」や「のみ」のやうな利己主義のガリ／＼が居るかと思ふと、「蟻」や「蜂」の如き博愛共同の精神の持主が居る。自分の夫君を喰つて酒蛙々々たる「かまきり」のやうな薄情者が居るかと思ふと、夫婦共稼でセツセと働く「しでむし」の如きがある。其千態萬様、十人十色の生活は、とても他の生物界に觀る事は出来ない。

「てふ」や「蟻」を「蟲けら」と一口に貶して、金儲けばかり考へてるやうな人達は讀んでくれなくてもいい、それより自然を愛する人、蟲風情の行ひと生活にも、少しでも理解と同情とを持ち得る心の持主に、一人でも多く見て頂きたい。

大正十四年十二月十三日

東京千駄谷にて

桐 郎 生

目 次

一 缺	蟲	三
二 蟻	蟻	二
三 蚤		三
四 蠅		七
五 蚊		七
六 蜻	蛉	七
七 草	蜻	天
八 蟻	地 獄	六
九 蟬		三
一〇 蝨		六

一	南	京	蟲	.....	二	
二	蚜		蟲	.....	九	
三	埋	葬	蟲	.....	一〇四	
四	螢			.....	二〇	
五	水	中	の	蟲	.....	二〇
六	蝶			.....	二九	
七	秋	の	蟲	.....	二九	
八	鈴		蟲	.....	一四八	
九	松		蟲	.....	一五一	
一〇	鐘		叩	.....	一五三	
一一	草	雲	雀	.....	一五	
一二	蝨		蝨	.....	一六〇	

二三	蟋	蟀	.....	一六四										
二四	螿	蟲	.....	一七〇										
二五	蝮	蝮	.....	一七二										
二六	蟻		.....	一七六										
	イ	菌	を作る	蟻	.....	一〇一								
	ロ	穀	物を	收穫	する	蟻	.....	一〇五						
	ハ	牧	畜	を	する	蟻	.....	一〇八						
	ニ	腹	に	蜜	を	貯	へ	る	蟻	.....	一一一			
	ホ	奴	隸	を	使	つ	て	生	活	す	る	蟻	.....	一一四
	ヘ	狩	獵	の	み	を	事	と	す	る	蟻	.....	一一八	
二七	蜂			.....	一二五									
	イ	蜜		蜂	.....	一二六								

口 卵を温めてかへす蜂……………二四一  
 ハ アナーキズムの胡蜂……………二四二  
 ニ 大工蜂……………二五三  
 ホ 壁屋蜂……………二六〇  
 ヘ 陶器師の蜂……………二六二  
 ト 蜘蛛狩蜂……………二七〇  
 チ 蜘蛛狩蜂の方向感……………二七三  
 リ 寄生蜂……………二七七  
 二八 白蟻……………二八二  
 二九 蜘蛛……………二九五  
 三〇 胡蜂の氣焔……………三〇三

# 蟲

農學博士 横山 桐郎 著



缺 蟲(はさみむし)

世の中がセチ辛くなつて生存競争が激しくなるに伴れて個人同志の情愛といふものは日に／＼薄くなつて行く、人口はもて餘す程殖へる、そして食ふ可き道巾には限があるから行儀よく列を組んで居たのでは何時食が得られるか判らない、斯うした世相は丸の内の公設食堂へ行くと直ぐ判る。喰はふ、生きやうとするには他人を押し除けて食券を買はなければならぬ。それには道徳とか人情に捕はれて居たのでは駄目だ、早く目的の場所へ着くには他人を突き飛ばして電車に

はさみむし



乗る可し、此勇氣が現代の人には生きる爲めに必要なのである。個人主義の發達は近頃の見ものだ、更らに此頃では此傾向が激しくなつて、親子兄弟の間にまでも及んで來て居る。親は親、子は子、小供がどんな事を爲やうと親の知つた事でない、所謂自由、放任、不干渉主義が流行して居る。人類生活の將來のため喜ぶ可きか、悲しむ可きか大いに考へねばならない。

此處に身分は賤しい蟲けらだが、非常に子供を可愛がる者がある。それは確かに昆蟲界の母性愛の代表者と言つていい。諸君は缺蟲といふ蟲を御存じであるか。

私達が夏臺所の近くの溝板をめくつたり、又は庭の隅つこに置き捨てた植木鉢を除かしたりすると、その下に一寸ばかりの黒い平つたい蟲がアタフタと駈けづり廻つて居るのを見る場合がある。彼は落ち付いた隠れ家を突然動かされたので驚いて駈け廻つて居るのである。その模様が如何にも狼狽を極めて居るので、見てはならない所を見て終つた様な氣がして、大いに氣の毒に感じる。彼は暫らく其邊を歩き廻つてから、又もと居た場所へもどつてシットして居る。そして早く元通りに蓋をして呉れと言ひたげな態度を見せる、然し此方がその要求に應じてやらないと遂

には諦めてチヨコ／＼と行つて終ふ。

體の長さは一寸ばかり、漆の様な光澤のある黒色である、そして小さな三角の頭の前には細い二本の短い觸角が生えて居て尻尾の先には釘抜形の武器を持つて居る。先づ此釘抜が素人の度膽を抜く、それに平べつたい體の格好と、テカ／＼と黒光りする背中とは確かにいゝ感じを與へない。その不氣味な光澤と、尻の釘抜とだけを見て大抵の人は恐い、氣味悪い蟲と思ひ込んで、下駄で踏みにおつて終ふのが常だ。實は蟲いぢり専門の私も此蟲には餘りいゝ感じを持つて居ない一人である。然し此蟲の心根、殊に其雌が昆蟲界稀有の愛情の持主である事を知つて居るから心無しな行は爲ない事に定めて居る。

前に言た様に溝板や、植木鉢を起した時に、時とすると其下に澤山の米粒の四分の一位の大きさの白いものと、此蟲とを見つける事がある。此白い米粒みたいなものは此蟲の卵で、其傍に踞つて居るのが母親である。

卵の數は多い時は百粒を越す事もあるし、又少ない場合には五六十粒の事もある。透き徹る様

な乳白色で舌の上に乗せると融けて終ひそうな美しさをして居る。

さて今から此蟲が卵を大事にする事と子供を可愛がる模様との話に移らう。

丁度入梅が上つたばかりの七月の中旬のある暑い日だつた。何の氣なしに庭の隈の石を起こした私は、其下の濕つた土の上に僅かの凹みを設けて、其處に卵の張り番をして居る黒光のする鉄蟲の母親を見つけた。いつもの好氣心が強い勢で私の心を抑へた。

私が石をはね起した刹那不意を喰つた彼女は餘程驚いたらしく、アタフタと卵の堆積の周圍を駆けめぐつたが、直きに卵のそばに落ちついて釘拔の付いて居る尻を心持ち上げ、かまそ繊細い觸角を交互に上下に動かし乍らジツト卵を見詰めて居る様子だつた。それは又何といふ落ち付きだらう、頭の上に山の様な大きな動物が、魔の様な凄惨な眼で見下ろして居るとは夢にも知らないと言つた態度である。或ひは夢想だもしない大椿事に忙然として終つたのだらうか、それ共虚勢を張つて居るのかも知れない。そう思ふと私も却つて小憎らしくなつて、落ちて居た枯木の小枝を拾ひ上げてソツト彼女の横腹を突つて見た。彼女は平氣だ。私は又突いて見た、でも彼女は動かない。

確つかりと地面に嘯り付いて居る。「此奴いやにすましてやがる」、そう思つて今度は少し強く突いてやつた、此三度目のお突きは可なりに利いたと見えて、初めて彼女は動き出した。でもそれはホンの僅かで卵のそばへ寄つて夫を口で觸れて見る様な振りをしたかと思ふと、又ちつと踞つてしまつた、四度目に私は「是ではどうだ」と心の中で言ひ乍ら棒の先で彼女の背中をグツト押へてやつた。此の私の亂暴な行に彼女は驚くよりは寧ろ憤慨したらしい。六本の黄色い足を擴げてファン張り乍ら鯨鯨立ちになつて尻の釘拔で棒を缺んで頻りと抵抗して居る。盤石の様な此の重味に對しても彼女は勝てると思つて居るのだ。だから私が棒をはづしてやると、さも自分の努力で拂ひ除けたと言つた風で、バタ／＼と駆け出し始めた。然し未だ彼女は其場を去る事が出来ないので。そこにある最愛の卵は見えない糸で彼女をつないで居るのだ。無情な私の棒の追撃は彼女の背上に落ち續けた。遂々私は無理やりに彼女を追つ拂つた。

翌朝又昨日元通りにして置いた石を上げて見た。そして其處には追拂つて終つた筈の彼女が卵の傍に昨日通りちゃんと踞つて居るのを發見した。そして昨日の事なんかすつかり忘れてしまつ

たと言つた風である。私は今度は先づ卵の堆積を少し崩してやつた、しかし彼女は和ら顔をして居る、今自分の眼の前で大事なく、卵が、見も知らない怪物の爲めに掻き廻されて居るといふのに一體何といふ冷淡さだらう、そう思つて今度は棒先を彼女自身に向けた。此行ひには道がに昨日懲りて居るためか、二度目の攻撃で彼女は逃げ出した。そして卵が崩されたのを見付けると、狼狽して夫を口で掻き寄せてから其上に乗つて體で抱く様にして觸角を細かく振はして居る。又私は棒で彼女を卵の上から突き落してやつた。『無情だと思はれてもしかたがない、實驗の爲めだから』と私は心の中で自己辯護をした。『立て続けの私の暴舉に若し腹が立つたら許して呉れ』そんな事を考へたりした。

結果はやはり同じだつた。逃げ場を見つげるやうな態度で其邊りを一寸歩き廻つた後又元のやうに卵の上に乗つて確りと抱きかゝへてしまつた。もう是で澤山だ、そう思つて私はソツト石を舊の通りに直して立ち上つた。

翌日は私は彼女を訪れなかつた。そして翌々日又見舞つた時には、もう卵は無くなつて居た。

其代り可愛らしい、子供がウヨ／＼と彼女の腹の下に蠢めいてゐるのを見た。母親が一寸ばかり

であるのに對して子供は一分程である。



母 鉄  
注 蟲  
愛 の  
代 の  
表 家  
者 庭

彼女は此の子供達に對しても卵に對した時と劣らない、否更らに／＼強い愛着を示して居る。

彼女は時々子供から離れて食物を探して來てやる、若し誰かゝ來て子供を奪はふとでも爲ると、一生懸命

にそれを防ぐ、私の棒先の攻撃に對しては手強く抵抗する。それは思ひなしか卵の時よりも強い

やうに思はれる。

高等な動物が其の子を可愛がるのは決して珍らしい事ではない、私は曾て東海道興津の水口屋旅館に泊つて居た事がある。其折旅館の庭の檻の中に母猿と子猿とが飼つてあつた。處がどうした拍子か、或る日の事子猿は死んで終つた。すると母猿は其子猿の屍體を抱いて非常に悲しんで居る様子だつたが、夫からと云ふものは其死んだ吾か子を確かりと小腋にかゝへて決して離さない、そして時々其子猿の體を調べては蚤を取つてやつて居る。夜睡る時にもやはり抱いた儘で睡る、實に寸時も手から放さないのである。そう斯うする中に日が経つて子猿の體からは異臭が立ち始めた、時分は未だ早春三月だつたが、それにしても興津の三月は既に東京の四月には當る、悪臭は日に激しくなり子猿の皮膚は赤く爛れてとても側へも寄れない、然し母猿は依然として放さないのである。

それどころではない、宿の男連が取り上げやうとして檻に近づかうものなら、牙を表はし眼をむいて飛びかゝらうとする、其劍膜の恐ろしさに大の男が一人として寄りつく事が出来ないので

ある。又幾日か経つた。腐敗は益々甚だしく、其悪臭は檻の近くの室の逗留客を激しく惱まし始めた。もう打ち棄て置く事が出来ないので、大勢の男が棒を持ち、竿を振つて檻の外から母猿を散々追ひ廻して、やつと子猿を奪ひ取る事が出来た、その時には子猿の體は腐つて赤剥げになつて居た。普通ならば到底見るも汚い腐敗つたものを、抱きかゝへて放さない母猿の愛着には一同が深く／＼感じたのであつた。これは高等動物の例だが、下等な蟲仲間では缺蟲位自分の子に愛着を示すものはない。蟲の中には子供のため随分注意深い用心をするものがある。或る蜂は生れる子供のために頑丈な家と豊かな食料とを財産として準備して置いてやる。又或る蟲は食物の山の中に卵を産んで、生れた子供に生活難の「せ」の字も知らせない様にしてやる。然し産んだ卵の側について居て夫を護つたり、生れた子供を抱いたりしてまで可愛がる蟲はメツタに無い。一旦卵を産んで終へば後は知らん顔の半平で、今産んだ卵が眼の前で喰はれやうと、潰されやうと、もうそんな事は御構ひなしといふのが一般の蟲の態度である、いくら心を使つても、それでは意味をなさない。要するに夫は本能的の行爲である。然し此缺蟲ではそうでない。彼女の示す行ひ

は確かに自覺し、意識した愛情の表現である。

此蟲は肉食主義で他の小蟲を捕まへて喰ふので益蟲となつて居る。だが又其肉食が崇つて時には吾々に有益な蟲まで喰ふ事がある。蠶を飼ふ家では、夜此蟲が蠶室に入り込んで来て大切な蠶を嘔ぢつたりするので害蟲として憎んで居る。私も職業柄此蟲を蠶業上の害蟲としてブラツクリストに載せたりして居るけれど、それは公の立場からの事で、個人としては大いに好意を持つて居るものである。

蟻 螂(かまきり)

暑い夏も過ぎて秋風が立ち初めそろ／＼郊外散歩の時が来て、草原などを歩いて居る折や、夕飯をすまして裏庭をブラ／＼歩いて居ると、ガサ／＼と葉擦の音がして、眼の前の灌木の小枝が動いたり、急に足元の葉が波打つたのにギクリとさせられる。音のした所を眼を据えて見ると、眞青な蟻螂が不氣味な格好をして、ジツト此方を見詰めて居るのに出遇はず。彼は細い足をふん張つて重さうな巾の廣い腹を支へ、長い頸を斜に前に突き出し、鎌形の前足を中段に構へ、眼をキョロ／＼させ乍ら寄らば一打と言つた態をして見構へて居る所は如何にも小憎らしい。殊に細長い頸の先に乗つて居る撞木形の頭と、頬のこけた三角の顔とは一層彼をして貧相に、そして意地悪そうに見せる。

實際彼は蟲仲間でも陰險で意地悪の親玉である。彼が其特異な鎌形の前足を折り曲げ中段に構へて獲物を待ち伏せて居る様子は、丁度豫言者がお禱りでもして居るらしく見えると言ふので

「祈禱蟻螂」等と呼んで居るけれど、實は是程の見損ひはない。如何に祈禱して居る振りをして神妙を装つても、其心の陰險と慘忍とは三角形の顔に十分表はれて居る。それは何うしたつて隠す事は出来ない。彼の詩人昆蟲學者フアブルは蟻螂の顔を平和な顔だと評して居るけれど、私にはどうしてもそうは考へられない。何處までも小面憎い顔付きとしか見えない。然しそれは見る人の心持で違ふとして置くが、兎に角彼は如何にも神妙そうな姿をして居るけれども、若し眼の前に何かいゝ獲物でも近寄つて來やうものなら、直ぐ様本性を發揮して終ふ。彼は飛鳥の如く眼の前の獲物に飛び懸つて、特異な鎌形の前足を擴げ、相手を引つ捕へ、腕の間に挟んで引き返へす。大抵な蟲は細かい齒の並んだ鎌と腕の間に挟まれたが最後、藻搔いても跳ね返つても到底も逃げる事は出来ない。だが獲物が大きくて、少し強そうなもの、例へばキリギリスや蝗蟲いなごとか言ふ者だと大分攻撃の態度が違ふ、そつといふ相手に向ふと、彼は普通の攻撃法を廢めて先づ威嚇的身振りでもつて相手を竦ませて終ふ。其凄まじい形相、翅を一杯に擴げ、細い四本の足を思ひ切り張つて中の廣い腹をもたせ、頸を垂直に立て、兩鎌を振り擧げ寄らば一打ちといふ形をする。此惡

魔のやうな妖姿を見ると、大抵な蟲は丁度蛇に睨まれた蛙の様に立ち竦んで終ふのである。

今言つた通りの姿勢で蟻螂は暫らくの間はヂツト身動きもしないで相手を見つめて居る。そして相手が少しでも身を動かすと蟻螂もヂリムとついて動く。

蟻螂が斯うした態度を探るのは敵を威嚇する爲めである事は疑ないが、又一面には自らも恐怖を感じて居る事も其素振りに表れて居る。

夫から又相手の隙を覘つて居る事も確かだ。要するに此奇態な姿勢は威嚇、警戒、打ち込む機會を覘ふといふ三つの心持の表現なのである。であるから彼は何時までもその儘では居ない。

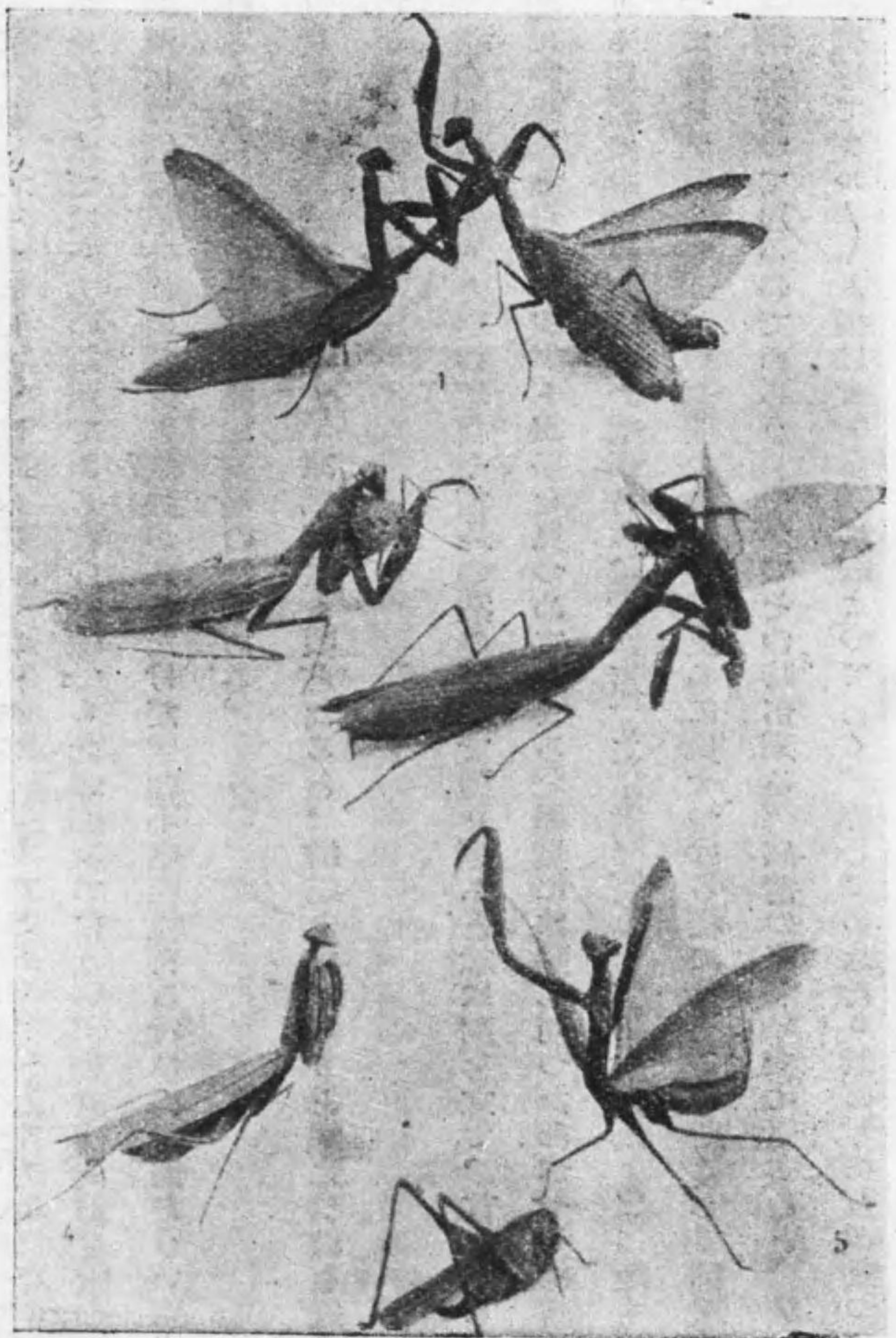
相手が十分恐怖を感じたのを見ますと、いきなり攻勢に轉じ、二本の鎌を相手眼がけて打ちつけ、敵の體を横抱きに押へつける。斯うなつてはもう萬事休すである、憐れな犠牲者が如何に反抗しても既に及ばない。彼奴は鎌の下で藻搔いて居る獲物の悲鳴等にはまるで無頓着な、至つて平氣な顔つきで、相手の頸筋からボリムと喰ひ始める。

蟻螂が獲物を捕へるのは一方の鎌で犠牲者の胴を擁し、もう一方の鎌で頭を押へて先づ頸筋か

ら嚙り始める、それ故何んな蟲でも忽ちに生命を取られて終ふ。そして藻掻いたり、跳ねたりしなくなる。それから蟻螂は悠つくり御馳走を味ふといふ寸法である。

蟻螂といふ奴は頗る貪食な蟲で、自分の體よりも遙かに大きいバツタなどを翅だけ残して他は足の爪一本餘さず奇麗に平らげて終ふ、その小さな弱々しい口で、あの堅いバツタの脚をポリ／＼音をさせ乍ら、克明に嚙んで呑み込んで行くのを見て居ると如何にも美味そうである。腹だけがバナ、の様に膨らんで、如何にも満腹そうに見えても、又新しい獲物を與へるといふくだけでも喰べる。

蟻螂が昆蟲界の追剥、辻強盗である事は今述べた通りだが、又同じ彼等の仲間同志でも到底も御話にならない程惨忍である。廣い自然界ではそうでもあるまいが、彼等を籠に入れて飼つて置いてウツカリ食物でも不足して餓えて來やうものなら、それこそ慘憺たる喰ひ合ひが始まる。だから彼等を飼ふには餘程注意して始終餌を絶やさぬ様に心がけねばならない。餌さへ十分にあれば道がの彼等も共喰の不道德はしない。



蟻 螂 百 態  
 1. 雌同志の喰ひ合ひ  
 2. 蝗蟲を喰ふてゐる處  
 3. 自分亭の主を喰ふてゐる女房  
 4. 御祈りの姿の蟻螂  
 5. 蝗蟲と共にとらふとす妖姿

だが此處に一つ特に許す事の出来ない事がある。それは妻君が其夫君を喰ふ事だ。夫婦の情愛の冷たい點では一方の旗頭である彼の蜘蛛でも此蠚螂程ではない。妻君が夫君を喰つて平氣な冷血漢には蠚螂以外には蟋蟀と蝸蟲があるだけだ。此不道德極まる行ひは一體どういふ場合に行はれるかと言へば、それは雌雄交尾の後である。

夏の炎暑も去つてそろ／＼涼風が吹く頃となると、蠚螂の雄は頻りと雌に秋波を送り、雌も亦雄を戀ふ様になる。

彼等がバツタリと庭の垣根や植込の葉の繁みで廻り遭ふと雄は胸を立て、首をかしげ、三角の顔に熱情を漲らしてジツト相手を見つめて止まる。卵巢には熟し切つた卵が一杯に詰つてフツクリト膨れた雌の腹の邊りの柔かさは、性慾に飢えた雄の心を誘ふのに十分である。雌も亦ジツト止つて雄を見詰める。その豊圓な肉體を殊更らに見せつける様に見える。斯くして御互ひに感情の高潮を待つて居るのであらう。やがてその時が来る。感情の高潮の極に達すると、雄はバツト翅を擴げてブル／＼と振はせ乍ら雌に近よつて行く、そしていきなり雌の背に飛び乗つて交尾を迫

る。雌は黙つてたゞ雄の意に委せて居る、斯うして彼等は數時間も戀に酔つて居る事がある、然し雌の方の心が冷えたが最後雄の生命はない。雄がどんなに強く雌を愛して居やうと、冷靜に返つた雌には問題でない、彼女は未だ彼女の背に嚙りついて居る戀人を捕へ、例に依つて其頸筋からモリ／＼と嚙り出すのである。

何といふ亂暴な、慘酷な仕打であらう。彼女は戀人の翅だけを残して他は足の爪まで腹の中に詰め込んで終ふ。それで居て何等の悲しさうな顔も氣の毒そうな様子も見せない、寧ろ當り前だと言はぬばかりの顔をして實に平然と舌甜めずりを繰り返して居る。そればかりではない、彼女一人の戀人を喰ひ終つた頃第二の異性が秋波を送ると直ぐ又其戀を容れる。そして此第二の戀人も喰つて終ふ、更らに又第三の男が寄つて來れば平氣で其求に應じて、その代り肉を與へた後は遠慮なく平らげに終ふ。フアブルは二週間の間に七匹の雄を喰ひ殺した雌のあつた事を報じて居る。何といふ恐ろしい鬼婆であらう、だが考へて見れば喰はれる雄も雄だと言ひたい。

蠚螂こそ變態性慾の代表者ではあるまいか、何しろ若し雄が喰はれる事を恐れるとしたら逃げ



る時間はいくらでもあるのである。然し雄は決してその機会を利用しない、喰はれるまで嘯りついで居る。圖に示した寫眞の♂は未だ交尾の快感から酔め切らない雄の頭を、冷靜に返つた雌が下から頸をふり向けて、喰ひついて居る所である。若し雄が雌に喰はれて満足ならばそれはマゾキズムである、雄を喰つて快感を覚える雌はサディズムである。

此の親にして此子ありと言ふか、逆に三つ子の魂百迄と言つたらよいか、兎に角蠶螂の子は又御五ひに喰ひ合ふ事を何とも思つて居ない。腹が空いて餌がなければ遠慮なく兄弟姉妹の中の弱蟲から片付けて終ふ。たゞ面白い事は小供時代には雄の方が雌よりも強いから女の子連は眞先に兄貴や弟の食ひ物になる、その代り一匹前になると今度は逆に女が男を喰ふので、小兒の時の敵打をする譯である。

諸君は蠶螂の卵を見た事があるか、それは丁度金魚麩の様な塊である。蠶螂の種類に依つて細長いのが多いのである。浮氣な雌の戀も終ると、此浮氣女にもお産といふ大役がやつた來る、すると雌は尾端から粘々した泡を出す。此泡は空氣に遇ふとちぎ固つて丁度金魚麩の様なものにな

るのである。彼女は此泡の塊の中に卵を産み込むので、此塊は樹の枝だの、垣根などにくつついで居るのをよく見かける。そして此金魚麩の中には三百位の卵が納めてある。卵はその儘冬を越して翌年の五月半頃になると可愛らしい子蠶螂がウヨ／＼と生れて出る。さすがに子蠶螂は可愛らしい、親に見る様な凄味はないけれど、若し一寸いちぢめでもすると小さな頸を立て鎌を擧げて向つて來る、其負嫌ひな所は決して親に譲らない。此性質は大きくなるに伴れて益々發達すると共に、遂には身の仇となり、助かる命も奪られて終ふ事となる。

神妙にして居れば無事にすむ所も、なまじ生意氣な反抗を示すために、惡童ならず共、善良な大人からでも小憎らしい蟲と思はれて、下駄でもつて踏み潰されたりする。「蠶螂の斧を振つて龍車に向ふが如し」の例へ通り、彼が負嫌な事は有名である。慎む可きは要らぬ意地と空威張りである。

日本には居ないけれど、熱帯地方へ行くと、いろ／＼な蠶螂が居る。巧みに薔薇の葉の形を眞似たり、枯葉、夫から或る奴は花に似た形を備へて居る。そして葉の繁みや、花の間にジツト佇

づんで居て、何も知らずにウツカリ近づいた蟲や、花だと思ひ違へて寄り添つて來た蝶を、いきなり例の鎌でヒツ捕へて終ふ。そうした點に於て自然は實に巧みな細工を此蟻螂に與へて居る。

## 蚤 (のみ)

世の中の小さなものゝ中で蚤程ある偉大な力を持つた蟲は他にないと私は蚤に對して敬服して居る。それは何ういふ力かと言ふのに千萬語の説明よりも次の川柳が最もよく言ひ表はして居る。

「蚤一つ娘さかりを裸にし」

幾千倍にも擴大して窺はなければ眼に見えない様な微菌でも、よく吾々の様な大きな動物をたつた數時間で斃す事も出来る、しかしそれは要するに數の力だ、どんな猛烈な病菌でもたゞ一匹きりでは全く無力である。そこへゆくと事柄は少し違ふけれど蚤の力は實に大したものと言はねばならない。兎に角私は蚤の事を考へる度に、此一句を思ひ出して作者の奇才に感服し、蚤の偉力を痛感する。

・蚤が出始めるのは東京邊では先づ五月の中頃からである。爽かな初夏の寝心ちが此蟲のために臺無しにされると「もう蚤の奴め出たナ」と實に忌々しく思ふ。

色々な血を吸ふ蟲の中で私は蚤が一番嫌いだ、何故かと言ふと、それは蚤の食ひ方が氣に入らないからだ、同じ血を吸ふにしても蚊の方が未だ我慢が出来る、蚊は蚤よりも正真だ。彼は決して黙つて吸はない、羽音をたて、警告を發し乍ら近づいて来る。此警告も随分不快なものではあるが蚤のやり方よりは未だ赦すべき點がある、處が蚤となると、何の前觸れも豫告も無しに唐突にチクリとやる、それから又蚊の方は一旦場所を決めると其所で腹一杯吸ふから宜いけれど、蚤の奴は蚊と違つてあつちこつちと少しづつ吸つて歩き、所謂チビく喰ひをやるから喰はれる方は者は堪らない、今腋の下がチクリとしたかと思ふと今度は横腹が痒くなる、次には腰がムズムズすると言ふ工合に轉々として決して一ヶ處にジツトして居ない。だから一匹蚤が居やうものなら、それこそ體中が痒くなつて詰りは我慢がし切れずに、若い女の身空であり乍ら、裸體になつて迄も見つけて捻り潰してやらうといふ氣にもなるのである、そして又蚤に喰はれた者が蚤に對して如何に痛烈な憎しみの念を持つかは平常は蟻一匹も殺さない氣の弱い女でも、蚤といふと血眼になつて探して平氣で爪で押し潰すのみか、又時には他人の場合に迄口を出して、憎らしいから火鉢の中へくべておやりなさいよ」等と火あぶりの極刑を主張したりするのでも頷かれる、そう言ふ私等も蚤嫌いであるだけに、蚤の罪に對してはいつも極刑を求刑する鬼檢事の一人なのである。

斯様に人間からひどく嫌はれる者の蚤は一體何うして出来るものかと云ふ事になると、先づ大抵の人は知らないばかりか、蠅に對して持つて居ると同じ様に蚤も亦塵埃の中から自然に湧いて、それも來るものと定めて平氣で居る。苟くも生命のある者が種なくして自然に湧いて出る等と言ふ重寶な事は決してない。蚤はやはり蚤の卵から生れ、其卵は蚤の母親に依て産まれる。

、蚤の母親は疊の隙間や、疊と床板との間、夫から又家具の後ろに溜つて居る塵埃の中等に一度に十粒内外の白くて滑べくした卵を産む。此卵から夏ならば四、五日、冬でも十日もすると一分ばかりの細長い白蛆が生れて出る。此小蛆は親とは違つて塵埃を喰べて生きてゆく。親が生き物の生血を吸つて生きて行くのに又何といふ貧乏たらしい生活であらう。何んな高貴な人の懷にも平氣で出入する蚤も其お里を洗つて見ると、塵埃に埋れて成長した河原乞食の成り上り者にすぎ

ないのである。兎に角此蚤の小供は塵を食べ乍らも二週間も経つと、口から絲を吐いて白い可愛  
い繭を造つて其中で蛹になる。夫から更らに一週間程すると、いよ／＼一匹前の蚤となつてとび  
出して来る。そして昨日までの塵埃浚ひは忽ちにして今日は恐ろしいバンバイヤと變つてしまふ、  
全く驚く可き性質の變化である。

蚤は随分飢餓に堪へる。三十日位は飲まず食はずに平氣である。夏休に歸省した學生が九月に  
なつて故郷から歸つて來ると、寄宿舎の疊の下に長い斷食のためゲソ／＼に瘠せ細つた蚤共が、  
待つて居ましたとばかり押し寄せて、折角國元で仕入れた榮養分を遠慮なく吸ひ取つて終ふ事は  
誰しも知つて居る。

さて今迄書いて來た事だけでは蚤は一向に藝無しとしか思はれないが、あれで却々隅に置けな  
いのである、第一に蚤が自慢してもい／＼のは高とびと巾とびの大選手である事だ。彼がその發育  
のい／＼後脚に力を入れてピンと一と跳ねると、高さなら七寸餘、巾なら一尺位はとぶ。今蚤の  
大きさを平均六厘として、自分の體の百十倍の高さ、百七十倍の距離を飛ぶ譯で、比例から言ふと

人間のオリンピック選手などとても足許にも寄れない。

又蚤は馴らしている／＼な藝を仕込む事が出来る、無論それには一方ならぬ苦心が要るのであ  
るが、今から百年程前佛國巴里では蚤の見世物が大流行をした事があるそうである。例へば、蚤  
に木で作つた小槍を持たせて軍隊式の運動をさせたり、玩具の馬車や砲車を引かし見物人は蟲眼  
鏡をもつて覗いたのだそうだ。

蚤は血を吸つて嫌がられるばかりでなく、其最も恐ろしい事は彼のベストの媒介をする事であ  
る。元來ベストは鼠の病氣なのである、それを蚤が人間に傳染させて餘計な苦勞をかけるのであ  
る。だから人間にベストが流行する一、二週間前には先づキツト鼠仲間が大流行をするのが例だ。  
そして其鼠のベストは蚤を通して人間に移る。ベストを媒介する蚤には八種あるが其中で一番傳  
染役の頭梁は印度蚤といふ奴である。之が鼠から人へ移つてベスト菌を人體に傳へる。何にして  
も蚤は厄介ものである。そこで此厄介者を退治するにはどうしたらよいかといふのに、先づ室内  
をよく掃除して清潔に保つ事が第一義である。そして疊下に新聞紙を一面に敷き詰め且つ枯桃の

葉を散布するのがよいが又松葉を敷いてもよいそうだ。然し何と言つても蚤退治に一番利くのは除蟲菊である。これさへ一罐用意して居れば敢て恐るゝに足りない。

「蚤しらみ音になく秋の蟲ならば

わが懐は武藏野の秋」

蠅 (はひ)

「逐へば又來る未練な蠅を

そつと睨めば拜む真似」

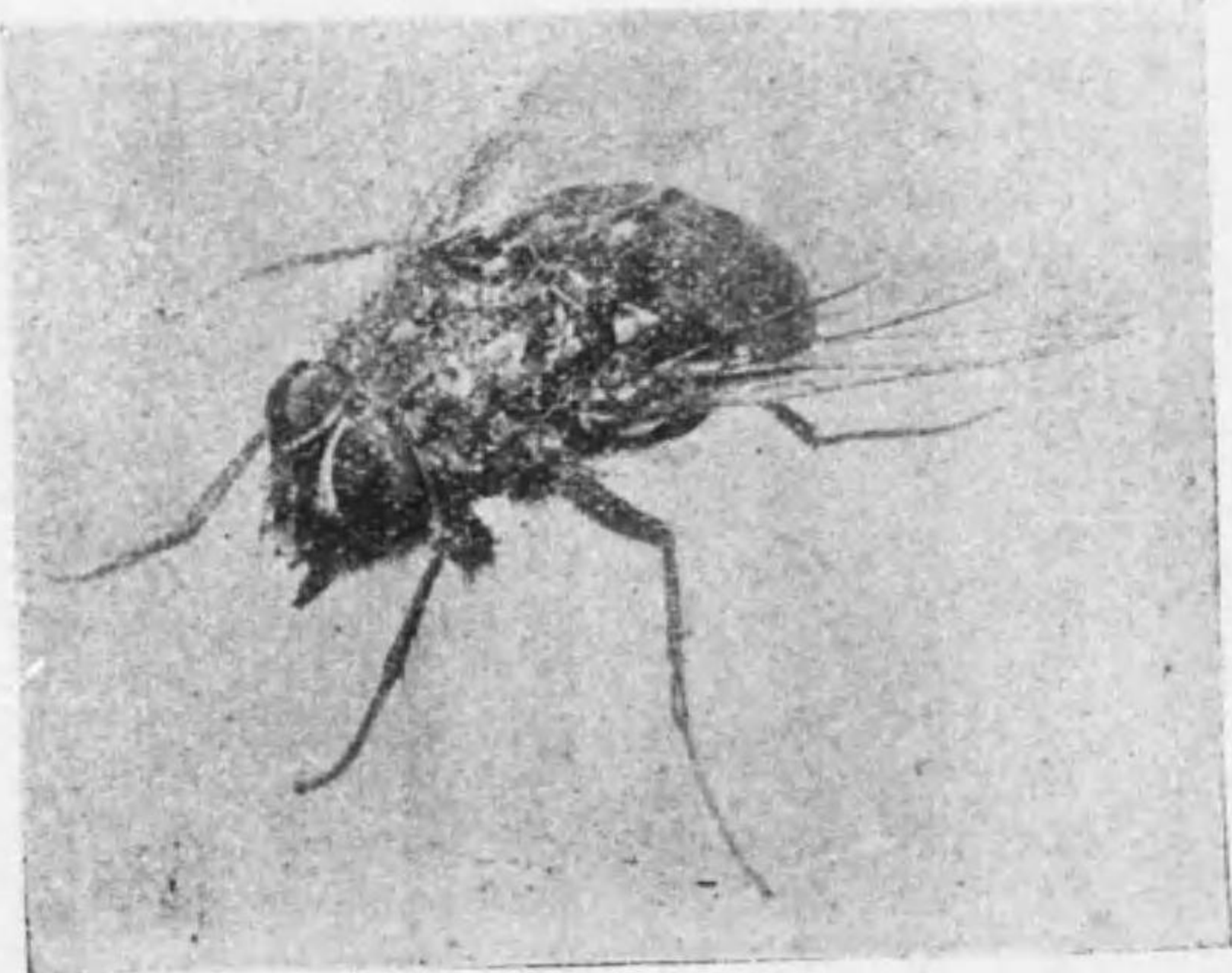
これは私が未だ高等學校時代に萬朝報の俚諺正調欄で見た或る人の名吟である。作者は忘れて終つたけれど、實にうまくよんだものだ。私は心から感心してしまつた。

蟲の中で何がうるさいと言つて蠅程うるさいものはあるまい。晝寢をして居ればすぐにやつて來て額へ止る、鼻へたかる、逐へば逃げはするが又すぐ無粋な羽音を立て、近よつて來る、少し遠くへ行つたかと思ふと足のあたりをムズ／＼と這ひ廻る。いくら忌々しくも相手は翅があるの  
で捻り潰すわけにも行かず、止つて居る場所が自分の額である以上平手で叩き潰す事もならず、晝寢の蠅程癢に觸るものはない、又食事時に食卓の上を吾がもの顔に飛び廻つて吾々の御馳走を遠慮なく甜めて歩くに至ては、誰しも憎惡の餘り手を揮つて叩き撲らうとする、然し要領のいゝ

蠅は却々吾々の手などに撲られるやうなへまはしない、吾々の手先が未だ肝心の箇所に着きないうちに早くもとびのいて、御膳の角にヒヨイと降りてすまして居る。そして彼を見ると前脚で頭を撫で廻し、それから又二本の前脚を擦り合せて頻りと拜む真似をして居る、おまけに又後脚までも擦り合せたりして居る、その滑稽な様子、無邪氣な身振りを見ると、今が今まで沸騰して居た憤激の心も思はずやはらいで、振り上げた手を下ろす事が少くない。斯うした情景を巧みに二十六文字の中によみ込んだのが初めに出した俚諺正調である。

晝間の蠅も随分うるさいけれど、更らにうるさいのは夜の蠅である。夜の蠅とは一體どういふ蠅かと言ふのに、別に夜に限つて出る種類の異つた蠅があるわけではない、やはり晝のものと同じ蠅だが、たゞそれが夜出て来た場合の事である。云ふ迄もなく蠅は晝のもので、夜は活動しないのが常だ。夕方になると彼等は草の影に入つたり、庭木の葉の裏に隠れたり、又家の中なら大抵は天井裏に止つてジツト睡つて居る。晝間のやんちゃに引きかへて夜はおとなしい、そういふ點は悪戯小僧そっくりである。處が時によると、此悪戯小僧さん何うした拍子か眼を覺して、電燈の

光に誘はれて飛び出す事がある。



(大 廓) 蠅

いかと氣兼ねしく飛んで居るらしい、この氣兼ねした飛び方が堪らなくじれつたいものだ。私

は  
ひ

は晝間の蠅も嫌いだ。が此夜の戸迷ひした蠅が又大嫌いである。それに此夜戸迷ひする奴は、小形な家蠅よりも大形な肉蠅等の方に多いので尙更らうるさい。この私のいふ夜の蠅のうるさうに就ては誰も今迄八釜敷く言つた人はないやうだが、言はれてみれば誰しもキツト思ひ當るに相違ない。

蠅が人に嫌はれるのは何も近頃に始まつた事ではない、又吾々俗人ばかりではなく、彼の白河の賢者樂翁公すら次の様に言つて居る。

蠅てふ蟲は又なく憎し、晝寢の夢妨ぐるは怠りをいさむといふべければ、咎めむやうもなし、たゞ書など見、晝なんどかくころ、顔のあたりに一つ二つ止まるを追ひやれば、しばし彼方へうつり又とび来りとび去り、はては友多く集へて鬭争し、あるは得も言はれぬ振舞ひ狼藉なり。此文の中最後の一句に至つては白河翁の様な聖賢も餘程眼に餘る行爲として眉をひそめたらしい。全くいくら禮を辨へぬ蟲とは言へ、吾々の目の前でも、額の上でも御構ひなしに雌雄がふさけ合つたり、抱きついたりするのは許し難い氣がする。

それから又蠅の却々狡猾な事は、若し吾々が立つて居たり座つて居たりする場合に、彼等は背中とか頸筋、夫から頭等にたかるが決して胸や腹に止まらない事だ。彼等はキツトこつちの眼の届かない、又手の廻らない背後にとまる、そして頸筋から頭へかけて這ひ廻る、だから益々忌々しい。下らない事の様だけれど、注意して見ると蟲ケラとは言へ却々惻口なものだと感心する。

蠅に就いて特に考へさせられる事は彼等の食物だ。吾々が山海の珍味として尊重する最上の御馳走を見れば、直ぐやつて来て頂戴しやうとする贅澤振りを見せるかと思ふと、次には腐敗つた魚に對しても秋波を送り、微びた饅頭に横目を使ふと言つた浮氣者である。それは未だいゝとしても、吾々から見ても我慢する事の出来ないのは、彼等が糞便を好む事だ。如何に世の中は「藜食ふ蟲もすきずき」とは言へ、あの汚い糞便を天下の珍味とばかりペロ／＼甜めるに至つては、氣の弱い者は氣が遠くなつてしまふ。そして今糞便のグチャ／＼した奴を踏みにぢつた足で直ぐ食卓の馬鈴薯の上を平氣で歩いて居る、其汚なさ、不潔さは御話しになつたものでない。斯うして蠅共はチブス患者、赤痢患者の糞便から受けた細菌を遠慮なく食卓へ持ち運び、結核患者の吐き

出した痰を甜めた舌で吾々の額や鼻先を甜めて廻る、其危険千萬な事は言ふまでもない。

今言つた通り蠅がいろ／＼な恐ろしい傳染病の傳染の媒介をする事は實に驚く程で、從來學者の調べた所では次の様な諸病の傳染媒介をする事が明かになつて居る。即ち、

チブス、コレラ、ペスト、結核諸病、癩病、各種の熱性病、腫物類、眼病、睡眠病。

此を見ても蠅が殺人強盜共と並んで警視廳のブラックリストに乗つて居るのも尤も次第な譯だ、處で此厄介な蠅は一體何處から生れて來るのか、吾々は夫を知つて置く必要がある。

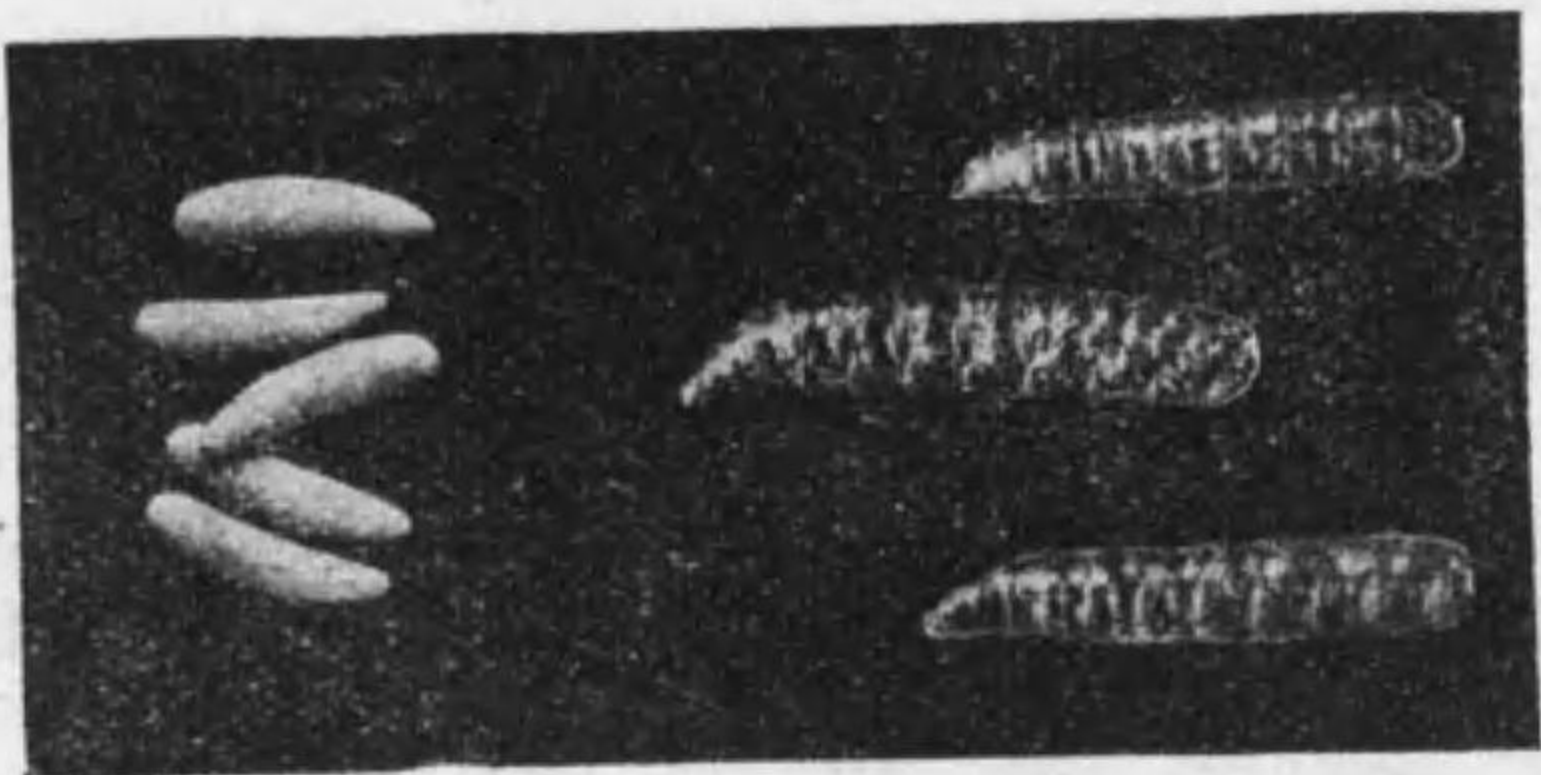
蠅の前身があの嫌らしい蛆である事は近頃の人は誰でも知つて居る。夏になると便所の糞壺の中にウヨ／＼して居る蛆、鼠や猫の死骸のドロ／＼した中を這ひ廻つて居る蛆が蠅になるといふ事は、誰も疑はないだけに一般の知識は進歩して居る。だが此蛆の前身は卵であり、其卵は蠅が産んだものだといふ事までは知らない人が多い。蛆は蠅になる、しかし蛆は腐敗つたものや、糞便中に自然に湧くものと思つて居る人が澤山あるらしい。「時かぬ種は生へぬ」といふ諺は決して植物だけに通じるものではない、總ての動物にも當て嵌る。蠅共が腐敗つた鼠の死や異臭紛々

たる糞便の上をマゴ／＼して居るのはたゞ其珍味に酔ふためばかりではない、彼等の雌は、御馳走

を甜める事以外に卵を産むといふ重大な仕事をもつて居る。そしてあ

ゝして汚物の上を歩き乍ら機を見ては卵を産みつけて居るのである。

其卵は一分にも足りない、兩端鈍く尖つた細長い形の、透き徹る様な白い美しくさをもつて居る。斯ういふ卵を一匹の雌は大體一回に百二十宛三四回に分けて産む、そして七八月の盛夏の候だと、八時間乃至遅くとも十二時間後には卵から幼蟲即ち蛆が生れる、此蛆が又親に負けない悪食黨で腐爛してドロ／＼になつた汚物や、鼻をつくやうな糞の中に身を埋め切つて平然と生活して居るのだから驚く、此恐ろしい悪食癖は後に出世して空界の生活に入つても尙脱け切らないで、汚物を見ると、すぐに、さもしくも甜めて見やうとするのである。「三つ



家の蠅の卵と蛆

子の魂百まで」とはよく言つたものだ。



此蛆は糞の中で四、五日生活した後、這ひ出して土の中に潜り込んで蛹になるのである、そして更らに四、五日たつと蠅となつてとび出す、其時には前とは似もつかない姿をし、六本の足と二枚の羅衣の様な翅をもつて自由に空中を飛び廻る事も出来る。

蠅の一代記は先づザット斯んなものである。處で皆さんも御存じの通り只蠅と言つても決して一種ではない。人家の内に見受ける蠅だけでも約十種類はある、然し其中で一番吾々の眼に親しいのは「家蠅」といふ奴だ。此はもう誰でも知つて居る蠅で吾々の家の中に一番普通に居る。そして蠅仲間でも一番執拗な性質の持主だ。夫から家蠅よりも少し小さくて「ひめいへばい」といふがある。之も前者に次で人家に普通な蠅である。又「肉蠅」或は「縞蠅」と言つて大形で背中に縦の黒い線をもつた蠅がある。之は魚屋や牛肉屋の店先に多い。

人家に入つて来る蠅の中で一番人にいやがられるのは「金蠅」といふ奴だ。それは名前を聞いただけでもア、あれかと諸づかれると共に、すぐ其後から汚物を聯想させる程此兩者は付き物となつて居る。金と緑とをとかして固め、それに磨をかけたとも言ひたい光澤／＼しい背中をして

居る。人糞や魚の腐つたのなどが大好物であるところから、そういふ汚物によくたかる爲ひどく嫌はれてゐる。然し此蠅を捕まへて顕微鏡、それが無ければ、せめて度の強い擴大鏡でも見れば、それこそ此蠅の色彩の美しいのに驚かない者はあるまい。たゞ氣味悪い金緑だとばかり思つた背中は五色の寶石をちりばめた様な鮮かさを放つて居る、一寸見ても刺々しいとしか見えな毛の一本一本の生え工合から曲り工合、眼の形、色、觸角の格好に至るまで一として藝術的作品でないものはない。若し此蠅が人糞や魚の腐つたものに來ないで花の蜜でも吸つて居るものとしたらキツト美しい蠅として人に好かれるに違ひない。それと反對に、女や小供に騒がれるあの美くしい玉蟲が若し此「きんばへ」の様に人糞好きでもあつたら、あの金緑の地に紫紅色の太い縦の線のある工合などは、毒々しい感を與へるものとして、醜汚その者として扱はれるに違ひない。人間が美しいとか立派だとかいふのも随分怪しいもので、背影や周囲の如何に依て奇麗なものも汚く見え、汚いものも美しく感じる。少し意味は違ふけれど、女學生等に多い現象として、一年毎に英語が好きになつたり、國語が好きになつたりする、そんなのを調べて見ると大抵は英語そ

のものに興味があるのではなくて、英語を教へる先生の好嫌に伴れて好きにも嫌いにもなるのである。

人間の感情程當てにならぬものはない。

## 蚊 (か)

私は蚤に次で蚊が嫌いだ。或人が「蚊は夏の景物として棄て難い所がある、夜涼みの折などに時々ブーンと羽音をたて、近づいて来るのを、團扇をバタ／＼言はせて追ふのなぞは夏の氣持の代表である。若し夏の夜から蚊をなくして終つたら、それこそ寂しい物足なさを感ずるだらう」と言つたのを聞いた事がある。蚊は確かに夏の景物だ、讀書のつれ／＼に投げ出した足の先が急に痒いのに氣づいて手をやると、黒い蟲がすつと立つて机の下の暗がりへ消えてゆく、「おやもう蚊の奴が出たナ」と思つたり、客と對談して話に氣を取られて時間の經つのも知らないで居ると、いきなり耳朶をかすめて唸つて來た蟲に日の暮れたのと、いつか夏が來た事とを教へられて、「オヤもう蚊が……それに大分おそく迄御邪魔いたしました……」等と長つ尻の客が腰を擧げる事がある。斯ういふ點で蚊も時に意外な手柄をしてくれるけれど、私はどうしても蚊を夏の景物だ等と言つて其存在を許してやる氣にはなれない。それは、確かに蚤よりはいい、幾分正直な所があ

るから、然しあの不快な羽音を立て、落ちつき拂つて血を吸ひにかゝる所はどう見ても好感が持てる態度ではない。彼は血を吸はふと思ふと、先づ場所の撰定からしてかゝる、飛んで来て一所にピタツト止つて吸ひにかゝる事は珍らしい、暫らくの間は此邊と思ふ場所の邊りをウロ／＼して居る。ヤツト此處ぞと思ふ所が定ると、其處に翔を下ろして足場を整へる、若し場所が氣に喰はないと少し歩いて其邊りを探し廻る、蚊の食ひに來たのをヂツト眺めてゐると、不器用な足つきでノソ／＼と横歩きをしてゐるのをよく見るものだ。さて愈々決心がつくと口吻を皮膚に斜に突き刺す。此時も口吻の先で、丁度盲人が杖の先で地面を探ぐる時の様な眞似をする、さて愈々口吻の刺し場所も決まると後ろ脚をピンと斜に後ろに跳ね上げる。此が蚊が血を吸ひにかゝるまでの道行と、所作だが、斯うして見ると其落ち付いた態度にはかなり小憎らしさを覺える。そして初めの間こそ手でも振り上げれば逃げるけれど、少し血が廻つて來やうものなら一寸位おどしたつて平氣である。細い井筒の様な腹が徳利形に膨れ出し、毒々しい血の色が黒い腹の皮を透して見え出す項には彼はもうすつかり生血の味に酔つて居る。少しの振動位にはビクともしな

い、そつと指の先で上から押し潰されるまでジツトして居る。其陶醉振りと言はふか、圖々しきと言はふか、兎に角驚く可きものがある。私はよく故意と散々御馳走して置いて、彼が陶醉し切つて居るのを見すまして、ピシヤリと潰してやる。甚だ意地が悪いやうだけれど、快樂に酔ひしれて居る所を一息にやられるのだから蚊としては苦痛を知らないで、現世の快樂から來世の安穩に旅する事が出来る譯だから却つて幸福だとも言へる。然し何時の間にか吸はれて居たり、又散々振舞つて、さて潰してやらうといふ間に、相手に先を超されて逃げられた時の残念さは又特別なものだ。

血を分けしものと思はず蚊の憎さ

丈

草

此一句こそ蚊に對する人間の氣持をよく言ひ盡して居る。

蚊にもいろ／＼種類があつて、蚊によつて性質も異ふ。夏東京邊で一番多いのは「ウスカ」と言つて體の淡褐色うすこげいろの奴である、これは性質も鈍い、それから眞黒なヤブ蚊といふのがある、これも餘り捌口な方でないが、非常に小形で「シロスチヤブカ」といふのがある。背中に銀色の縦筋があり、

腹と足には白横縞が入つて居る。所謂縞の腹掛に縞の股引といふ装束の奴である。此奴はメツタに室の中へ入つて來ないが、それでも時々ヤツテ來る、そしてそれは夜よりも晝である。ブンブンと細い聲を立て、頻りと體の周圍をとり廻つて却々止らうとしない。叩き潰さうとしても容易でない、而も小さな癖に刺されると非常に痒い奴だ。此蚊の爲に落ちついた讀書の心が亂されたり、切角の晝寝の快が目茶／＼にされたりして憤激する事が一と夏の間に決して少なくない。鬼に角小さな、黒い體の、縞の腹掛、縞の股引姿で晝間出て來て、ワン／＼言つて人體の周圍を煩さくたび廻る蚊と言つて置けば、大抵な人は其蚊にブ突りさへすればキツト「此奴だナ」と思ひ當るに違ひない。實にいやな蚊である。斯うして家の中へ入つて來て人の血を吸ふのは何れも雌で雄は決して血を吸はない、彼は外に居て草の葉に置く露を飲んだり花の蜜を吸つたりして生きて居る、雌の瘳猛に引きかへて又何と優しい生活ではないか、形も雌よりも雄の方が細形で優しい味がある。斯うして夏の人間を惱ます蚊共は一體何處から出て來るかといふ事それは先づ大概な人は知つて居る筈だ、どぶの中や天水桶の中を英語のSの字を書いて泳いでゐるぼうぶら子が蚊の幼蟲

である事は現代人には先づ説明を要しないと想ふ。

蚊の母親も蜻蛉の母親と同じやうに水の中に卵を産む、時に蚊が水の面を飛び乍ら尻で水面を



(上)雄と(下)雌の蚊

撫でる様な眞似をしてゐるのを見る事があるけれど、それは滅多にない、といふのは普通の蚊は晝間は卵を産まないからである、彼女が卵を産むのは夜中の二時

頃から明け方の五、六時頃迄である。だから吾々は産卵を見る事は滅多にない。元來蚊の活動そのものが夜間、それも先づ十一時以後である。それは態々蚊を飼つて調べて見ないでも、少し夜

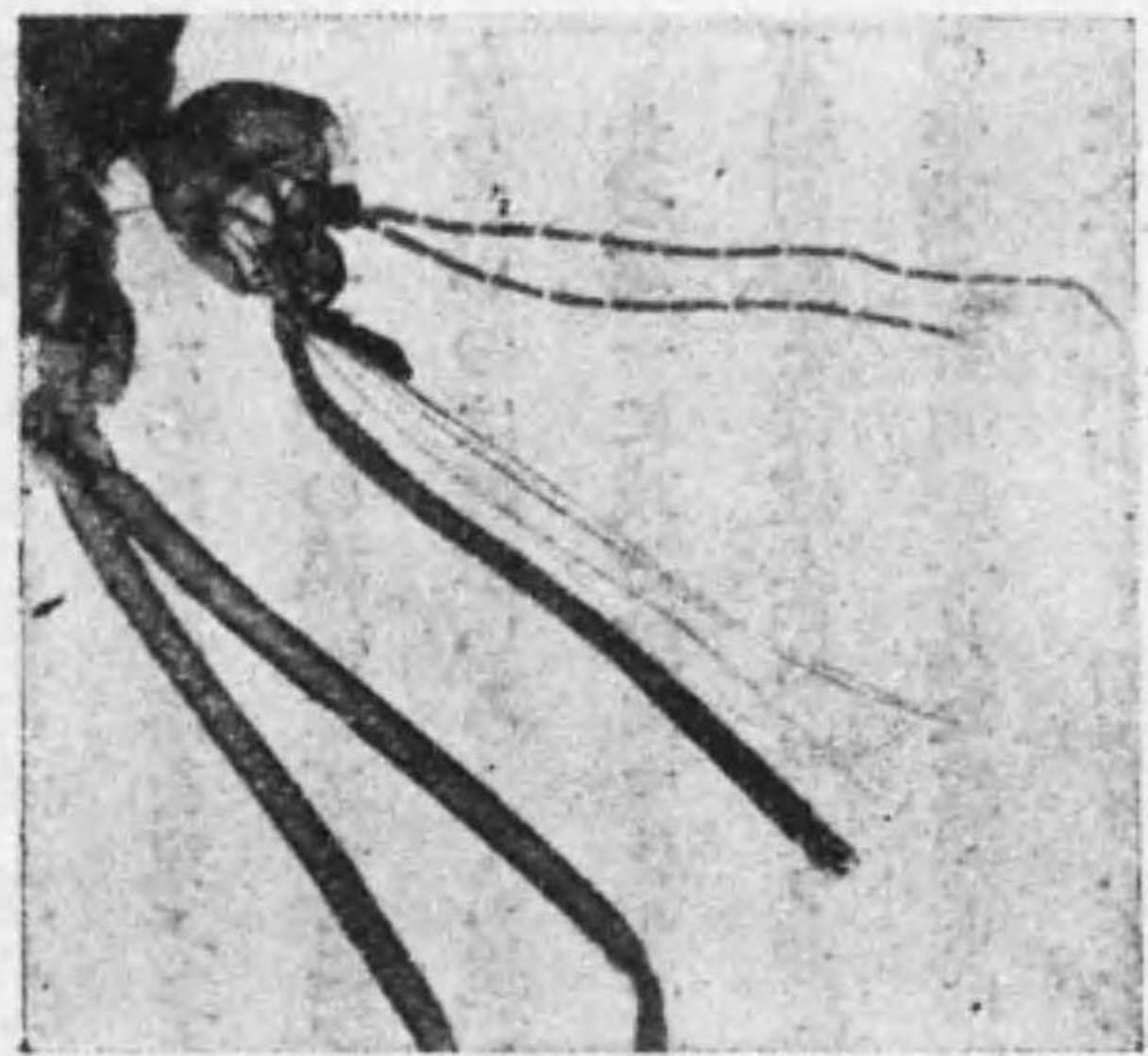
更かしをして見ればすぐに判る。私が此の事を知つたのはやはり態々蚊を飼つて見てからの事ではなくて、學生時代の試験勉強の夜更かしから知つたのだ。御多分に洩れぬ平常怠け者の私は、試験といふと、やはり人並の成績ほしさから、所謂一夜づけの調べをやつたものだ、冬や春先の試験は別として夏の試験に一番悩まされるのは蚊の奴の攻撃である。而もこつちが未だ睡魔と戦つて居る九時、十時——此時分に一時非常に睡くなるものだ——項は未だいゝのだが、さて此睡い時期も切りぬけて、周囲も静まり氣も落ち附いて、そろ／＼油が乗りかけた頃になると、今度は第二の強敵が襲ひかゝる。何しろ暑いので猿又一つになつて居る所へ相手は今こそ稼ぎ時ばかり遠慮なく飛びついて来るのだから堪らない、早速浴衣を引つかける、そして足を風呂敷で包んだりして防ぐけれど、又忽ち暑くてやり切れなくなる、と言つた工合で随分悩まされるものだ。而も十二時、一時は最も彼等の活動期で、此時分になると、睡魔も再び逆襲して来るので先づ大抵は參つて床の中に退去を餘儀なくされる。そして翌日相憎く見残した所でも出やうものなら「ゆうべは暑くておまけに蚊が居て駄目なのサ……」等と不出來と平常の不勉強の罪の大部分を蚊

に背負して辯護し自己満足を感じたりして居たものだ。

さて彼等が鬼婆の仕事をやめて引き揚げるのは明け方の三四時頃だ、此時分になるといつとな

く居なくなつて終ふ、天井の隈や床の間の蔭だのに行つてジツトしてゐる。だから蚊を早く追拂ふのは早く戸をあけて室を明るるといふ、此方法は夜活動する蟲に對しては大抵有効らしい、蚤の奴に應用しても効がある。

意外に無駄口を叩いてしまつたが、扱て蚊の母親は夜中の間に少なくて七、八十から多い時には百五十粒位の棍棒形の卵を産む、此卵は二日から長くて五日位で孵化つて幼蟲となる。此幼蟲が所謂子子といふ奴である。此子子は水



蚊の頭と口吻

の中に浮いてる細かな有機物をたべて生長し、五、六日の間に四度皮を脱で蛹になる、此蛹といふのは頭デツカチで猫背でそのくせ腹が小さく、まるでせむしの様な格好をして居る。そして頭

には二本の細いラツバ形のもがとび出して居る。これは呼吸をする管で蛹先生は水面に浮び乍ら此ラツバを水の上に出して呼吸をして居るのである。そして若しも何かで突つて見ると、ヒヨコヒヨコと水の底に沈んで行くが、暫らくすると又ボカリと浮んで来る、頭に角が生へて居るといふ所から此蛹の事を鬼子子と言つて居る。

蚊の一生涯の様はさつと斯んなものである。最後に蚊に連がつて是非共知つて置かなければならないのは蚊がいろ／＼な恐ろしい傳染病の傳染の仲介をする事だ。

先づ第一に或る蚊はマラリヤ熱、俗にいふおこりの傳染の仲介をするので有名だ。しかしこれは普通の蚊とは違ふ「ハマダラガ」と言つて翅に斑のある蚊である。そして此蚊は血を吸ひに止る時の姿勢が普通の平凡な蚊共とは大變違つて居る。普通の蚊は水平に止るけれど此奴は尻を上げて斜に止る、如何にも垢抜けのした氣取り方に見える、そして普通の蚊と比べると刺し方が強く「チクリツ」と来る、だから少し注意して居ると刺した時の感じだけで直ぐ區別がつく。此蚊が「マラリヤ」の患者にたかつて血を吸ふと、血と一處に血液中を泳いで居る「マラリヤ」の病原蟲ま

でも吸ひ取つてゆく、そして又他の今度は健康な人を刺した時に、患者から受けた病原蟲を唾液と一處に健康者の血液の中に残してゆく、斯うして「マラリヤ」は「ハマダラガ」を仲介者として甲から乙へ乙から丙へと傳染して行くのである。けれどもいくら「マラリヤ」の病原蟲が居ても此「ハマダラガ」さへ居なければ決して傳染するものではない、又此逆も眞で、いくら「ハマダラガ」が澤山居ても「マラリヤ」の病原蟲さへ居なければちつとも心配する事はない、現に東京にも此「ハマダラガ」は随分居る、殊に海岸地には一層多い様だが「マラリヤ」の病原蟲が居ないから安心して居られるのだ。

此他熱帯地方へ行くと蚊がいろ／＼な恐ろしい熱病の媒介をする、「シマカ」といふ縞の腹掛股引組の一種は黃熱病の傳搬役を務めて居るし、又「フィラリヤ」病といふ恐ろしい病菌の中間の宿主を承つてゐる蚊もある。兎に角蚊は温帯地方では血を吸ふ位の所でさしたる事もないけれど、熱帯地方へ行くと仲々輕視出來ない。

『いとど尙そともの梢茂りあひて』

煙に暮るゝ里の蚊遣火』

四六  
西  
行

など、言つて呑氣な事を言つて居られるのは温帯地方の泰平民ばかりである。

蜻蛉 (とんぼ)

私は東京に産れ東京で育つたので地方の事は知らない、又東京附近の田舎の事も知らない、然し東京——それも實は下町の方の事は詳しくないのだが、——少なく共私の住んで居た山の手、(私は今千駄谷に居るけれど、三十年間牛込に居た)では、蟬や蜻蛉を取る事が、小供達にとつて、暑中休みの重要日課である事は確かな事だ、尤も山の手でも金持の小供達は、休みになればサツサと避暑に出かけて終ふから、蟬や蜻蛉に眼を呉れたりしてゐる心の餘裕も慾もないけれど、普通避暑にゆく餘裕なんか持たない家庭の男の子達は、大抵蟬取り蜻蛉さしに熱中する。朝寝坊の大人連が、やつと朝飯をすました八時頃には、彼等はもう近所の森の探險をすまして歸つて来る。

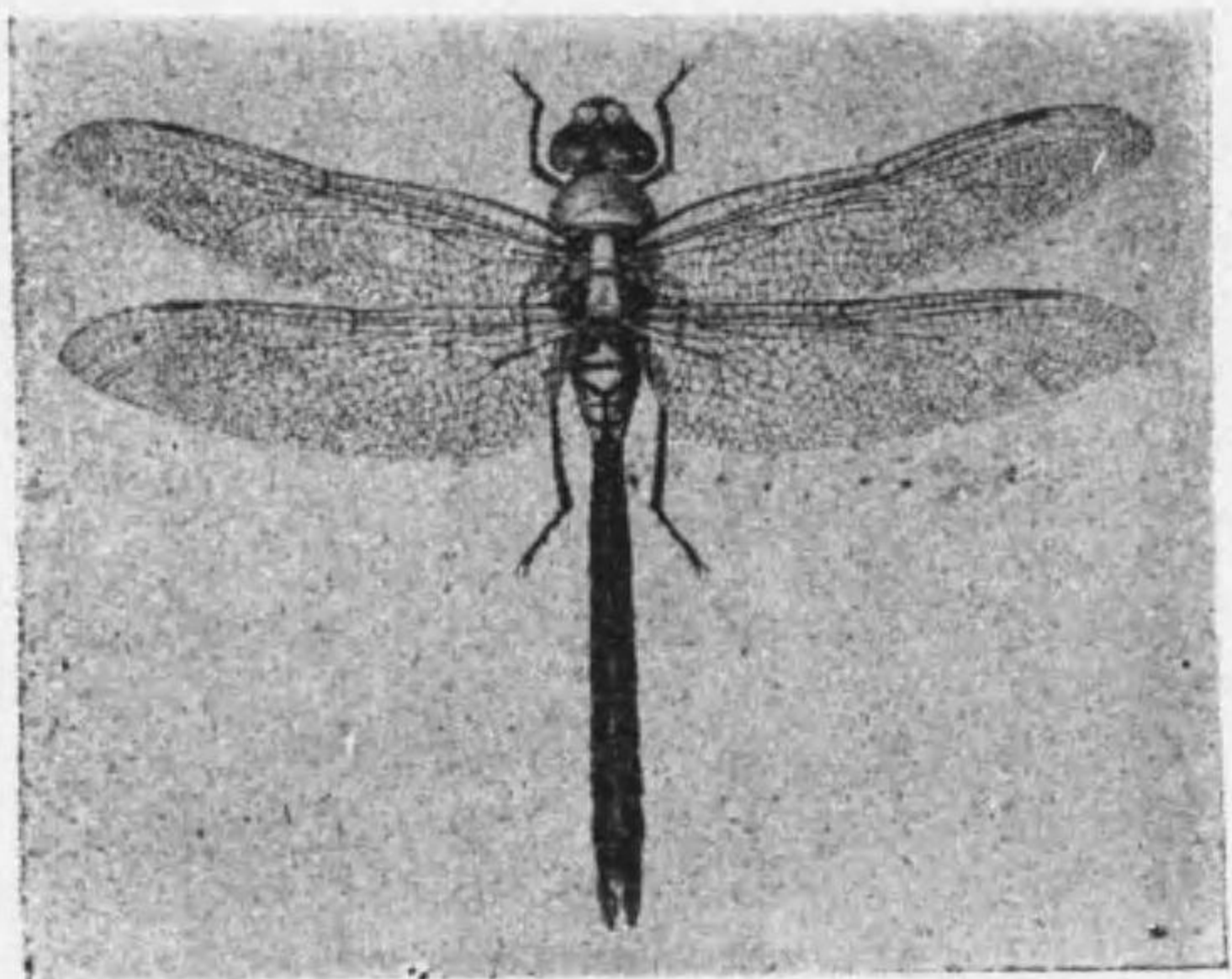
「やい、ギンだぞウ、羨ましいだらう……」

斯う言つて行き合つた友達に威張つて居る男の子の手を見ると、キョロ／＼した黒すんだ緑の眼、鮮かな緑の胸、その後ろの方が空色のぼかしてもつて茶褐色の長い尾に連がつて居る大きな

蜻蛉が、モチだらけの指の間で頻りと虚空を掴むで居る、そして大きな口を見つとも氣もなくバク／＼とあけ、六本の毛むくぢやらの脚を振はせ、尾を巻いたり伸ばしたりして如何にも情なさうにもがいて居る。

此一匹の蜻蛉が、東京の子供にとつては、倒底も／＼貴い寶物なのだ、此蜻蛉を一匹取るのに彼はどれ程汗を流して居るかわからない、では小供達は捕まへた蜻蛉を立派な籠に入れて大切に飼つてゝも置くかと言ふと、決してさうでないから面白い、東京の小供達で、蟬取りや蜻蛉さしに出かけるのに、籠を持つて行く者は殆どない、先づ大抵は手持である、蜻蛉なら指の間に挟むし、蟬なら握つて持つてゐるか、でなければ兵兒帯の間に巻き込んだりする、たまに鳥籠をもつてそれに入れて歩いてゐるのを見かけるが、そんなのは上の上で、いゝ方でもキリギリスの籠位なものもある、でなければボール箱を小脇にかゝへて其中に入れたり、或ひは鼠取器をブラ下げて入れ物代りにして居る、こんな點は小供の淡白無關心な事をよく示してゐて實に面白いと思ふ。

一と口に蜻蛉と言つても實は随分種類のあるもので、大きなヤンマから小さなイトトンボまで



ギンヤンマ

合せると、日本だけでも百種餘もある。然し何と言つても人によく知れて居るのは、ヤンマ、ギンヤンマ、シホカラトンボ、ムギワラトンボ等である。そして小供達が一番珍重するのはギンヤンマだ、此は大形の蜻蛉で、褐緑の大眼玉を持ち、胸は青緑色を帯び、それに續いて尾は雄では青藍色、雌では少し褐色が／＼つてゐる。東京の小供達は雄の事を單に「ギンヤン」と呼び、雌の方を「チャン」と言つて居る、處が雄の翅は透明無色だが、雌の翅の基の方は金茶色のボカシになつてゐて、蜻蛉によつて此色の濃いものと薄いものとある、そして此色の濃いもの程値打があるので、普通より少し濃いのは之を「シブチャン」と言ひ、更らに一層濃いのに特に「ボロチャン」なる名を奉つて尊重する。東京の小供達が此「ボロチャン」なるものを見つけた時の狼狽方と、捕まへた時の得意さとは確かに見物であ



大形の蜻蛉では「オニヤンマ」等といふのがあつて、體の長さ六寸にも餘り、其悠々として飛んで居る所は、正に英語の Dragon-fly (龍蠅)といふ名を思ひ出す、しかし餘り大きすぎると、黄色と黒との縞が毒々しい感じを與へるために餘り喜ばれない傾がある。これよりも少し小形で、尾の先に圓扇形の附屬物がついて居る「ウチワトンボ」といふ方が尊ばれる、しかし小供達は此を「ウチワトンボ」とは言はないで「オクルマ」と呼び捨てゝゐる。何れも此れも皆夫相當小供にとつての重要蜻蛉だ。すつと下ると「シホカラトンボ」「ムギワラトンボ」がある。これは斯うして二つの名で呼ばれて居るけれど、實は同じ蜻蛉の夫婦なので、「シホカラ」が雄「ムギワラ」が雌である。今迄書いた蜻蛉は皆な勇壯活潑なものばかりだが、蜻蛉の中には又實に優しい風雅なものが少なくない、その中でもよく知れてゐるのは、「カハトンボ」「ハグロトンボ」の類だ。

新緑が日に濃くなつて、灰色の空から細い雨がシトシトと降る時分から、田舎の田圃道や、小溝の畔の草の間をひらりと飛んでは、すぐに又草の葉に止つて不思議に眼をキョロつかせて

ゐる眞黒な蜻蛉がある、胸は青緑の光澤をもつて、その先に青黒い、細竹をつなぎ合せたやうな尾がついて居る、淋しい田舎道の一人歩きの時や、静寂な池の畔のそゞろ歩きに、此蜻蛉に合ふ



種一ボントワカ

と何とも言へない眩滅悲哀の氣がする、「池畔」などいふ題の日本畫に、蓮の葉と一處に描かれるのをよく見る、此蜻蛉によく似て、半ばすぎ徹つた赤褐色の翅をもつたのが、やはり川邊に居る、之も却々趣のある蜻蛉で「カハトンボ」の名がついて居る、しかし翅

が赤いのは雌で、雄は綾羅の様に白く透き徹つた翅を持つて居る。

かんざしの後をよなく川蜻蛉

蜻蛉やとりつきかねし草の上

芭蕉

などは何れも「カハトンボ」の風情を吟んだものである、此他水邊や雑草などの間には、絲の様な細い蜻蛉が居る、所謂「トウスミトンボ」といふ奴である。形が餘り小さいので小供には大して喜ばれない。先づたまに弄み半分に捕まへられ、いちり廻された上句潰される位の所だ、然し此蜻蛉が音もなくスイ〜と草の葉から葉へ移つてゆく様子は、確かに他の蜻蛉には求める事が出来ない神秘の感がある。

蜻蛉といふと、誰しも直ぐに空を考へる、それ程蜻蛉は空中のものとして知られて居る、だが世の中の物事といふものは實に意外な事が多く、美しい蝶や蛾は、あの醜い芋蟲毛蟲の後半生であつたり、吸血鬼の蚤や蚊の前身が、塵芥浚ひの蛆や、濁り水に浮ぶ「ボウフラ」であつたが、今述べた蜻蛉の前身は一體何であらうか。

蜻蛉の生涯は先づ水中生活から始まる、總て蜻蛉の母親は水の中に其卵を産むのである。

蜻蛉が尻でなぶるよ大井川



蜻蛉の前半生

一 茶

といふ一句は有名なものだが、これが蜻蛉の御産である、私達の小供時代、いや現代の小供達でもやはり同じだが、蜻蛉が卵を産んで居るのを見て、尻で水を飲んで居るのだと思つて居たものだ、だから捕まへた蜻蛉が弱つたりすると、尻を水溜に突つ込んでやつたりして、蜻蛉が不愉快さから尻を振はせるのを却つてそれを嬉しが

つて居るのだと疇違ひして、益々尻を水につけものであつた。

（兎に角母蜻蛉によつて水面や水中の草の葉に産みつけられた卵から、數日の後には小さな幼蟲が生れる、此幼蟲は俗にヤゴといふ奴で、蜻蛉の種類で形も違ふが、何れも親の如何にも輕々しい装束に對して實に醜い姿の持主である。其泥色——これは幼蟲自身にとつては大切な保護色なのだが——の肥つた、そして丈の短かい體、平べつたい腹、意地悪そうな眼、傲慢其ものを示す様なフン張つた脚つき、一つとして優美な點はない。而もその落ち付き拂つた、ノソノソとした歩き振りは、一層彼をして氣味悪く思はせる、殊に此ヤゴの特徴はその下唇である。野蠻人の中には、幼い時から下唇に木の框を嵌め無理に引き伸ばして、其出つ張つた程美男美女として尊ぶ人種があるけれど、蜻蛉の幼蟲では下唇が無やみと發達し、長く延びて腕の様になり、其先に釘抜の様な鉤がついて居る、此異様な唇は、平常は胸の下に褶み込んで隠して居るが、何か眼星い獲物が近づいて來ると、彼はいきなり此唇をニュツト伸ばし、其先についてる釘抜で獲物を掴むで終ふ。

其風采通り、ヤゴは頗るの食家である。自分より弱い水蟲と見れば誰彼選まず攻撃する、だか

ら時には幼魚を捕まへて食つたりして、養魚家から睨まれたりする事もある。斯うして彼は、大抵八ヶ月内外も水中生活をして居る中に、段々成育してもう成熟し切ると、水を出て水邊の草の葉に這ひ上り、ジツト靜かに止つて居る。愈々此水中の醜いヤゴの上にも昇天の幸運が來たのである。暫らくは全く靜止して居るけれど、やがて激しい身振ひと共に背中が縦に裂けて、其裂目から先づ蜻蛉の頭が覗く、次で胸が現はれる、すると今度は、脚をそろ／＼と引き出す、此こまで來ると、彼は體を仰向けにして垂れ下り、暫らくはジツトして未だ弱々しい脚が風に當つて固くなるのを待つて居る、やがて脚が丈夫になると、體を振つて頻りと掴むものを求める、しかし何も掴まるものがないと、ウンと體に力を入れて急に跳ね起き、脱け殻の頭若くは最初の棒にしがみついて起き上る、それから今度は尾を抜き出す、スツポリと尾が抜け切ると、彼はそろ／＼と歩き、少しばかり登つてそこで靜かに休む、そして翅の固まるのを待つてゐるのである。三十分の後には、彼はもう空中高く舞つて自由な廣い天地に活動してゐる。

斯うして水を出た蜻蛉は、空の生活に入つても盛んに勇猛振りを發揮し、いろんな蟲を取つて

喰べる。殊に蚊を取つて喰ふ事は素晴らしいもので、ある學者の調べによると、ある蜻蛉は、一時間に八百四十匹の蚊を喰べたそうだし、又大形のヤンマ類は二時間に四十匹の家蠅を、小形の「ヤンマ」は二十匹を喰べたといふ。

夏の夕方になると、川の畔りや、池の面に蜻蛉が集つて来るのは、皆蚊をたべに来るのである。それを又人間の小供達は、長いもち竿をかついでさして歩く。「ギン」だの「チャン」だのいふテクニツクが盛んに使はれる。一匹の「ボロチャン」に對して十本も二十本もの竹竿が追跡する、其間を要領よく右へ避け、左へ逃げ、上へ免れ、下へ潜つて逃げて行く蜻蛉の苦心は大抵ではない。生存競争の激しい都會では人間ばかりか、蟬や蜻蛉とても、ウカ／＼して居やうものなら忽ち命を取られて終ふ。

小供の心持を考へると、蟬取りや蜻蛉さしを強ひてやめさせる事は可哀想でもあるが、蜻蛉が蚊を食つて吾々に利益を與へてくれる大きな恩恵を考へると、蜻蛉さし位は、もう少し親が取り締つてもいいと思ふ。

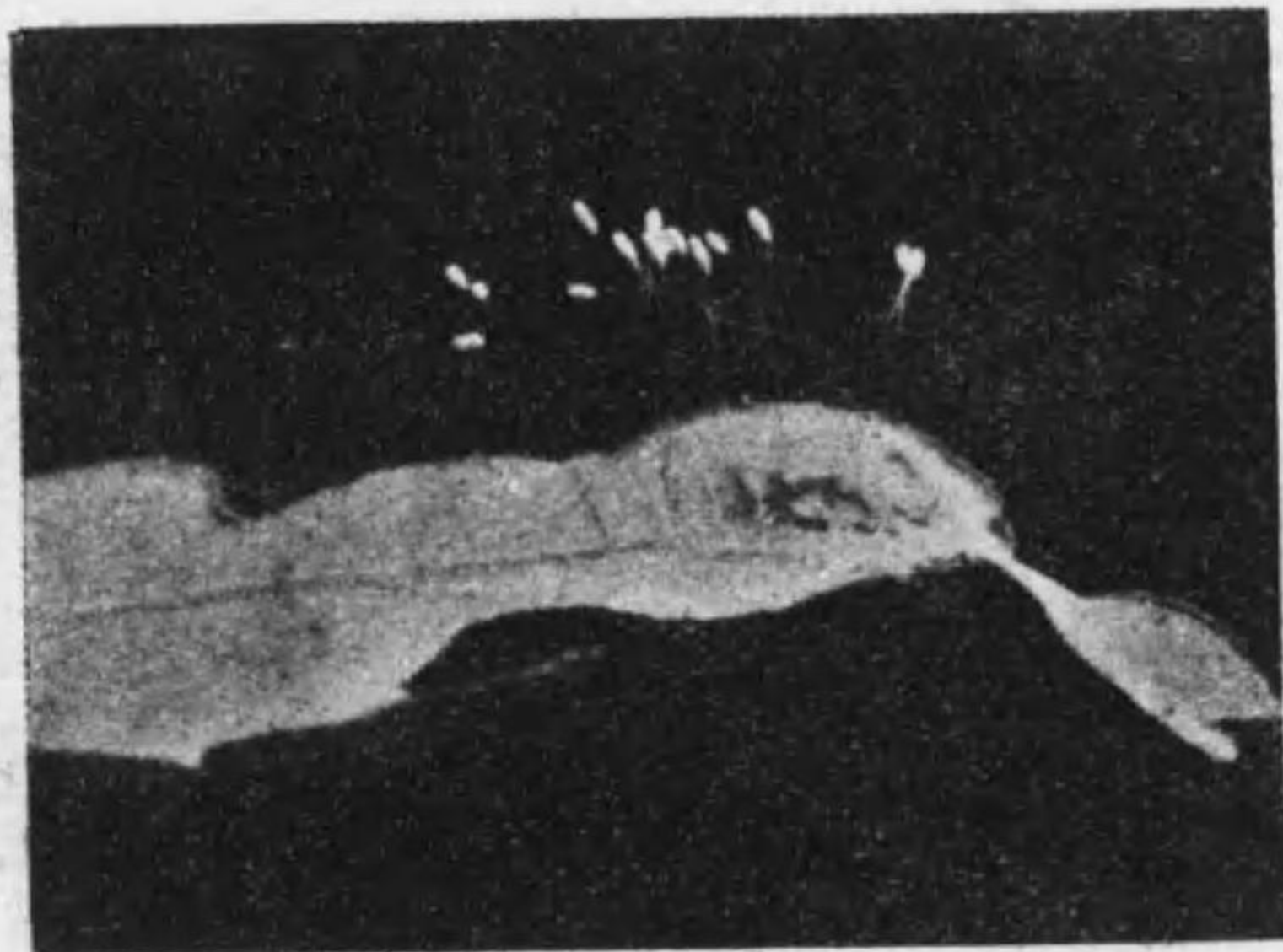
私は夏の夕方になると私の家の前の川邊で行はれる螢取りと蜻蛉さしの悲劇に對して、心からの悲哀を覚え、此悲劇を平氣でやつてのける悪大人、悪兒童をビシヤ／＼撲つてやりたい氣がする。

## 草蜻蛉 (くさかげろう)

「兄さん、又御祖母さんの迷信よ、御祖母さんのわからずやにも、ほんとに嫌になつちやうわネ」  
私が机に向つて本を読んで居ると、右手の障子を開けて入つて来るなり、妹は大聲で斯う言つて私の横にピタリと座つた。

「又例の優曇華の御説法か」

「えゝそうなの、今本郷の御ば様がいraftしやつてるのよ、私御茶を運んで行つたの、そうすると御祖母さんたら早速昨日の優曇華の話をしてるの、本郷の御ばさんも又話上手と來てるんでせう、だからとても大變よ、御ばさあんたらもう夢中よ、何と言ふかと思つてゐるとね、斯うなの、昨日御晝頃庭へ出て、何気なしに御池の傍の「さるすべり」の枝を見ると、その葉の裏に何か變なものが付いて居るので、不怪しいと思つてよく見ると、どうでせうそれが優曇華ぢやありませんか、これはくゞ珍らしい事だと思ひましてね、そつと葉ごと取つて皆なに見せてやりましたんで



華曇優謂所卵の蜻蛉草

すよ、何でも優曇華の花が咲くと好い事がある事もあるし又咲き所によると大變悪いんだつて言ひますから、兎に角氣をつけなければならぬと思ひましてね、注意しましたんですよ、何でも家の壁に咲いたのは悪いようですが、樹の葉に咲いたのはいゝんだつて言ふぢやありませんか、ですからまあ安心はしてるんですけど……お前一寸昨日のあれを持つて來て御ば様に御目にかけて御覽、用筆筒の上に紙に包んであるのがそうだから……それで私とその紙包を持つて行つたのよ、そうすると其を、さももつたいらしくおばさんに見せてるの、處がおばさんは又おばさんで、其をいかにも敬々しく受け取つて感心してるんでせう、私それが蟲の卵なんだと思ふと、もう

おかしくつてくゞ吹き出したくなつてしまつたワ」

くさかげろう

「それでお前は、其は蟲の卵ですつて説明でもしたのか」

「どうして、そんな事はふものならそれこそ大叱られだワ、だつて御ばあさんは、優曇華と言へば、千年とか萬年とかに一度咲く珍らしい花だときめ込んで居るんですもの……」

「それもそうだな、それで末だ何か言つたかい？」

「えゝ、何でもね、青いのがいけなくつて、うこん色のがいゝんだとか何とか言つてたワ、そんな馬鹿な事ないわねえ」

「無論さ、だけどさういふ御前だつて實をいふと、優曇華の正體なるものに就いて詳しい事は知らないんだらう？」

「まあさう言へばさうだワ、だから私ね、今兄さんに、よく聞かふと思つて來たの、其優曇華を産む草蜻蛉といふ蟲を見せて下さらない？」

「見たけりや見せてやつてもいゝ」

私は床の間に積んである標本箱の一つを取つて彼女の前に開いて見せた。

「これ？ まあづいぶん優しい蟲ね、私もつと／＼恐い蟲かと思つてゐたワ、これならちつとも

氣味が悪くないワ」

斯う言ひ乍ら彼女は針に刺されてしなびてゐる草蜻蛉を摘まんで見た。それは一寸ばかりの草色の細い體つきの、そして薄絹のやうな四枚の翅をもつた、見るから嫺々しい蜻蛉である、其金象眼を施した様な二つの眼、其間から出てゐる絲の如く細い二本の觸角の作り、すべてが彼女にとつては驚異であつた。

「すいぶん綺麗な可愛い蜻蛉ね、一體ふだんは何處に居るの？」

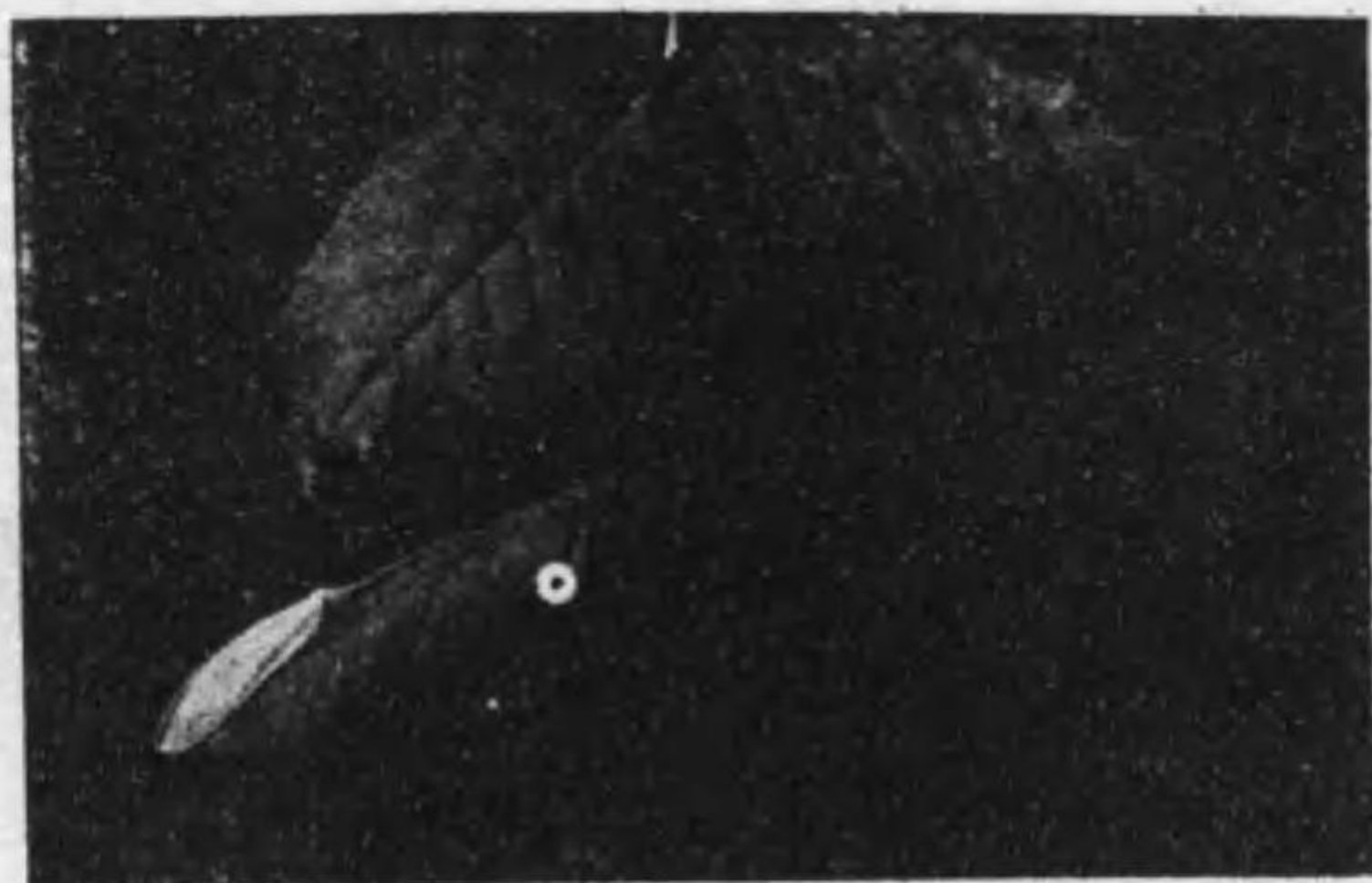
「ふだんは何だい？」

「ふだんて、マアさうね、だつてめつたに見ないぢやないの、

こんな蟲」

「そうだ、晝間は樹の蔭や草の葉の裏にちつと止つて居て、夕方か、朝早く飛んで出る習性があ

くさかげろう



蜻蛉草の裏にちつと止つて居る

るんだ。それから夜よく電燈に来て、電燈の笠に卵を産む事があるよ」

「卵つてそれが優曇華でせう、兄さん其卵を産んでる所を見た事がある？」

「あるサ、いやしくも昆蟲學者がそんな事位見てないでどうするんだい、馬鹿だナ、御前も……」

「御存じなら教へて頂だい」  
 「そんな事今忙がしいから黙目だよ、又暇の時にしてくれ、それより今夜でも氣をつけて居て、若し産んでゐたら教へてやらう」

やつと私は妹を追ひ拂つて讀書に返つた。それから一週間程経つたある晩、讀書に疲れた眼を電燈に向け、ぼんやり見詰めて居ると、ふと笠の裏側に綾羅あやむすもを着た草蜻蛉を見つけた。そして頻りに尻をもぢ／＼として居る。よく見ると、後ろの方にはもう二、三本の絲が立てられ、その先に卵が産み付けてある。私は大急ぎで妹を呼んで来て、優曇華の製造を見せてやつた。今此蜻蛉は、其絲の紐みたいな胴を弓なりに曲げ頻りと上げたり下げたりして、尻の端でそつと笠の面を叩いてゐる。四、五度そんな事を繰り返へしたかと思ふと、腹の先を笠の面にピタリとつけて暫らく

ちつとして居たが、やがて靜かに離し始めた、すると細い絹のやうな絲が笠の面とお腹の先とを



草 蜻 蛉 の 幼 蟲

結びつけてゐる、それが胴を上げるに伴れて延びてゆく、そして此絲が三分程になつた時、御尻の先から、棗形の、淡い緑の卵がヒョッコリと現はれ、今の絲の先にポツリと乗せられた、これで一回のお産が終つたのである。彼女は又すぐ次の御産に取りかゝつた。一度の御産は三十秒ばかりかゝつた、そして二十三本の絲を立て、二十三個目の卵を産んだ時彼女の御産はやんだ。

電燈の笠の硝子の面には、細い銀の絲がキラ／＼と輝いて居る、それは過ぐる日、庭の「さる

すべり」の樹で祖母が見つけて、吉兎の標徴とした優曇華の花と全く同じものである。此を見た妹は驚きの目を見張つて今更らのやうに感心した。

「まあ、全く不思議ね、私初めて見たワ」

これが彼女の發した感嘆詞だつた。

「何も不思議な事があるものか、當り前の事だよ」

「當り前つて、そりや兄さんにはそうでせうけれど、私には當り前ぢやないワ、この卵が一體どうなるの？」

「どうなるつて、一週間もすると、あの棗形の卵の先が割れて中から大きな顎と、體に澤山棘の生へた、一寸いやらしい蟲が出て来る、それが草蜻蛉の仔蟲だ、そして斯んな所ぢや駄目だが、樹の葉や枝に産み付けられたのなら、生れた仔蟲は、此銀の絲をつたつて降りて、あぶらむし 蜚蟲——知つてらだらう、植木の新芽にたかつて困る奴サ、アリマキとも言ふ——を喰べて大きくなるんだ、そしてすつかり大きくなると、長さ一分二、三厘の玉子形の繭を造つて其中で蛹といふものにな

る、それから二週間もすると蜻蛉になつて飛び出すのだ。そして仔蟲は醜いけど、吾々には味方だ、何しろ大變喰心棒で、よく蜚蟲を喰べてくれるから益蟲仲間に入つてゐる」

「ぢや親の蜻蛉は何を喰べてるの？」

「親か、親もやつぱり蜚蟲を喰べてる、だから親もやつぱり益蟲だ」

「姿に似合はない亂暴者だわネ、それで一體此蟲何日位ひ生きて？」

「煩さいナ、まあ此蟲の壽命は一ヶ月半位かな、其間に六百位の卵を産み、一日少なく共百匹位づゝ蜚蟲を喰べるといふから一ヶ月半では、百匹として四千五百匹たべる譯だネ」

「残念ね、今夜おばあさんが居れば、見せてあげるのに、私あしたでも此卵と蟲とを見せて説明して、お祖母さんを凹ましてあげるワ」

彼女は未だ電燈の笠にぢつと止つてゐる草蜻蛉を紙に包んで自分の室へもつて歸つた。

其後彼女はそれを祖母に見せて説明したか何うか聞かなかつた。忙がしい私はその儘忘れてしまつたが、それつきり祖母も優曇華の事は言ひ出さなかつた。



蟻地獄 (ありぢごく)

六月に入ると蚊蚋蜂蛤の仔蟲達は、例に依つて彼等の店を張つて毎日御客の來るのを待ち始めた。南側の日當りのいゝ椽側の下を覗いてみると、直徑一寸深さ五、六分の摺鉢形をした此蟲の店が幾つもくゞ並んで居る、これは毎年の事で、いつも斯うして店を開けていゝ掠鳥を待ち構へて居るのだが、それは又氣の毒な程閉散である。實際何時覗いて見ても、御客のあつた例がない、それこそ所謂門前雀羅を張る不景氣さである。假令大道に店を並べ、生ける亡者の訪れを待つて居る、ヘボクチャの辻占でも、もう少しは活氣がある。然し此深刻な不景氣に對しても、彼等は別に不平を言つたり、御客のないのにチレツタがつて、客引きに出るでもなく、いつもヒツソリ閉と、空き腹を抱へ乍らも、「武士は食はねど高揚子」てナ調子で、平然と構へ込んで居る様子は、實に悠然たる態度であるが、又一方から考へると驚く可き氣長さと言はなければならぬ。

斯様に此蟲の店は、不景氣のドン底に落ち込んで居るやうに見えるけれど、さて夏になると此

親蟲か飛び廻はり、又一向に根絶へしないのを見ると、吾々の知らない間に、やはり相當の御客があつて、何うか斯うか暮しを立て、ゆくもので、是を見ても熟々世の中は廣いといふ氣がする。さて私は今から此氣長な店主に就いて記さうと思ふの

だか、その前に一寸私の實驗を述べて置く。

四度目の砂礫すなごりの攻撃に足を踏み滑らしたのが運の盡だつた。小蟻はとう／＼其後脚を掴まれてしまつた。彼は懸命に藻掻いて斜面を攀ち登らうとしたけれど、そうした必死の努力も全く効がなかつた。彼が踏み止まらうと力を入れる度に、脚下の土はズルズルと崩れた。彼は體を曲げて脚を捕まへてる地下の怪物を嘯まふと努めたが、それも駄目だつた、そして彼の苦しさを態度には何の御構ひもなく、地の底の力はグン／＼彼を砂の中へ引き込んで

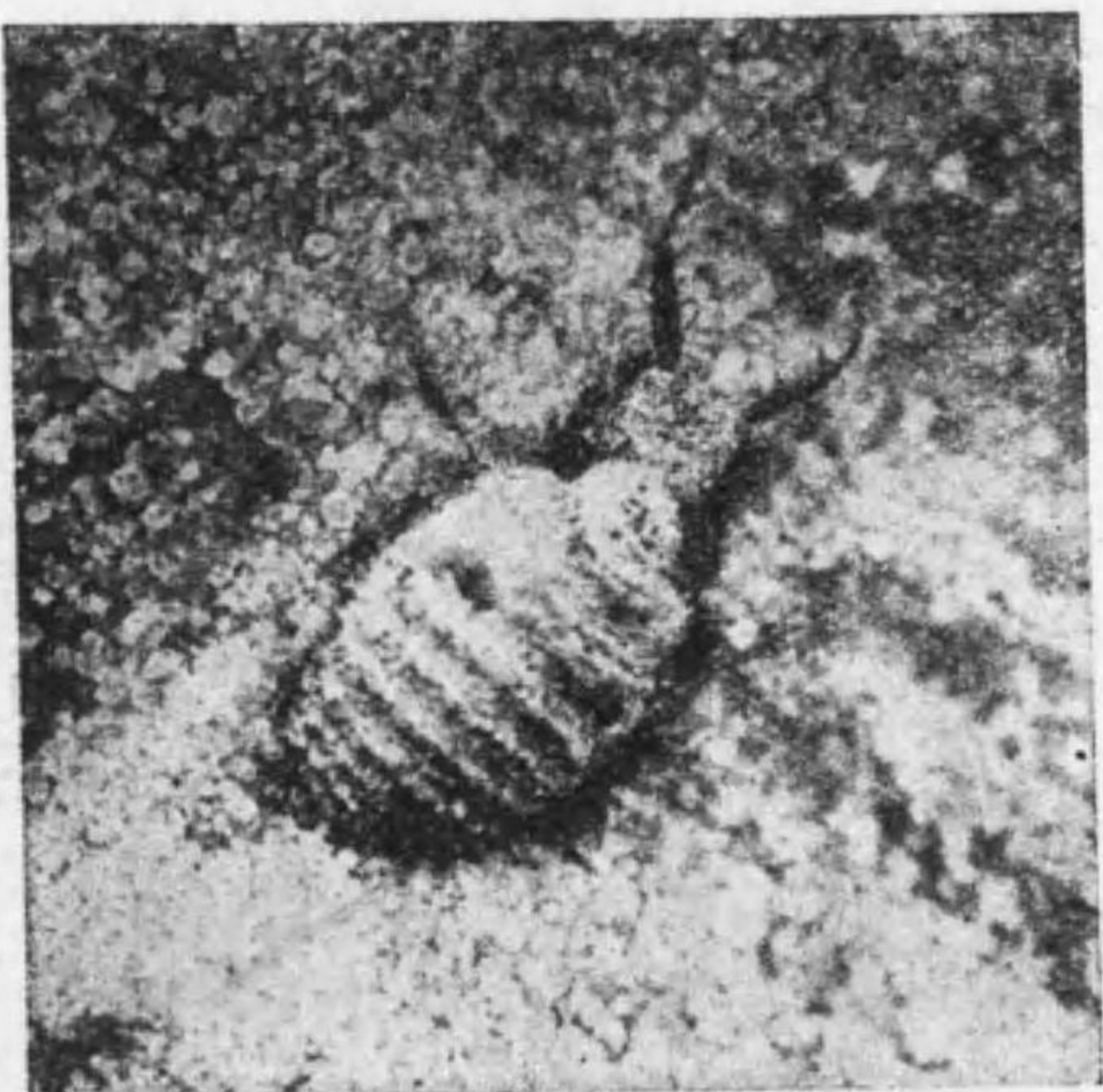


店の蟻地獄占の下の縁

ゆく。もう腰まで砂に埋まつて終つた。必死の奮闘に疲れ果てた哀れな犠牲者は、もう争ふ氣力もなく、僅かに前脚で空を掻き廻はし、觸角を頼はして死を待つてゐる。斯うして私が故意に投げ込んだ姫黒蟻は、私の眼の前で哀れ生き乍ら地の底に引き摺り込まれてしまつた。此蟻が砂の中に消えてしまふと、今度は小さな蜘蛛を捕まへて来て、其を今の蟻と同じやうに摺鉢の中に抛り込んでやつた。穴の底に落ち込むや、夢中に穴の中を駆け廻り、這ひ出やうとした、然し彼の八本の脚は、只一つ所を搔いて居るばかりで、一步も這ひ上る事は出来ない。足搔けば足搔く程脚元の土は崩れ、吾れと吾が身で穴の底へ落ち込んで行つた。此時今迄静まり返つて居た摺鉢の底の土が、二三度ムク／＼と動いたかと思ふと、續いてピン／＼と砂を飛ばし始めた。その度毎に穴の周囲の砂はズル／＼と中心に向つて滑り落ちて、あせつて居る小蜘蛛を穴の底へと引き落した。そして五度目の砂礫を喰つた時、小蜘蛛は其尻を掴まれてしまつた。これには蜘蛛も驚いたらしかつたが、今迄の逃げ腰は急に攻勢に捻ぢかへられた。然し何んなに彼が奮ん張つても地下の敵には手の出しやうがなかつた。八本の脚も、二本の毒牙も何等の役にも立たない。見る間に彼の

體は砂の中に半分程埋まつて終つた。

斯うして私は眼の前で土の中に生き乍ら引き摺り込まれた二つの哀れな犠牲者を觀た。そして其



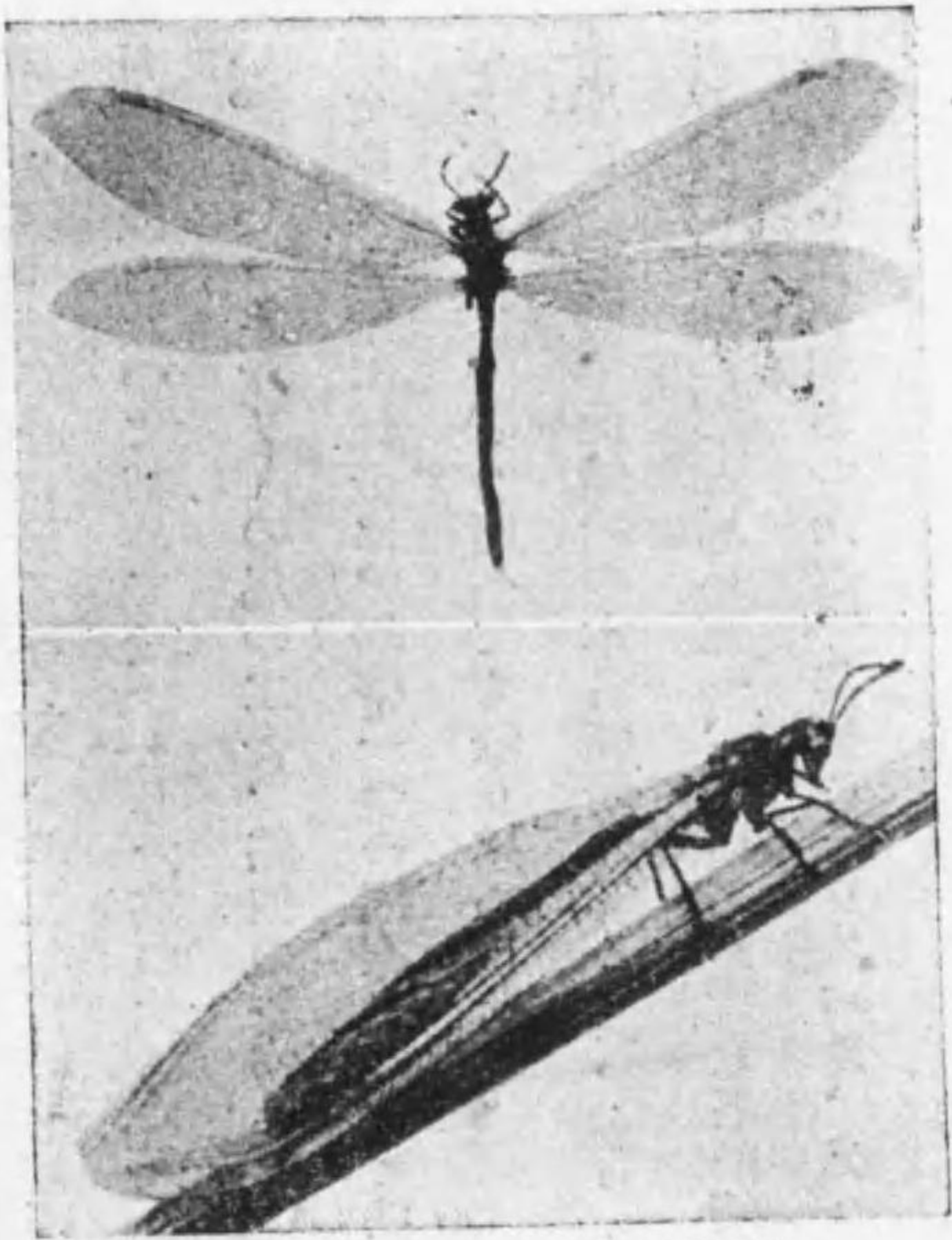
體正の獄地蟻物怪の中地

れは可なり残酷な實驗ではあるが、又一種の痛快味をもつてゐる。大體人間といふものは随分不思議な氣持を持つて居るものだ。一方に同情心をもつて居るかと思ふと、其裏に強い惨忍性を潜めてゐる、そして詰らぬ事に馬鹿／＼しい程氣を遣ひながら、他方では重大な問題にも安外平氣で居る、鳥屋が庭鳥を絞めるのに反感を持つ人でも、庭鳥を喰はせる大蛇の見世物を見て痛快を感じるものだ。

それはさて置き、自分でやつて見た事とは言へ、

眼の前で二つの犠牲者の哀れな運命を見たのは、決していゝ氣持ちではなかつた。犠牲者に對す

る哀憐と、加害者に對する憎惡、そうした感情が一處になつてムラ／＼と湧いて來るのを覺えた。私はいきなり手を延ばして、胸の邊まで埋つて藻掻いてゐる小蜘蛛を摘み、空中へ引き揚げた。小蜘蛛の體が穴の底から二、三寸離れた時、ボタリと小さなものが穴の底へ落ちたのを感じた。斯うして私は先の實驗の小蜘蛛を使つて、マンマと地下の怪物を生け捕りにした。愈々生け捕りにして見ると、それは又何といふ見すばらしい蟲であらう、體の大きさはやつと三分足らず、土で拵へた干柿か鳥の子餅みたいな格好をして居る。體には一面に土色の粗毛あらげが生えて一寸氣味が悪い。たゞ驚く事は、酒徳利の栓口のやうな頭に七ツの眼玉と、植木屋の使ふ鋏をちよめた様な顎を持つて居る事である、此二點は確かに地下の怪物の名を恥かしめない。いづれにしても私の眼の前に据えられた此怪物は、哀れな程元氣がない。まるで水から上つた河童みたいに縮こまつて、モチ／＼してゐる、其干柿の先に似た尻を土の中に突つ込んで、チリ／＼と尻から潜つて行かうとしてゐる。土の中に潜つて居て砂を跳ね上げ、土を搗つて獲物を落し込んだ時とは、まるで見違へる程ないちげ方である。



うろげかばすう親の獄地蟻

此土満中も一旦土の中に潜つたが最後、忽ちその氣力を回復する、斯うして植木やの花鋏もどきの兩顎を使つて不運な犠牲者に喰つてかゝるのである、彼は斯ういふ生活を二年間位しなければならぬ。その間毎日／＼穴の底で、足を踏みすべらして轉がり込んで來る獲物を待つて居るのだ。運がいゝ時は、一日に二つも三つもの御馳走にありつける事もあるかわりに、間が悪ければ、一週間でも十日でも空き腹を抱へて辛棒しなければならぬ。彼も餘りの不景氣に辛棒がし切れなくなる、店を引つ越す事があるし、又餘つ

程待ち切れないと見えて頭を砂から出して外を覗いてゐる事がある。

しかし此氣長な物臭太郎にも、いつかは羽化昇天の春が来る。自然はやはり公平である。前にも言つた通り土の中に居る事二年、其二年目の七月頃、球形の繭を作つて其中で蛹になり、次で八月頃親蟲となつて初めて廣々とした空の生活に入る。けれども此親蟲なるものは餘り立派ではない。長いフニヤ／＼の尾の工合、銘仙の安物みたいに、いやにピカ／＼光る四枚の大きな翅を擴げてよなくと飛ぶ様子は、細帯一つの寝衣姿の女を見るやうな、でなければ遊野郎のキザさを思はせる氣がして、どう考へても餘り感心しない。

中學に居た時、此蜻蛉の本名蛟蜻蛉(ウスバ、カゲロウ)を辨慶の薙刀讀をやつて、ウスバカ、ゲロウ(薄馬鹿下郎)と思ひ違へ、すいぶん變な名の蜻蛉があるぢやないか、と言つて、大眞目で私に質問した男があつたが、其男こそウスバカ、ゲロウだと思つた。

## 蟬(せみ)

自然界には澤山の音樂家がある、大きなものでは小鳥から小さなものでは蟲が居る。

小鳥の音樂は無論優秀だが、柄こそ小さいけれど、蟲の音樂とて決して馬鹿には出来ない。殊に鈴蟲、松蟲、蟋蟀等は、もつと高等な音樂家と比べて決して退けを取らない。いや吾々人間仲間のカケ出しのバイオリニストや、ヘボピアニストなんかより、どれ程勝つて居るか知れない。

ガヤガヤいふ蟬だつて縁日のバイオリン弾きより遙かにました。

大抵な人達は、蟬を鈴蟲や轟蟲と一處に音樂家として推賞する、然し私に言はせると、彼の蝸とツク／＼ボウシ蟬以外の蟬は、音樂家として推賞する値打がない。それは餘りに彼等は燥々しい、然し音樂家としてよりも時候々々の印象を強く與へる者としての値打は偉大である。春も更けて櫻はもうすつかり葉櫻に變り、何處を見ても青々として顔を撫でる風も冷々と心ちのよい初夏の頃、郊外の松林を歩いて見るがいゝ、何處からともなくジワ／＼といふシヤガレた聲がひゞ

く、するとそのシャガレ聲に伴れ、彼處でも此處でも續いてジワ／＼と鳴き始め、今迄靜か  
 だつた林が急に喘息持の合唱會に變り、一ときり騒ぎが續くと又何時となくひっそりとなる。斯  
 うして此の無粋な合唱は斷續的に起るけれど、その合唱隊の姿は一向眼につかない。「聲はすれど  
 も姿は見えぬ青葉がくれのホトトギス」といふ俚語があるが、この合唱隊の本尊も聲は素晴らし  
 く聞えるが、肝心の主は一向に見つからないのが常だ、夫から又此聲は松林に限つてゐるので田  
 舎の人は松蟲が鳴くと云つて、あの嫌やらしい松の毛蟲が鳴くものと思ひ込んですましてゐる。  
 ほんとうにあの松毛蟲がなくのであらうか、いや決してそんな事はない、それこそ大間違ひで、こ  
 の合唱の主は蟬なのだ。そう言つても大抵の人は信じないに相違ない、といふのは、その鳴聲が  
 普通聞きなれて居る蟬の鳴聲とは、餘りに違つて居るから。然し實際の事實は曲げるわけには行  
 かない、誰が何と言はふと、昆蟲學者が立證して居る。其は蜩によく似た蟬で、晩春から初夏に  
 かけて出て來るので「春蟬」と呼ばれ、又松林に限つて居るので松蟬とも言ふ、何れも松の木の高  
 い所に止り普通の蟬の様に低い所に居ないから、やたらに見たり捕まへたりする事が出來ない。

だが此蟬が鳴き出すと、春の更けた事、蒸暑い梅雨の鬱陶しさが眼の前に迫つて居る事をシミ  
 ジミ感じさせられる、蟬仲間での一番早出だ。春蟬が引込んで終つてから暫くは蟬の聲は聞く事  
 が出來ない。(内地での事)春蟬に次いで出て來るのはニイ／＼といふ奴で、入梅が上つてそろそ  
 ろ暑くなる時分に此が鳴き出す。榎の繁みからジ／＼と頭を衝く様な瘡高い聲を立てて鳴き始  
 める、そして或ひは高く或ひは低く、その音調は波をなし



にいて聞こえ、幾分哀調を含んで居るが、要するに神経質な  
 者には喜ばれない鳴き聲だ。散々瘡高い聲を張り上げた  
 後、チツ／＼と跡始末をつけてなきやむ。頭と胸とは少  
 し緑色を帯び、淡い褐色の地に黒い斑があり、前翅には

黒褐色の斑のある小形な蟬である。此蟬が鳴くのを知ると、愈々夏の來た事を痛感する、東京の  
 小供達は「ジイ／＼」と言つて居るが、實際ジイ／＼といふ方が當つて居ると思ふ、さてジイジ  
 イ蟬の聲も細り、愈々焼く様な眞夏が來ると、吾こそとばかり出て來るのは誰でも知つてゐる黒褐

色の斑のある翅をもつた、見るから暑くらしい色の油蟬と云ふ奴である。此蟬は色からして氣に入らないが、又其鳴聲と來ては油を揚げる時の様な音を立てるので、さなきだに暑苦しい眞夏に氣がいら／＼して來る。東京附近では一番普通の蟬で、小供仲間からも一番軽く取扱はれて居る。尙眞夏の蟬としてよく人が知つて居るのは、ミン／＼蟬とクマ蟬とだ。どつちも透き徹つた翅の主持で至極夏向きの衣裳をつけて居る。ミン／＼蟬の方は體に青味があるけれど、クマゼミの方は眞黒で形もミン／＼よりもずつと大きい、ミン／＼は平地にも居るが、どつちかと言ふと山に多い、又クマ蟬の方は東京以北には居ない、前者はその名の通りミン／＼と鳴く、そしてその鳴き聲は、丁度鼻つまりの様なひびきをもつて居て、いかにも暑苦しい、殊に此蟬を捕まへてもしやうものなら、その喧ましさと來たら大抵な者は凹まされて終ふ、私は此蟬が大嫌ひだ。夫からもう一つのクマ蟬、此も亦實に喧ましい奴で、其鳴き聲はシア／＼とも聞えるし、又シエミ／＼とも聞える。東京では殆んど見ないが静岡縣へ行くともう盛んにはびこつて居る。眞夏その者を聲で表はしたと言つた鳴聲である。斯うした喧ましい嫌はれ者の中に混つてだつた

一つ、夏の蟬としてやさしい鳴き聲をもつて居るのは蜩蟬だ。其鳴き聲が如何にも哀調を帯びて居るので淋しいと言つて嫌ふ人が無いでも無いが、夏の明け方や夕暮れに、静けさを破つてカナ

／＼と聞える此の蟬の鳴き聲は、全く何とも言へない物静かなものである。尤も田舎や山間の土地で、此蟬をヤタラと聞き飽きて居る人達には感じないかも知れないけれど、東京の様な都會に住んで居て、蜩の聲など滅多に聞けない所で、時たま、夜明頃や夕方行水に一日の汗を流して居る折など聞く一聲は、實に何とも言へない奥ゆかし



油 蟬

さを與へる。

蜩の聲ぞかすかに聞ゆなる

一と葉色づく秋の梢に

私は蜩を思ふたびに此一首を思ひ出す。

蜩は時となけども君戀ふる

手弱女吾は時わかずなく

これも蜩に關聯して私の好きな歌である。さて土用も明けてそろ／＼暑さの峠も下り坂になると、又一つ可愛らしい蟬が出て来る。それは薄物の翅をもち、體の様子も細つそりとした優形で、黒ずんだ體に金の粉の散らしのある蟬で、普通「ツクツクボウシ蟬」と言はれて居るが、東京邊の小供達は「オーシューツク／＼」と呼んで居る、その鳴き聲はツク／＼オーシイともオーシイツク／＼、どつちにもとれる、そろ／＼日が短くなつた頃から出て来て、「熱々惜しい、熱々惜しい」と言つて、日の暮れるのを悲しんで居ると言つた調子が可愛らしい、然し此蟬の鳴聲と鳴き方には非常に上手下手があり、上手な聲のいゝ唱ひ手は、聞いて居ても氣持がいゝけれど、聲の悪い下手な

奴になると「エーシューツク／＼」或は「ヘーシューツク／＼」なんて如何にもシヤガレた聲を出すのがある。

私の小供時代には、斯ういふ奴の事を特に「エーシイ」とか「ヘーシイ」とかと呼び、正しい鳴き聲のものとは違つたものとして、却つて敬意を拂つたりしたものである。

未だ並べたてればいろ／＼あるけれど、名前の陳列は是位にして、これから少し蟬の生活を書いて見る。入梅もあがり、お盆に入つてもう世の中がすっかり夏になり切つた時分、庭の植込みの間を歩いて見ると、平らな地面に、丁度拇指か人指



蜩 蟬

指の太さ位の穴が、ポカリ／＼と開いてゐるのを見つける事が珍らしくない。

夫れは蟻の巢にしては餘り大き過ぎるが、と言つて誰かの悪戯にしては少し念が入り過ぎてゐ

る、それは直径六七分はあつて、時に多少曲つて居る事もあるが、大抵は垂直で約一尺二、三寸の深さをもつて居る。斯ういふ穴が地面のあちこちに口を開いて居る。是はいふまでもなく蟬の蛹が土の中から脱け出した跡で、本所とか深川とか下町の人は兎に角、東京市内でも山の手方面に住んで居る人なら大抵は見慣れて居る筈である。此穴を堀つて行つて見ると、終りは袋の底の様に少し広い室になつて居る、此奥室が蟬の幼蟲の居間なのである。大切な交尾が済むと、雌は卵を産まなくてはならない。彼女は其尻の先に錐の様な産卵管をもつて居る、これは普通三本から出来て居て、其中央のものは針の様に尖つて居る、そして其兩側にある二本の針の先には、鋸齒の様なキザ／＼がついて居て、彼女はこの鋸で樹の枝に割目をつけ、其中に眞中の針で十粒内外の楕圓形で平たい卵を産みこむのである。

さて數日たつて此卵から三對の胸脚をもつた小さな細長い幼蟲が生れると、彼等は樹を降り土の中に潜り込む、そして其針の様な嘴で、樹の根から養分を吸ひ取つて生命をつないで行くのである。蟬の幼蟲は大抵三、四年も土の中で生活をして居る、そして十分に成長すると、所謂蛹に

なる、此蛹が又一風變つた代物だ。褐色の囚人服をつけた様な點はまあ宜いとして、ポテ／＼と太つた體、背蟲の様に盛り上つた背中、螻蛄に似た前脚をもつて、其眼は如何にも人を睨めつけて居るかと思はれる位凄、それは丁度老人の顔つきに似てゐる、殊に彼等が生れて初めての平らな地面を這ふ様子のヨタ／＼した腰付きは、其顔つきと結びついて、さながらギリシヤの懷疑



蟬しうぼくつくつ

派哲學者か怪行者とでも言ひたい風態だ。此怪行者は、地を歩く事は下手だが、その危かしい腰付きに似ず、木登りは却々うまい。鎌形の前脚の爪を樹の皮に立て、残つた四本脚の先に持つて居る細かい爪で體を支へ、スタ／＼と登つて行く、その點は

全く感心する、だから、とてもと思ふやうな高い所に、脱け殻がシガミついて居るのを見付ける事が珍しくない。

蟬の蛹が土から出るのは大抵夜である、朝の事もあられるけれど夜の方が遙か多い、それは夜の八

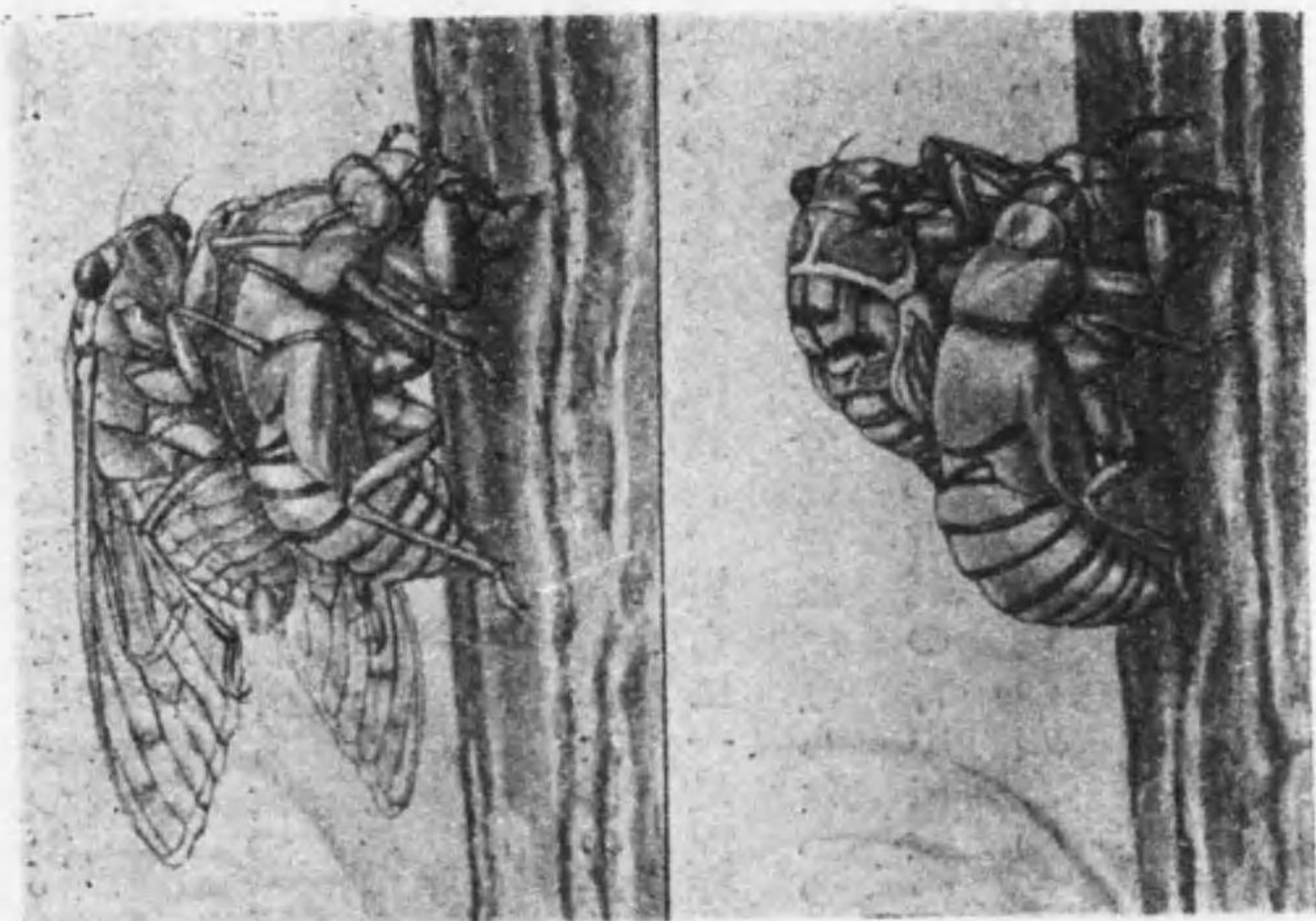


九時頃だ。前にも述べた通り樹の枝は勿論、塀とか垣根とか、何でも都合のよささうな物に這ひ登り、いゝかげんの高さまで来ると、歩みを止めてジツト體を落ちつける。

そして暫らくすると、背筋の所が縦に割れ、皮がむけ始める。七月下旬のある日の夕方、食後の散歩がてら私は庭の植込の間を歩いて居た、松や、檜や、槭等が不規律に植ゑられてある、これは私の父の趣味で、天然の雑木林を型取つて造つたものである。夏になると、此の小さな林の中に、いろ／＼な蟬が来て勝手な歌を唱ひ始める。それは他處から入り込んで来る者も多いけれど、又此の庭育ちの蟬も大分ある。

松の樹の根元や、つゝじの陰の地面に、ポカリ／＼と澤山の穴が開いて居る事がそれを證明して居る。夏の夕方、六時半頃だ、庭の隅に据えてある石燈籠の足元の穴から、何か出やうとして居る、何だろうといふ疑問が直ぐ湧いた、と同時に「蟬だナ」といふ説明が続いて頭腦をかすめた。

そして又穴を見ると、今確かに出やうとして居た者が何時の間にか引き込んで終つて居る。彼は確かに、恐しい大きな怪物が近づいて来たのに驚いて、出るのを見合せたに違ひない。



蟬の羽化昇天

私は急にぬき足に轉じて穴に近づき、そつと蹲んで息を殺して眺めて居た。三分、五分、四邊の静まつたのを見すました彼は又穴の口まで上つて来た、然し直ぐ穴から出るかと思つた彼は却々出やうとしない、頭を半分程穴から外へ出してジツト四邊を見つめて居る。彼は周圍の様子を窺つて居るのだ。その如何にも疑ひ深さうな眼つきは怪行者の趣を遺憾なく發揮して餘す所がない。植え込みの中には一刻々々と夕暗が這ひ寄り次第に擴がつてゆく、鉦蚊が遠慮なく脛へたかる、それを追つ拂はうとて、私の手が空中に輪を描いた刹那、頭半分を出して居た

蟬の蛹は、スツポリと又隠れてしまった。失敗つた。そう思つたがもう遅い、私は又暫らくの辛棒を餘儀なくされた。

然しそれは長くなかつた、三分もたつた時分、彼は又ヒョッコリと頭を出した、そして前と同じやうにジツとして動かない。今度こそ用心をしなければならぬ、と思つて更らに一層息を殺してゐた。やつと時が来た、七時、彼は思ひ切つた態度で遂々穴から這ひ出した、そして少しも躊躇の色なく、穴から三尺程離れた檜の幹へサツサと登り出した。約七尺程も登つた時、一時彼は登るのをやめて休息し、更らに一尺程登つた所で全く止つてしまつた。

此ここで私は又三十分待たねばならなかつた。

七時半になつて、やつと蛹の背中に縦の割目が現はれた、そして夫れは見る／＼左右に開き、中から淡い、而かも鮮かな緑色の頭と胸とが盛り上る様に出て来た、そして次に前肢、胸の全體、後脚と、少しも休まないで出て来る。體の大部分が脱けると、仰向けになつて倒さになる、尻だけが殻の中に入つて居る。そして暫らくジツと休み、最後に後脚を殻から、脱き出して今度は前

脚を伸ばして起き直る、そして今脱けたばかりの殻に、嚙り付く様にして止る。殻から脱け出したばかりの蟬は、何といふ優しい姿と鮮かな色をして居るのだらう、これがあの活潑な、そして頑丈な蟬の赤ん坊とは到底思ひもよらない。白地にうつすりと緑のぼかしを施した様なその精巧さは、吾々の染色法も却々及ばない位である。

背中にはまだ水氣を含んでポタ／＼しい翅が不格好に縮まつてくつ付いて居る。

それが見る／＼伸び擴がつてゆく、皺だらけだつた翅は、もうすつかり伸びて、しなやかに垂れ下り、初め白く濁つた色だつたのが、透き徹る様になつて、脈には色が現はれ、膜には斑が現はれる、その斑は雨雲が擴がる様に見える／＼擴大して、何時となく黒褐色の斑が立派に染め出されてしまつた、そこで私は、此蟬が油蟬であつた事が初めてわかつた。何故なら私は初めはミンミン蟬だとばかり思ひ込んで居たからである。翅がすつかり伸びて終つてからも二、三十分、蟬は其位置を動かないで居た。

私は場所を覚えて置いて家の中へ入つた、もうそれは八時に近く室内には電燈が輝いて居た。

翌朝、七時頃起き、大急ぎで昨夕の場所へ駆けつけて見たが、その時そこには、もう蟬の姿は見えなかつた。彼はもうのびくとした氣持で樹の上に止つて、生の喜びの第一聲を擧げやうと待ち構へて居るに違いない。

蟬は生命の短い事でも可なりには有名である。然しそれは親蟬となつてからの生命が短いので、幼蟲は二年乃至四年間位土の中で生活して居る、だから全體としての生命は決して短い事はない。然し數年間の陰鬱極まる穴窟の生活は、たつた一週間足らずの樹上生活の準備に過ぎないのである。そう思ふと蟬の生活も儚無いなものだ、暑さもよそに、青葉の陰で高調して居る蟬の歌こそ、此世に於ける彼等の生活の歡喜の歌であると共に、又最後の叫びでもある。然し米國には十三年幼蟲の状態で居る十三年蟬、十七年幼蟲で暮す十七年蟬といふのがある、大分に蟬の話も長くなつてしまつた。

さて、蟬の歌を出す装置に就簡單に一言して終るとしやう、蟬で鳴くのは雄だけである、雌は決して鳴かない。それは發音の装置を持つて居ないからである。今雄の蟬を捕まへて其翅をもぎ

取つて第二番目の腹の環節の背面を見ると、其處に小さな突起がある、此突起を剥ぎ取ると、其下にはキチン質の薄い膜が見つかる。此の膜の事を鼓膜と言ひ前の突起と此鼓膜との間は鼓室と言つて小さな室をなして居る。又蟬を仰向けにして見ると、胸の左右に鱗形の瓣膜がある、此瓣を腹瓣と言つて居る。さて前記の鼓膜は蟬の體內にあるV字形の發音筋と臑突起といふもので連絡されて居るが、鼓膜は此筋肉の作用で凹んだり膨らんだりする、其連続が波動になつて空氣に傳はり、吾々が聞く蟬の鳴き聲となるのである。

然し此發音器の形や大いさは蟬によつて皆異つて居る、そしてそれ／＼特有な鳴音を發し其處に個々の特徴が發揮されるのである。

蟬が日盛りの暑さにもめげずに聲を張り上げて鳴くのは、何れも妻を呼ぶ雄の歌であると言はれて居る。それは確かにそうかも知れない、然し蟬の鳴くのが必ずしも妻を呼ぶためのみ解釋するわけにも行かない、彼等にも愉快を感じ、歡びを鳴聲によせて現はす事もあるのである。兎に角、吾々の耳には燥々しい油蟬や熊蟬の聲も、彼等の配偶者には鶯の聲とも聞こえ、又唱ひ手

自身は満身の得意を感じて居るのだと思ふと、つくづく世の中は面白いと思ふ。

## 蝨（しらみ）

「横山さん、今日はホンにヨカもんとつて置いたバイ、早やう来て御らん……」

六時間目の測量の實習を終へてへとくになつて學校から歸つて來た私に、下宿のばあさんは斯う言つて茶の間からクシャクシャの紙包をもつて來て渡した。

「何んだおばさん、又何か珍らしい蟲かい？」

「マア一寸あけて御らん、ヨカもんタイ」

どうせ詰らぬ蟲に違ひないと思ひ乍ら、私はその紙包を開いて見た。包の中には二、三本の女の髪の毛と一處に三匹の頭虱あたまじらみが入つて居た。これは私が未だ熊本の五高時代の事だつた、ふだんからいろんな蟲を集めて居たが、此虱だけは、どうしても手に入れる機がなかつた。

「虱がどうかして手に入らないかナア」

これが私がいつも下宿のばあさんに向つて洩らす嘆聲だつた。

正直で、親切で、而も私の研究に割合に理解をもつて居て呉れた下宿のばあさんは、此私の嘆聲を單なる嘆聲とは聞いて居なかつたのであつた。彼女の説明では、その日玄關の側の室で針仕事をしてると、午後二時頃、尋常五年位の二人の女の子がベチャクチャと話し乍ら、窓のそばを通りかゝつた、そしてフト耳をすますと、一人の子が相手の友達の頭に虱が居ると言つて、頻りと注意して居るのを聞き込んだのださうである。ばあさんは、突差に私の平常の嘆願を思ひ出し、すぐ様表へ飛び出し、女の子を諭して、やつと三匹の虱をもらつたのだといふのである。

「どうんこんして、虱を見つけやうちや苦心したタイ、これでもう横山さんの泣き言も聞かんでヨカ……」

斯う言つてばあさんはニコ／＼笑つた。私は彼女に對して深く感謝した、そして其虱はプレバライト標本にして今でも大切に納つてある。別に威張る譯ではないが、私はどうも此虱に對しては親しんだ事がない。尤も親まなくて結構なのだが、實際同じ血を吸ふ蟲でも、蚤や蚊の様に始終見馴れて居ないから、彼等に對する感想や不平も別にない。只私の妹の髪に二度ばかり此頭虱

が出来て悩ましたのを覚えて居るが、それは實に頑強で執拗なものだ、よく執拗な事を「だに」のやだうと言ふけれど、其點では此頭虱だつて却々退けを取らない強者である。

世間一般蟲といふと、非常に不潔な賤しい蟲として嫌悪してゐる。無論それは此蟲の定宿が、物貰ひとか乞食とかいふ、賤しい者の懷である事が主なる原因をなして居るのだらうが、一つには此蟲の風態が、如何にも下品であるからだと思つてゐる。何ぜと言つて、蚤は決して上中流の家庭の人にのみたかつて、物貰ひや乞食には寄りつかないかといふに、決してさうでない、それといふのは蚤の風態が虱程いやらしい下品さがなくからである。同じ血を吸ふ蟲に生れても蚤と虱ではこれだけ違ふのである、これでも世渡りに風采といふものが如何に重要であるかと窺はれる。兎に角世の中は立派に生れついた方が得だ。

何しろ、實際虱は風態が悪い。其形は平べつたい卵形で、灰色を帯び頭の割合に尻が馬鹿に大きく「だに」と共に東京の街をノサバリ返つて居る、あの乗合自動車の格好によく似て居る、私は乗合自動車のデコ／＼した後ろつきを見るたびに「だに」を想ひ「しらみ」を考へる。それから胸に

は六本の毛ムクジヤラな脚が生へて居て、其先には鈎のやうな爪が生へて居る。彼は此爪で髪の毛にしつかりとしがみ付て居るのである。又彼の口を見ると、それは肉質の嘴で、ふだんは短かく縮めて居るけれど、いざ血を吸はふといふ際には、それを眞すぐに伸ばす、そして此嘴の先には六本の鈎が並んで居て、これを皮膚に引つけ離れないやうにして吸ふのである。よく吟味すればする程いやな蟲だが、全體として彼の品位を下劣に見せるのは、其體の色にもよる事は確かだ。何しろ、一見灰色が、つた青白さは、如何にも貧乏臭い感じを與へる。

此蟲は一旦發生すると却々絶滅する事が六つか敷い、それに一匹の雌は、大抵五十粒位の白い楕圓形の卵を、髪の毛にシツカリと豎に産み付ける。此卵は一週間前後で孵へり、十七、八日間に三度皮を脱いで親蟲になる。斯うして殖へる事も早いから、早く手當をしないと忽ち手がつけられなくなる。

小供は此蟲によくたかられるものだから、その時の手當を述べて置きたい。

先づ揮發油に除蟲菊を浸して置いたものを塗ると死ぬ、死に損なつたものは、ノソノソ毛の長へ

這ひ出るから之を梳櫛で梳き取るとよい。又アルボース石鹼を水に解かして刷毛で塗りつけて洗ふ事、又寝る時石油をよく塗つて手拭で包み、翌朝梳櫛で梳くとよい、石油なら卵も殺す事が出来る。此他未だ衣蝨こもむしと言つて頭虱よりも長形で白いのがある、此は衣服の縫目に卵を産み、お湯屋で移る事がある、それから一層いやらしいのは毛虱である、これは體が丸く、いやに長い脚をふんばり、頭を深く皮膚の中に挿し込んで血を吸ふ、多く人間の不淨の部分につき、時に腋の下にもつく事があるけれど、頭にはつかない、此は多く花柳街に巾を利かして居る由。

虱に就いて面白い事は、同じ蝨であり乍ら、其たかる人種によつて虱の色が異ふ事である。例へば、頭虱にしろ、衣虱にしろ又毛虱にしろ、白人や、黄色人種にたかるものは頭虱なら灰黒、衣虱なら白色、毛虱なら灰黄或は灰白だけど、黒人につくものは、何れも黒又は暗褐である。これは無論環境に對する適應的變化で、保護色といふ奴であるが、虱でも生きんが爲には却々人知れぬ苦勞が要るといふものだ。

南京 蟲 (なんきんむし)

實を言ふと、私は南京蟲なる者を見た事は何度もあるが、手づから捕まへた事は、今日迄後にも先にも、たつた一度しかないのである。それは私が中學の四年の時だつた。丁度化學の講義を聞いて居ると、眼の前の机の上を赤褐色の蟲がノソノソと這つて居るのを見つけた、例によつて早速摘み上げてみると、それは紛ふ方なき南京蟲君であつた。實は私は此時初めて南京蟲を實見したわけだが、その濫扇團そつくりな色と格好とは、初見參の私をして直感的に南京蟲なる事を思はせた。といふのも豫てから彼の噂を聞いたり、其尊影を繪で見たりして居た爲ではあるが、蟲もこゝまで行けば豪氣なものではあるまいか、體の大いさはヤット二分そこゝに過ぎないが、長い二本の觸角と、黒い二つの眼玉の着いた小さな頭が、涎掛みたいな胸の先にくつ付き、此涎かけの後ろには圓い、背中と腹とがベチャシコにくつ付いてゐて、これでも臟腑はらわたが入つて居るのかと疑はれるやうな胸が連がつて居る、そして割合に長い六本の脚で、ノソノソ歩いてゐる様子

はどう見てもいゝ感じのする蟲ではない。

南京蟲はバンパイア仲間でも一番人間から嫌はれて居る。それは一つには元來が支那人に付きものゝ蟲であるといふ一種の輕蔑的感念と、もう一つは此蟲に喰はれた後の痒さが、とても蚤や蚊の比でない事にも依てゐると思ふ、此蟲が實際支那人を特に好くかどうか私は知らない。又果して支那人に付いて支那から渡つて來たものか否かも判らない。然し元來日本生れの蟲ではなくて、外國から入つて來たものである事は確からしい。然し此は何も東洋に限らず、西洋でも盛んに巾を利かして居るのだから、その方面から入つて來たのも随分あるに違ひない。それは兎に角として、南京蟲といふのは、やはり支那人に多いといふ事を意味したもので、其名が抑々全體として此蟲の品位を下げ、不潔を思はせ、貧乏臭く感じさせ、その御宿を承はる事を以て此上ない不名譽に思はせる主因である。

彼の口は短い管になつて居て、平常は頭の下側に在る浅い溝の中に藏ひ込んで居るけれど、いざ御馳走といふ段になると、此管を立て、中に納まつて居る四本の細い毛を突き刺して血を吸

ひ上げるのである。此蟲に喰はれた後の痒さは非常なもので、容易に納まらぬのみか、痒さの餘り掻きくづして腫物になつたりして苦しむ人が随分ある。彼等は元來明るい所が嫌いで暗い處暗い處と選つて棲んで居る。殊にそのベチャンコの體を利用して柱の割目だの、壁の隙間や、壁紙の糊などに潜り込んで居る、そして夜になつて床が敷かれ、電燈が消され、四邊が靜まるとノソノソと這ひ出して來て仕事に取りかゝる、だから南京蟲の出て困る家では、電燈の明るいのをつけた放しで寝る事は彼等を防ぐ一法である。

私は未だ此蟲に喰はれた経験も、又夜中床の中で此奴の攻撃に逢つた事もないから、實驗談を御話する光榮を持たないのは返へすくも残念だが、経験者の話に依ると、夜の彼等は晝間の鈍性に似ず、却々敏捷で、何でも一度チクリとやつて置いてサツサと逃げて終ふので、捕まへるにも大變骨が折れ、大抵は喰はれ損の泣き寝入りに終るといふ。

又整す時は大變穩やかなので、喰はれた事を知らないで居ると、暫らくして急に痒くなるのだともいふ。何れにしろこれは諸君の體驗によつて決定して頂きたい。

尙此蟲に就いて驚く可きは、斷食に對して異常な耐久力をもつて居る事だ。蚤が、あの體で一ヶ月の斷食に耐へるが、此南京蟲は、優に六ヶ月は飲まず食はずに生きて居られる、だから一旦此蟲が出たが最後、二月や三月空家にしても、彼等は平氣で次の御客を待つて居る、それから又此奴は寒さに對しても實に頑強で、攝氏の零下三十三度の冷たさに遇つても死なないといふ。それに繁殖も却々盛んで、雌は三月頃から卵を産み始め、一度に五十位、白い圓柱形の卵を産む。此蟲に一番苦しめられるのは兵營とか寄宿舎、下宿の様な多人數が雜居して居る所である。私は神田の友人の下宿に南京蟲見物に出かけた事があるが、壁紙の剝がれかゝつて居る所を引つ張ると、五匹も六匹もの南京蟲が、あはてゝ隠れやうとしてゐるのを見て驚いてしまつた。

右の様な場所では、南京蟲退治には窒を靑酸瓦斯、硫化水素、亞硫酸瓦斯の如きものでいぶすがよい、又柱の割目、壁と柱の隙間等には、アルコールにナフタリンを充分とかしたものを注ぎ込み、尙此蟲に喰はれたら無臭ヨードフォルムか石炭酸、或ひはアムモニア水を塗ると宜しい。



## 蚘 蟲 (あぶらむし)

近代科學の進歩は從來夢想だもしなかつた、種々便利重寶な事を人世に貢いでくれる。所謂文明の機械、器具、藥品、食料等、とても數へ切れない、人工でダイヤモンドが出来る、絹も出来る、又最近では、水銀から金が採れるといふ様な事まで判つて來た。然し何と言つても、現在の科學の力では到底も不可能な事は勿論、將來とて一寸覺束なさそうなのは、人工で生命を創造する事だ。若し此仕事が人間の力で出来るやうになつたら、それこそ此上有難く重寶な事はないが、又よく考へてみると、此上始末に終へない事もないかも知れない。誰しも自分の肉親や友人の死を願ふ者は無いから、若し肉親友人の天壽が盡きて死にそうになれば、早速人工生命を注ぎ足して生かすに違ひない、夫から又子供が病氣にでもなつて命が危くなれば、親として助けぬ者は一人もない、要するに斯うなると、生れる者ばかりで死ぬ者が無いから、年と共に老人ばかりウヨクする様になり、又死ぬ者が無いのだから人口は殖へるのみで、さなきだに狹隘を告げてゐる

地球は忽ち人間で埋つて終ひ、遂には人間同志友喰ひが始まり、結局人間は自滅の悲境に陥るに違ひない。そう考へると、やはり生命を造る事が出来ないのが却つて幸ひなので、又どんなに偉い人でも、結局死んで呉れて始めて有難味がある譯である。祖父や親父に何時までも頑張つて居られては息子の頭の上る時は無く、上役が永久に死ななかつたら、下役は一生澤庵漬の憂き目を見ねばならない、これはとても堪へられない苦痛だ。

假令生命を人造出來ぬまでも、若し女だけで子供が産まれるものとしたら、どんなものだらう、若し斯んな工夫が出來たら、それこそ大問題が起るに違ひない。第一從來の道德、殊に男女間の貞操道德などは根底からひつくり返へらねばすむまい、斯んな事を言ふと、如何にも馬鹿氣てゐて、讀者諸君は、著者の奴氣でも違つたのではないかと呆れられるかも知れないが、世の中といふものは、やはり廣いもので、澤山の生き物の中には、亭主なくして女房だけで子を産む者があるのである。水の中に居る小さな「みじんこ」「車蟲」等もそうだが、一番有名なのは表題の蚘蟲である。蚘蟲と言へば、皆さんも御承知であらうが、植木や草花の葉や芽にたかつて害をする一分に

も足らぬ、一般に緑色をした蟲である、彼等は蟻と大の仲好である、といふのは、此蟲は尻から甘い蜜を出すので、蟻は蜜を頂戴せんが爲に蚜蟲をいぢめないばかりか、大いに保護してやる。すると蚜蟲の方でも頗る心得たもので、蟻がやつて来て其觸角で蚜蟲の腹を撫でると、彼は早速甘露の數滴を蟻に振舞つてやる。

それは扱て置き、此蟲が世にも珍らしい獨身で子供の製造をやつて居る事は、苟も自然科学方面の仕事にたづさはつてゐる人なら、知らぬ者はない程有名である。だが、一體どうして女房一人で子が出来るかといふ原理に至ると、誰も答得ない。耶蘇の母マリアは精靈に依つて妊娠はらんだと言ひ、日吉丸の母は八幡様の夢を見て日吉丸を宿したと言ふが、そんな説明は此蟲にはとても當て嵌らない。何しろ此蟲の子供製造と来ては實に目覺しいもので、春卵から生れた母親は、一匹で少なく共五十四位の父無子を産む。それは卵でなくて子供を産むのである。此子供は、不思議にも女の子ばかりで、男の子は一匹も生れない。而も此澤山の姉妹は早くて二十日、遅くも一月も経つと、一人前の女に成り、又銘々が五十四位の父無子を産む、そして其はやはり女の子ばかりで男の子は一匹も生れない。此等の娘達もやがて又大きくなり、前の娘達と同様に、聲無しで女の子を産む。實にそれは不思議な現象である。大體女が子を産むといふのは、これは當り前あたりまえで別に少しも面白くはないけれど、良人なくして斯うも澤山の子を産むのは、大なる奇蹟であらねばならぬ。元來生物といふものは、兩性の生殖細胞の結合に依て初めて生命が吹き込まれるので、一方だけでは生物は成り立たない。所が此蚜蟲では件の通則つうそくを破り、雄性の接觸なく、雌性だけで立派に子供が出来、其子供も亦同様に澤山の子寶を擧げるのである。斯様にして此蟲は生れる子も生れる子も女ばかりで、その子が皆な又獨りで女の子を産むのであるから、其殖へ方は非常なものである。何故そんな不思議な、重寶な仕掛が此貧弱な蟲風情に授けられて居るのだらうか、それは誰しも知り度い事であり、又學界の大きな謎として懸つて居るが、未だ誰一人として解いた人はないのである。然しこれも深く考へると、判らないから宜いので、若し此不思議な原理が判り、明かに真相の説明が付き、進んでは人間にも父無子の製造法が應用されでもしたら、それこそ大變である。夫君が洋行中に妻君が妊娠しても敢て不思議はなくなり、従つて答める譯にも

行かない。例へ詰問しても、「御留守中淋しいので一寸獨りで造つて見ました」とでも辯解され、  
ばグーの音も出やしない。事が昆蟲の世界の事だからこそ、不思議だの面白いのと、呑氣な事も言  
つて居られるので、要するに火事も風向が逆の間はいゝけれど、風向がこつちにでもなれば、そ  
れこそ現在の男性は大恐慌である。

斯様にして蜉蝣は、生れる子も生れる子も皆女ばかりの状態を六、七代も続ける、そして夏も  
過ぎて秋となり、そろ／＼寒くなりかけると、最後の女からやつと娘の他に息子も産れる。そし  
て此娘と息子とが夫婦になり、娘は初めて卵を産む、此卵はそのまま冬を越し、翌年の春になる  
と之から女の子が生れ、その女の子が例に依つて獨りで娘を製造するといふ譯である。だから此  
蟲でも一年に一度は夫婦が出来るのだが、春から夏の間は決して男は生れない。何故秋にならね  
ば男が生れないのかといふ事も、今の處よく判つて居ない。それは食物の關係だとも言ひ、溫度  
の關係だとも言ふけれど、それもはつきりしない。何れにしろ彼等の生殖作用こそ不可解の謎、神  
秘の結晶である。今や此謎を解くべく、多くの學者達が頻りと頭を捻つて居るから、何時かは此神

秘の扉も開かれるに違ひない、そして其結果は人世に幸福を與へるであらうか將た又脅威を齎ら  
すであらうか、それも亦頗る興味ある問題だと思ふ。

## 埋葬蟲（してむし）

世の中は「藁喰ふ蟲も好きぶ好き、」で随分變つたものゝ好きな人間がある。何でも畫家の水島爾保布氏は悪食家の旗頭で、鼠や猫は無論の事、ライオンの肉から南洋の大蛇の肉まで喰べた事があると、氣焰を擧げて居るのを讀んだ事があるけれど、昆蟲界の悪食黨に比べると、人間仲間の悪食家なんかは到底もく足許へも寄れたものでない。蠅が蟲界の悪食家として、名聲噴々たる事は誰も知つて居るが、まだく澤山の悪食家がある。餘り世間には知れてないが、此處にいふ「してむし」等も、此方面では蠅に勝るとも劣らぬ重鎮で、一かどの大家をなしてゐる。

此蟲の好物は大體腐敗つた肉と決つて居る。鼠の死體、蛇の遺骸、蛙の死んだのなど、氣の弱いものは、眼を廻はしさうなものばかりが好きなのであるからやり切れない。而かも、それも肉の生々した血の滴たるやうなのは嫌ひで、既に腐敗菌の宿泊所となつてドロ／＼に腐敗れたものや、異臭紛々たるものが大好物なのである。彼等は見た所、いかにもヨタ／＼した鈍物らしいが、

斯うした腐肉を見つける事にかけては、素晴らしく卓越した腕前をもつて居る。彼は野原の石の下に潜つて居乍ら、數町先の路傍に轉がつてゐる蛙の死體から出る臭ひを嗅ぎ逃さない。それから又飛びすがりに草の中や路傍に落ちてゐる蚯蚓の腐肉の一片だつて決して見逃しはしない。

私は山路や、野原を歩き乍ら、足許に落ちて居る腐敗肉の小片に、矢の様に飛びついて來る此蟲によく出逢ふ事がある。それは何う考へても決して視覺によつて來るのではなくて、嗅覺によつて飛びつくのである。

彼等は夜になると、其鋭い鼻を蠢めかし乍ら御馳走を探して歩く、そして嘔吐を催ふすやうなペラ／＼の爛れ肉の中に潜り込み其惡臭に陶醉してゐる。それは全く想像も及ばない嬉しさで、斯うした汚ないものばかり喰べて生きて居る彼等にも可愛い性質がある。それは彼等は夫婦共稼ぎで働らく事だ。夜になると、二人は伴れだつて歩き、運よく手ごろな御馳走を見付けると、二人でもつて其御馳走の下に穴を掘り、其中に引き込んで上から土をかぶせて隠して終ふ。それから今度は、妻君は穴の中に藏ひ込んだ御馳走に卵を産みつける、やがて生れた仔蟲は兩親の見つ

してむし

けて、遺して置いてくれた腐れ肉を有難く頂戴して大きくなる。處で、斯うして子供時代から惡食で育つた蟲であるから、さぞ汚い蟲かと思ふと、決して左に非らず。尤も「しでむし」にもいろいろあつて、一概には言へないけれど、大抵が黒光りの、いゝ光澤の持主ばかりである。南部の鐵瓶みたいな、澁い色合のがあるかと思ふと、全體瑠璃色に光るもの、それからベツ甲細工のやうな胸を持つて居るのがある。何れを見ても蟲だけ見れば、決してそう醜惡な感じのするものではない、だから若し此蟲が、花園の周圍でも歩いて居れば、知らぬが佛で大抵な人は、却々奇麗な蟲だ位の賞讃を惜まねに違ひない。けれど、隠さうとしても隠しおほせないのは、其特別な格好と體に浸み込んでる腐肉の惡臭だ。藝者や淫賣婦が、いくら奥様や令嬢風を真似ても、一見して御里が知れる通り、此「しでむし」も装ひだけは飾つても、捕まへて一寸臭ひを嗅いで見さへすれば忽ち化の皮が剥けてしまふ。

それから私が、此蟲のある者に對して好感の持てない事は、其性的交爲が非常にだらしない點だ。それは「ひらたしでむし」と言つて體の平べつたい、干柿を押し潰したやうな格好をした奴だ

が、其風俗を亂す事は頗る目に餘るものがある。大體がたとへ蟲けらでも、結婚といふ事には随分氣を付けるものだ、そして成るべく人目に付かない木の葉の裏や、草の蔭に隠れて靜かに結婚式を擧げるもので、或る蝶になると、彼等の戀人同志が愛を語る様子には、吾々が見ても實に奥ゆかしいものがある。私は「ベニシジミ」といふ可愛いらしい小蝶の戀人同志の密會(?)を度々見た事があるが、いつも其情趣豊かな戀の道行に感心してゐる。此蝶は私の觀た範圍では、他の多くの蝶のやうに花の上でも草の葉の上でも御構ひなく露骨な真似をする事は決してない。

若し今此蝶の若者が、花の上で美しい娘を見つけると、彼は彼女に體をすりよせて、それとなく意中を發表する、すると娘は、たとへ其若者が氣に入つても、直ぐ其場で男の戀を容れるやうな事はしない。彼女はフィと立つて花を離れて地面の草に降りる、續いて若者も彼女の跡を追つて降りる、彼女は若者が自分を慕つて來たのを知ると、クル／＼と二三度體を廻はしてからチヨコチヨコと草の莖を傳つて、繁みの中へ入つてゆく、そして三、四寸も行つた處でジツト若者を待つてゐる。若者も亦そこへとんでゆく、其處で四、五秒の間二人は頭をつき合せ觸角を撫で合つて何

か囁いてゐる。時によると二人でグル／＼廻りをしたりする。斯うして娘は若者を段々と草の繁みへ伴れてゆく、それはいかにも二人で鬼ごっこでもしてるとも見えるし、又何う見ても戀人同志の道行としか思へない。葉を傳ひ、莖を下り、枝の下を潜つて互ひに戯れ合ひ乍ら、抱擁の場所を求めてゆく様子に至つては、實に情調纏綿たるものがある。私は此蝶の戀人同志の道行を見る度に非常な奥ゆかしさを覚え、好感をもつ、處が此「ひらたしでむし」の奴になると、好感は愚か、憎惡の念を催ふ事が度々ある。第一彼等には慎しみが全でない。往來の眞中で酒蛙／＼として風俗を亂して居る、此と同じ點で、私は犬を蔑すみ猫を尊敬する、殊に山に入つて此蟲の澤山居る場所と時期とに出くはさうものなら、それこそ大變である。尤も元來が蟲の事だし、又山路の事だから、敢へて咎める筋のものでもなし、又干渉する權利もない譯だが、人情といふものは妙なもので、如何に蟲とは言へ、眼の前に餘り幾組もの夫婦を見せられるといふ氣持ちはしない。私は此夏北海道の山の中で、此蟲のため散々當てられたが、無論故意こゝろらに殺す心算はないから、初めの間は避けて歩いたけれど、終ひには好意も同情も消えてしまひ、足元に抱き合つた夫婦を見

つけても敢て避ける事をしないで、遠慮なく靴の底で踏みつぶして歩いてやつた。

口繪に出したのは小鳥の死體から出る死臭に誘はれて、此蟲が鼻蠢めかしつゝ御馳走に有り付きにやつて來た處である。これから彼等は小鳥の死體の下に穴を堀つて埋め、ゆつくり腐れ肉の臭ひに酔ふべく、いそいそとして仕事にかゝらうとしてゐる處である。

螢 (ほたる)

とらるゝも口ゆゑならで螢哉

茶

バサリんと草を叩く音が、今夜も塀の向ふの川岸から響いて来た、それに續いて「光つた〜」といふ腕白小僧の疝高い聲が聞えた。その聲を聞くと、あゝ又捕まへられて儚ない命をとられて終ふのかと、淋しい気持ちになつた。

私の假寓は千駄谷に在るのだが、小さな前栽の前の狭い道路を距てゝ小さい川が流れて居る、それは淀橋浄水場の捨て水を受ける水路で、川といふより寧ろ溝と言つた方が適はしいかも知れないけれど、それでも巾は二間ばかりあつて、深さは可なりで一丈五尺もあらうか、兩岸は崖のやうに切り立ち、雑草や灌木が生ひ繁り、一寸山間の谷間の趣を備へて居る。

五月に入ると、此川の畔りに僅かばかりの螢が出る、夫れはほんとうに僅かで、全體を集めても二百匹そこ〜位だらう、此だけが五月の半ばから、六月の初めにかけて出る螢の總數である。

此乏しい螢を、附近の人達は、日が暮れるのを待ち構へて捕まへに出る。悪戯さかりのデコ坊や茶目子は言ふ迄もなく、いゝ年をした者までが、手に〜笹の枝をもつて螢の火を追つて廻る。時には十六、七の金持の御嬢さんらしいのが、二人も三人もの下女を伴れ悠然と螢狩に来る。螢狩といふと寔に風流だけど、實は、たまにとび出す一匹、二匹の螢を、七人も八人も人が奪ひ合ふのである。澤山の狼が、たつた一匹の小羊を奪ひ合ふのと、其狂猛な態度と惨忍さに於て少しも變るところがない、そして結局は、

奪ひ合ふて踏みつぶしたる螢かな

正 巳

の一句を現實に示すに過ぎない。

斯うした悲劇が毎晩〜私の家の前で演ぜられるのだ。私は此淺間しい光景を見るたびに、熟々螢とる人達の無風流と冷酷とを憎み、光故に、美故に、さなきだに短かい命を更らに縮められる此蟲の哀れを思はずには居られない。

さて螢といふと、誰しもすぐに火といふ事を想ひ起す、さこと螢と火とは離れ得ない縁でつな

ほたる

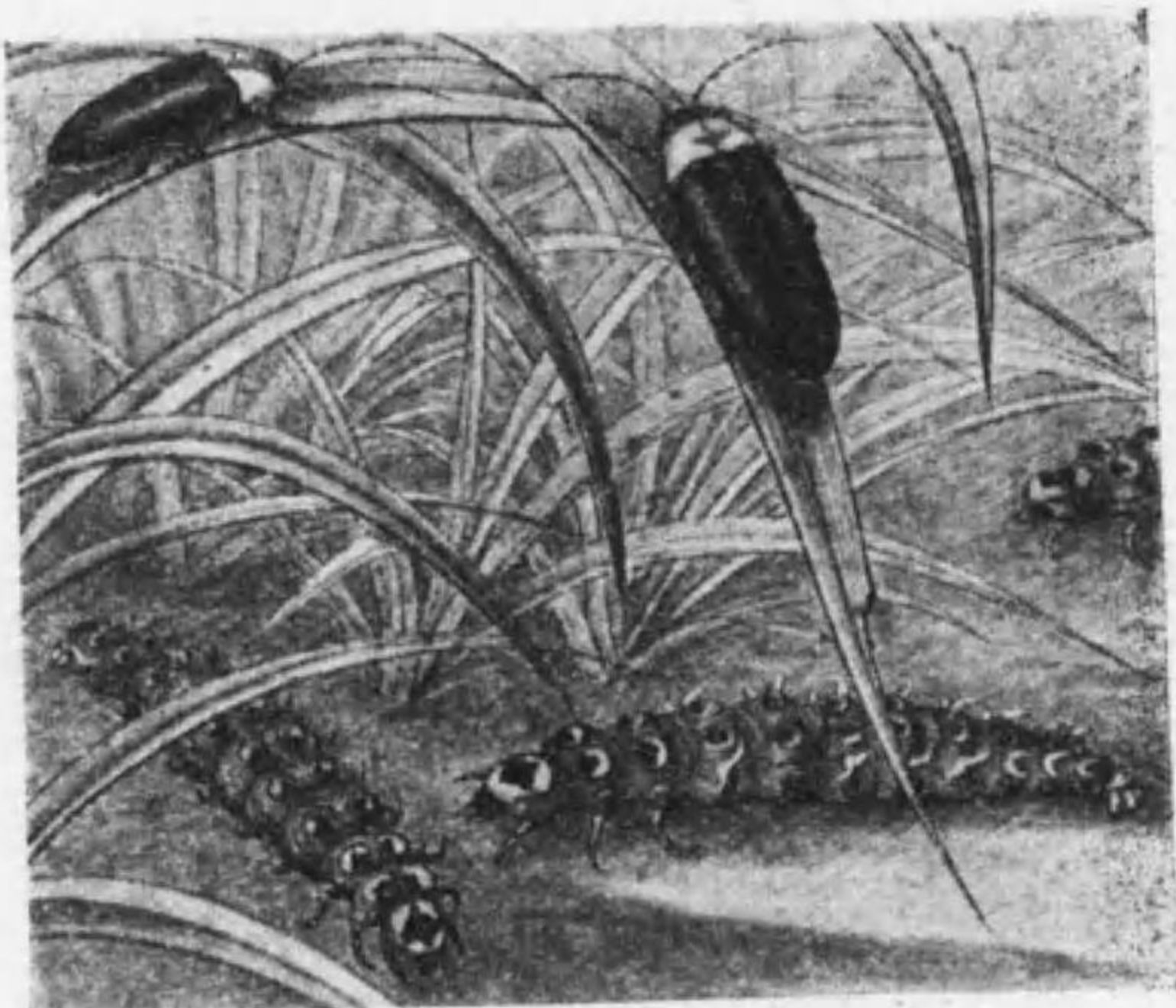
蟲  
がれて居る。

そも「ほたる」といふ言葉が火に縁のあるもので、「ほたる」とは「火垂る」又は「火照る」等といふ意から出たのだといふ、支那では螢の事を「夜光」又は「夜照」「流火」「自照」など、稱へて居るが、何れも皆火に縁のある名のみである。

では螢といふ蟲は、皆光をもつて居るかといふと、決して左様ではない。日本にも螢の種類は百種程も居るけれど、其中で光をもつて居るのは十指を屈するにも足りない位で、他のものは螢とは言へ、光を持たないものばかりである、従つてさういふ螢は、昆蟲學者以外の人には全で顧みられないが、其代り腕白小僧や無情漢の犠牲の難は免れてゐる。

そこで螢は日本と支那に限つたものかといふと、決してそうでない、況く方々の國々にも居るので、殊に熱帯地方に居る螢は體も大きく、光も強く、優に燈火の代用となる。昔メキシコの海岸に海賊が横行して旅船を襲ふので困つた時に、旅船では、夜間燈火を消し、其代り螢の火を使つて航海して海賊の難を避けたといふ。又同じくメキシコでは、土人が手や足の先に螢を結び付け

て燈火の代りとして夜道をしたといふし又螢をば首飾として使つたとの事である。



源 氏 螢 と 其 幼 蟲

日本でも現在近江の守山地方では夜道をするには一本の杖を持つて出て、道々其杖で草を叩き其都度光る螢の明りで道を見分けて行くそうだ。其他螢の火を燈火の代用とした有名な話としては晉の車胤の故事がある。

斯様に人々から持て噪され重寶がられる螢は一體どうして出て来るものであらうか、といふ段になると大抵な人は黙つてしまふ、そして例に依つて偶發説を信する者が多い、尤も螢が塵や芥から湧くといふ事は昔から考へられて居た事で、

五月雨に草の庵は朽つれども  
ほたる



螢となるぞうれしかりける

匡房

とか

どの草の螢になるか見て居たし

齊

などの歌や句がある。又支那の學者なども草が腐敗つて螢となるものと思ひ込んで居たのである。然し時かぬ種は生へぬの例へ通り、螢も産む者がなければ生れるものではない。

夏になると螢の親は川邊の水際の草の根本に黄色い芥子粒程の卵を産む、此卵は夜になると親同様に光を放つ、そして産れてから凡そ一ヶ月もすると、中から薄黒い小さな蛆が生れる、此蛆は則ち螢の幼蟲で、此蛆も尾の先に發光器を持つて居て何か刺戟を受けると強い光を出す。

此蛆は其年は蛆の儘で冬を越し、翌年の四月の末か五月の初めになると、水際の土の中に潜り込んで其處で皮を脱いで蛹になる。處が此蛹も亦光るもので、それは約二週間で愈々一匹前の螢となつてとび出して來る、斯やうに螢の一生は約一年だが、親螢の壽命は先づ三週間内外である。

右に述べた様に螢の一生は光である。若し螢から光を除けば一介の醜い蟲として誰も顧みぬに違ひない、それは螢仲間でも光を持たないものは全く世に知られて居ないので判る。實に光は螢の生命である。

音もせで思ひにもゆる螢こそ

鳴く蟲よりも哀れなりけれ

と歌はれ

戀し戀しと鳴く蟬よりも

鳴かぬ螢が身を焦す

と言はれるのも皆光故である。では螢の光は一體何ういふ役目をもつて居るのであらうか、といふと、第一に雄雌の間の合圖、第二には敵を脅す事、そして第三には他の動物に向つて警戒の信號を與へる事である。

五月の暗を縫つて飛び交ふ螢の大部分は雄である。雌は大抵草や樹の葉に止つてジツとして居

る、そして雄が光を放つてとび廻るのに對して雌は葉の蔭から一しほ強く光つて見せる。すると雌の居る事を見つけた雄は直ぐにその傍へ降りて來て一つ葉に止つて交尾を求める。然し決していつもそうとは限らない。只彼等が互ひに近よると、御互ひの光は何時とはなく非常に弱くなつて時には殆ど消えて終ふ事もある。そして御互ひに觸角を振つて暫らくは何か相談でもしてるかの如く、又御互ひに心を探り合ふかの如く、モヂ／＼してゐるが、話がどう決つたのか、やがて雄は又光を放つてツイと雌の傍から飛び去つて終ふ事がある。それは丁度戀人同志の囁きを見るやうである、蟲とは言へ兩性が逢つたからと言つて、必らずしも直ぐに性的交渉が行はれるとは限らない。若い男女が知り合へば直ぐ其處に肉の關係の存在を想像し、頭痛に病む頑迷子の未だ／＼多からむ事を慮り、敢て螢のために一言を費して明をたて、置く譯である。

處で光る事は螢の生命であるが、では彼等は一晩中光り通して居るかといふと、まさかそんなわけではない。彼等が光り始めるのは先づ八時前後からで、夫から夜が更けるに従つて段々と旺になり、十時、十一時頃に至つて頂點に達する。然し十二時も過ぎて、一時、二時となるに伴れ

て彼等の活動も静まり、何れも草や樹の葉裏に蔭れ、光る事もやめて、靜かに睡りに就く。然し大抵の人達は夜半までも螢を追ひ廻らす事はしない、先づ九時か遅くとも十時頃には家に歸つて寢て終ふが、實はそれから後が螢の活動期なのである。然し、丈草の

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりかな

といふ一句はさすがによく螢の習性を看破つたものである。

さて短かい夏の夜も明けて、白い陽の光が川面を照らす頃、昨夜螢を追ひ廻した川岸に立つて見ると、ゆふべあれ程居た螢は何處へ行つたのか影も見えない。しかし其邊の草や樹の葉の裏をかへして見ると、昨夜の元氣と美に引きかへて、如何にも見榮えのしない、いちらしい螢の姿を見るであらう、實に白日の下に引き出された彼等は醜い一介の蟲ケラである。詩的觀念を棄て、下品に考へれば、螢も亦カフエーやレストランの女給等と同じく、夏の夜の景物以外に何の價値もないものであるかも知れない。然し乍らそれは螢の光の眞價を知らなければいざ知らず、若し彼の光の價値を知つたならば誰しも其神秘に驚かぬ者は無からう。

螢の光が美といふ點から見ても優雅な事は説明する迄もない。然し管に美の方面からばかりでなく科學的見地からも貴重な光として學者の注意を惹いて居る。

螢の光は古來の謎である。それは光であり乍ら全く熱を伴はない。吾々の力で作り得る最も進歩した光として考へられて居る電燈でも、非常な熱が伴ふ、エネルギーの大半は熱となつて消えてしまふのである。處が螢の光の一回發光の熱は僅かに一度の四十萬分の一にも達しないといふ。而も風に消えず水に滅せず、實に理想的の光である、だが遺憾乍ら人工では未だかゝる光を作る事は出来ない。然し近來の研究では螢の光は一種の酸化作用である事は疑ふ餘地がない、今螢をとつて腹の所を肉眼で見たのでは、只うす黄色に見えるだけであるが、若し顯微鏡で檢すると無數の細胞の集合で、其周圍には澤山の氣管がからまつて居て、此氣管に空氣が通ふ度に細胞内の物質が酸化燃焼して發光するのである。そして其物質といふのは一種の脂油であるといふ。

又螢は前にも述べた通り親も光り幼蟲も光り更らに蛹も光を出す、して見れば螢の光は夏と言はず冬と言はず一年中絶えぬのみか、凡そ螢が地球上に現はれてから今日まで、又螢が一匹残ら

ず地球から居なくなる時が來ぬ限り、永遠に互つて絶ゆる事はない筈である、即ち螢の光こそは永劫の光である。

尙螢は其幼蟲が水邊に居る宮入貝と言ふチストマの中間宿主を食つて呉れるので醫學上にも有名である。

前に一寸言つた通り螢の種類は日本だけでも百餘りも居る。然し普通よく人に知られて居るのは源氏螢と平家螢との二つである。源氏螢といふのは形が大きく又大螢とも言ひ、平家螢は小さく一名姫螢とも呼ばれてゐる、源氏螢の方は谷間の清流の邊りに、平家螢の方は多く沼や池の畔りに棲んで居る。此他遠く北の樺太には「からふと螢」對島には「あき螢」といふのが居る。

水の中の蟲（みづのなかのむし）

蟲といふものは陸の上に限つたものかといふと決してそうでない。水の中に棲んで居る蟲も随分澤山あるし、又普通陸の上の蟲とばかり思ひ込んで居る者にも、其仔蟲時代を水の中で過すのが却々多い。彼の空中の覇者である蜻蛉にしろ、短命の代表者蜉蝣かげろうなんか何れも仔蟲時代を水の中で暮したものである。然し蜻蛉や蜉蝣みたいに半生涯づゝを水と陸とで暮すもの以外に、水に育ち水に暮す蟲も澤山にある。然し此處に私が密かに羨望に堪へないのは、水蟲といふ水蟲が必つと翅をもつて居て、氣の向いた時には空中に飛び出して遊んで歩く事が出来る點である。たかゞ蟲風情の分在で、又何といふ贅澤さだらう、人間だつてそんな贅澤は與へられてない。私は小さい時分に「おしどり」や「かも」が空も飛べれば水も泳げ陸も歩けるのを見て、鳥のくせに生ちやんな奴だと思つたけれど、其後水蟲に至つては水を潜ぐる事も水面を泳ぐ事も、おまけに陸上も歩き、空も飛ぶ事の出来るのを知つて、すつかり人間たるの悲哀を感じてしまつた。今で

も彼等が斯様な豊かな恵に浴して居るのを見ると熟々羨ましさには堪へない。何しろ近頃人間はやつと飛行機や飛行船を工夫して何うか斯うか空を飛ぶ事が出来る様になつたけれど、それも未だ

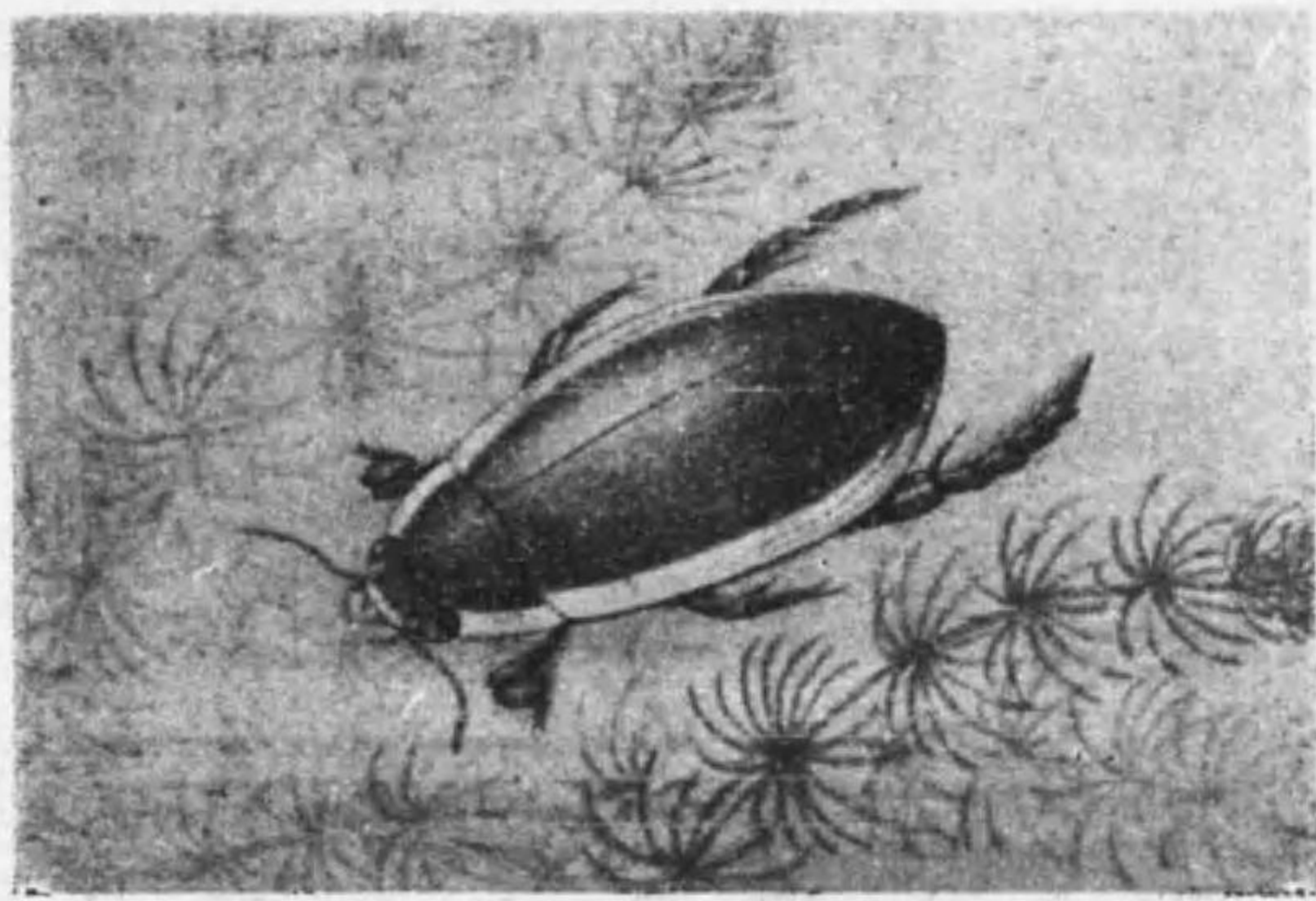


水中の暴亂者「めがた」が蛙に抱き付いて血を吸つて處るに

ホンの一部の人だけで、吾々が乗り合自動車へでも乗るやうになるのは何時の事やら知れたものでない。それを思ふと、蟲風情に與へられてゐる此便利な力が、萬物の長たる人間に與へられてゐないと言はふか奪はれたと言はふか、此不公平な造化のやり方には私は大不満である。

餘計な不平はさて置いて、水の中の蟲は今言つた通り實に恵まれた果報者だが又彼等は揃ひも

揃つて意地悪の狼みたいな奴ばかりである。何れも此れも肉食主義のガツ／＼やでいつもキョロ／＼眼で獲物を覘つて居る。中でも狼の筆頭は「たがめ」といふ奴だ。此奴は水に棲む追剥團の隊長ともいふべき格で、體も大きく身の丈二寸もあり見るから殿めしい、と言つて何處となく野蠻な面構への蟲である。其薄つぺらな灰色が、つた體と管のやうな嘴の兩側にくつ付き合つた眼つきは凄味たつぷりであるが、更らに素人の度膽を抜くに足るのは太い頑丈な大鋏形の前脚である。彼は水の中を遊び乍ら此大鋏を使ひ、いきなり獲物に抱きつくなら針のやうな嘴を獲物の體に刺し込んで其生血を吸ふのである。何しろ體が大きく力も強いから蛙や小魚位は忽ちやられてしまふので養魚をやる人達からひどく憎まれてゐるし、又田植の時に足を挟まれて怪我をするので、百姓達からも嫌はれてゐる。夏の夜よく電燈の光に誘はれて室の中に飛び込んで来てバサリと大きな音をたて、疊の上へ落ち、ノソ／＼してゐる事がある。大抵な者は其兇惡な面構へに怯氣を震つて捕まへる事が出来ない。又ウツカリ下手に捕まへやうものなら例の大鋏でひどい目に逢はされる。

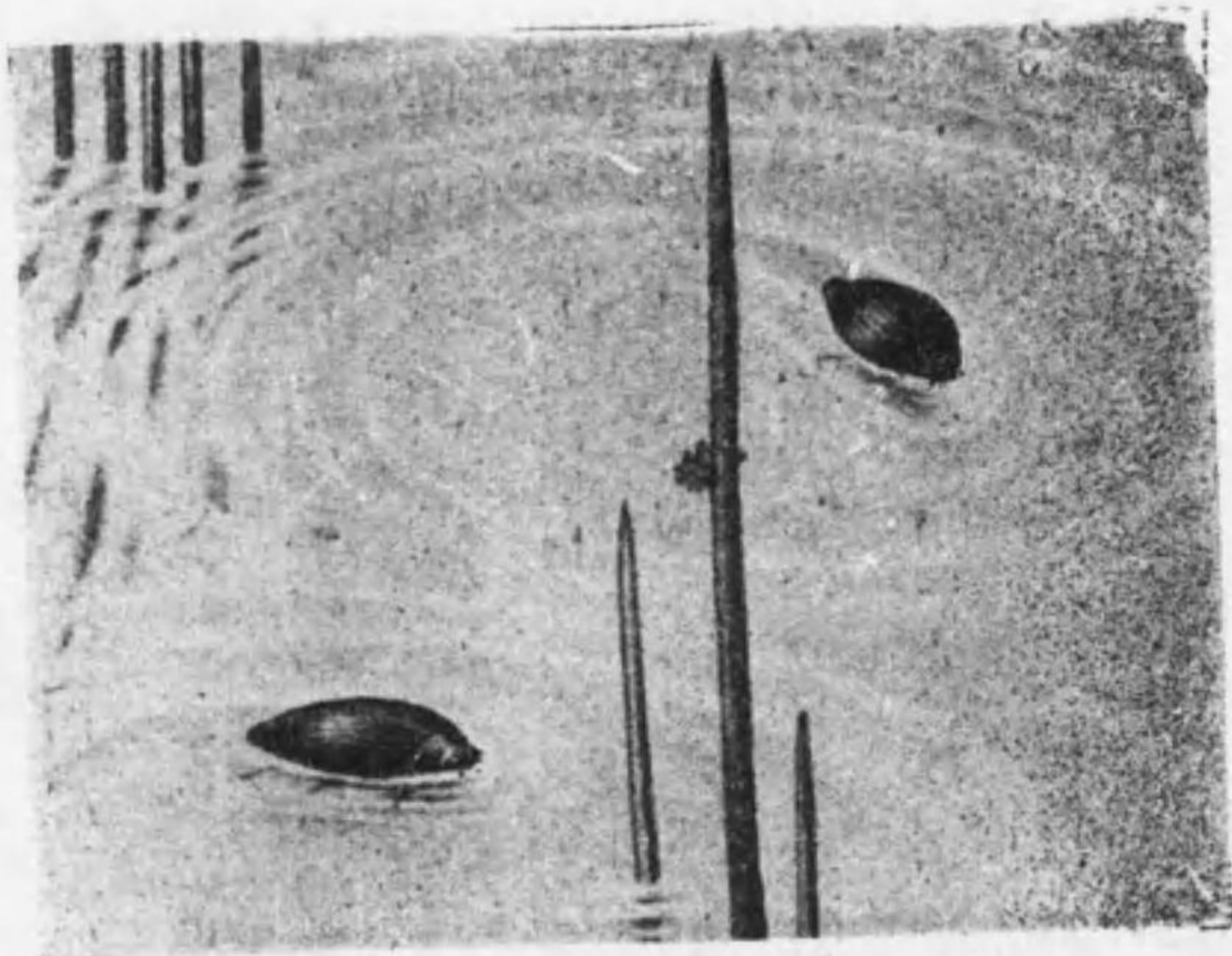


「うるごんげ」者輕瓢の中水

此「たがめ」に次いで追剥は「げんごろう」である。これは又「たがめ」とは全で違ひ、見た處は龜の子形のスベ／＼した體をしてゐて其小さな眼と細い觸角、それから橈のやうな形の後ろ脚を、體の兩側にヒョッコリ投げ出して水面に浮んでゐる様子は如何にも呑氣坊に見える。そして一寸指で觸つたりすると、いかにも驚いた風で、居眠りを叩き起された伊勢屋の小僧が、用向も聞かずに品物の納つてある倉庫に駈けつけてマゴ／＼してゐるやうな態度で、狼狽して水の底へ駈け込んでゆく。そして暫らくは夢中になつて水の底を跳り廻つてから、急に何か考へ事でも始めたかの如くポカ／＼水面に浮び上つて、ポカ／＼としてゐる。まことに氣まぐれな呑氣坊に見える。けれども此で見かけによらぬ却々の亂暴者なので、自分より弱

い蟲や小魚は勿論、時には随分大きな相手にも喰つてかゝる。それに食ひ物がなくて困り出すと早速仲間割れを始め、弱い者から先へ遠慮なく片づけてしまふ。だから此蟲を飼ふのは却々骨で、餘程食物を豊にしてやらないと飛んだ事になる。それに又此蟲の仔供もやはり追剥ぎの性質に生れついて居る、そして親蟲のコケティッシュな風采に似もやらず、ドス黒い芋蟲みたいな體つきに、大きな顎をもつて居て、やはり水中の弱い者いぢめの餓鬼大将である。

水蟲の中でも一番可愛らしいのはグル／＼廻りの名人「みづすまし」である。枯草が青い若芽に變り、小溝の流れが一齊に春の歌を合唱する頃となると、何時の間にか此可愛らしい蟲は彼の得意のダンスを舞ひ始める。そして其瑠璃色を帯びたつや／＼しい背中には陽の光が白く反射して、丁度銀の豆が轉がつて居るやうに見える。若し少しでも物に驚いたりすると、此小さなダンサーは有りつたけの力を出し、眼にも止らぬ速さで回轉し始める。更らに大きな危険に出會ふと、ダンスを止めて狼狽て、水の中に潜つてゆく。その時彼は水の中で吸ふために腹の下に空氣の一と塊を抱いてゆく事を忘れない。そして水草の根元や底に沈んで居る棒切れの蔭に隠れて暫らく



しますずみ (手名のトリケス)

の間は小さくなつてゐる。やがてもう大丈夫と見込みをつけると、又ツイと水面に浮び上つてダンスを續ける、其すばしつこい事は水蟲中第一で却々捕へ難い、水面の滑走では「あめんぼ」も一と角のチャ、で英語ではこれをポンド、スケーターと呼んで居るけれど、「あめんぼ」の滑走は此「みづすまし」の妙技にはとても及ばない。彼を普通の「スケーティング」とすれば「みづすまし」のは「フィギュア、スケーティング」である。では此名選手は一體どんな装置をもつてゐるかといふと、彼がスケートに使ふ脚は六本である。其中後ろと中の二對は短かく、それで水を後ろに蹴つて體を進める、それから前の二本は馬鹿に長く、まるで手足道人の手を見る様である。彼は此前の二本の長い脚で方向の舵を取るのである。水中の名ダ

ンサー、フイギユアスケイティングの名選手も捕まへてみると興がさめるやうな手長道人である。私は曾てハーモニカの大家川口章吾氏を見て、その偉軀と、口の大きい出齒の様子に接し、日頃の美しい幻想を破られて「アツ」と思つた事があるが、此蟲を見るたびに其時の事を思ひ出す、此蟲もやつぱり肉食で他の小蟲や幼魚をとつて喰べてる。

陸に自分の亭主を取つて食ふ鬼婆の「かまきり」が居る通り水の中にも「みずかまきり」といふのが居る。然しこれは自分の亭主を食ふ事だけはしないけれど、形も、性質も共に陸の「かまきり」によく似て居て、水草の蔭や水底の土の上にジツト身を潜めて獲物を待ち受けてゐる。若し手頃な小蟲や幼ない魚なりがウツカリ近寄らうものなら、いきなり鎌形の前脚を伸ばして捕まへる。そして陸の「かまきり」とは違つて管のやうな嘴を相手の體に刺し込んでその生血を吸ふのである。陸の「かまきり」が草の葉に似て眞青なのに引きかへて此「みづかまきり」は土色をして居る。それは如何にも野暮な色である。それで水の底の土の上に居てもすれば、棒切れが落ちてるとしか見えない。これが彼の満着術で、ウツカリ棒切れと思つて油断して近よる迂濶者を彼は待つて

居るのである。

斯様に水の中の蟲は皆な殺氣満々たるものばかりだが、こゝに一つそうでないのがある。それ



「しむひおこ」 蟲の惱煩子

は「がむし」と言つて其大きさを、形は「げんごろう」によく似て居て、一寸見ると「げんごろう」の一味の悪漢に見えるけれど、實は至つておとなしい性質で、水草をたべて生きてゐる。然し仔蟲は親と反對に肉食黨に生れついて居る。親と子とが全然異つた食性をもつて居る所に味がある。

それから又こゝに一つ面白い蟲がある。それは大きき五六分の鍋の蓋のやうな形をした蟲である。而も彼は鎌形の前脚をもつて居て一寸凄味が

あるけれど、此蟲の亭主は頗る親切者で、女房は卵を亭主の背中に産み付けると、亭主は仔蟲が

生れるまでそれを背負つて歩いて居るのである。猥惡揃ひの水蟲界には珍らしい事で此蟲の事を「こおひむし」と呼んで居る。

## 蝶

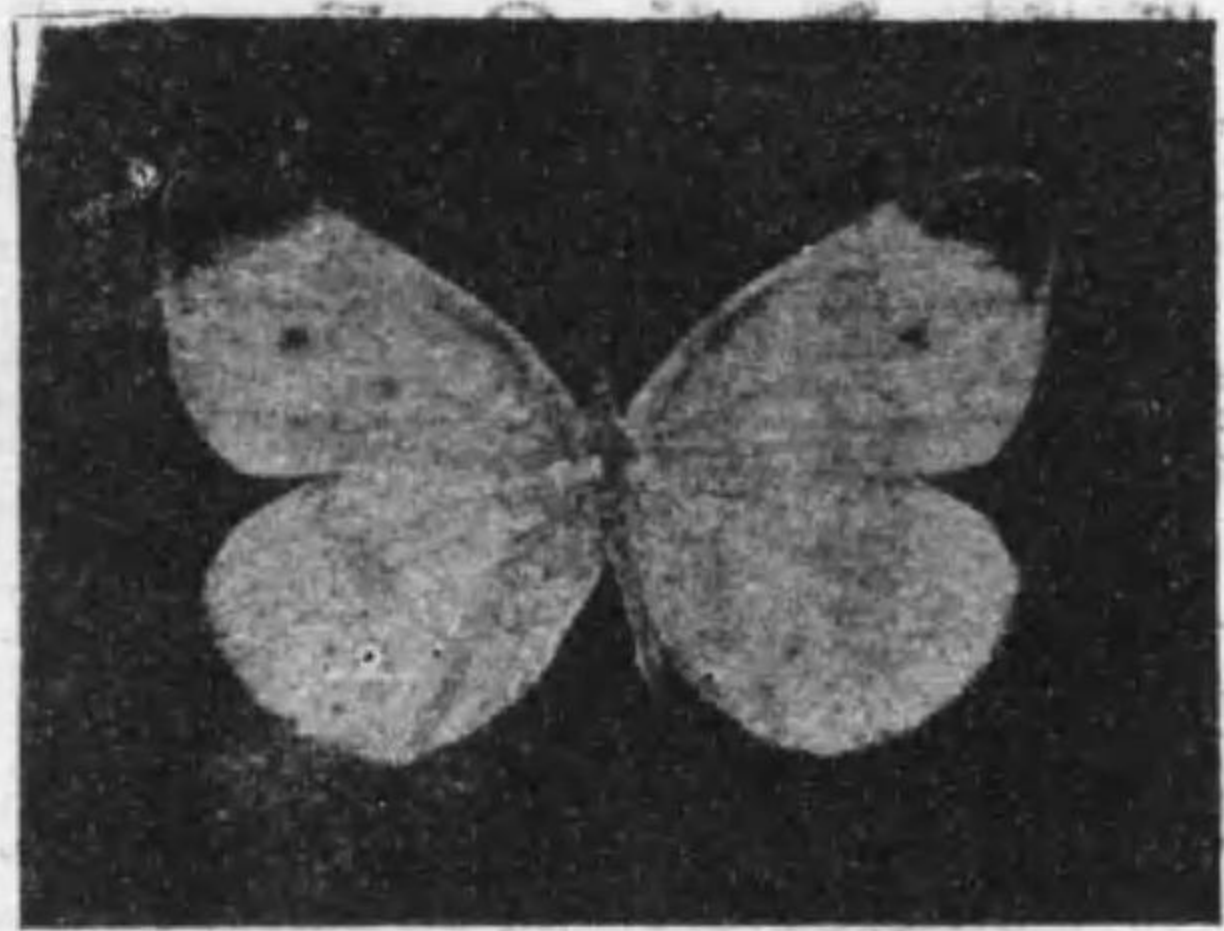
(つと)

蟲の種類も随分ある、地球上に棲んで居る蟲で目下知れてゐるだけでもザツト三十萬からある。全動物の四分の三は蟲が占めてゐる。それ程澤山の蟲の種類が居るけれど、其蟲の代表者ともいふべきは蝶々であらう、それは日本だけの事かも知れない、然しそれでも結構である。兎に角吾々の頭に蟲といふものゝ感念を強く與へ、又蟲といふものゝ形を最もはつきりと思ひ浮ばせるのは此蝶々か、でなければ芋蟲と毛蟲である、然し此芋蟲や毛蟲は蝶々の前身なのだから、やはり蝶々と見做しても差支へはない。蚤や蚊や蠃蜥や螢もやはり立派な蟲だけれども、蝶や芋蟲程蟲といふものゝ感念をピタリと感じさせない。

蝶が何んな人にも知られて居るのは言ふ迄もなく其姿の美しいためである。美くしい模様のついた四枚の翅は彼等の生命である。螢が光がなければ誰も注意しないと同様に、蝶にあの奇麗な模様の翅が授かつて居なければ誰もチャホヤする者はあるまい。それから蝶を有名にして居るも



う一つの者は花である。これが蝶の出世に對して非常な大きい後楯となつて居る、蝶が居なくても花の名聲は變らないだらうが、花が無ければ蝶の價値は餘程下落するに違ひない。其證據には百合の花に黒鳳蝶くろほうてつといふ大きな眞黒な蝶々が訪れて居る風情は誰しも優雅として讚めるけれど、さて其黒鳳蝶だけを捕まへて鼻先に突きつけられると、大概な女は氣味悪がつて大仰な悲鳴をあげて逃げたりする。又庭の草花に白蝶や黄蝶が來て蜜をねだつてゐるのを見て「マア可愛いこと」などと言つて居乍ら、蝶を捕まへる事はとても氣味悪い事として居る、殊に翅の鱗粉をまるで毒藥か何かのやうに恐れて居るなど、吾々から見ると滑稽至極である。要するに蝶のやうな美しいものでさへ、花といふ後楯があるので初めて人にも知られ、愛せられもするので、蝶だけではとても現在程の名聲を得る事は六ヶ敷い。まして一般の蟲が人の注意を惹かないばかりか、蟲と言へば何でも毒蟲か惡魔のやうに思はれ、いつも壓迫を被つて居るのは無理からぬ事だ。私が斯うした一書を書くのも其主なる目的は、彼等蟲なるものゝ生活を廣く世に紹介して、彼等に對して理解と同情とを持つて貰ひたい爲である。

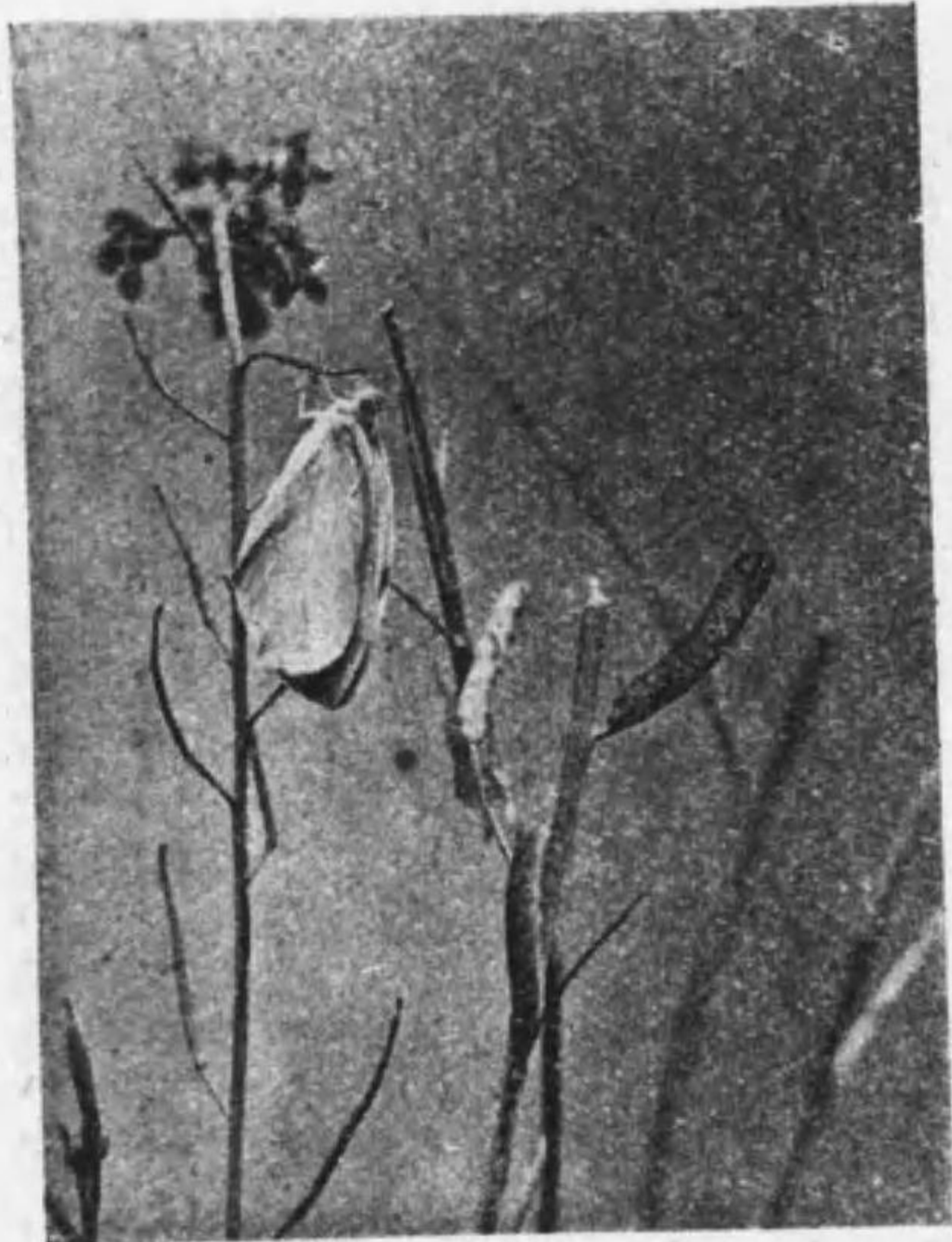


蝶 白 紋

春になつて菜の花が咲く時分になると、いつの間にか白い中形の蝶々が畑の上をヒラ／＼と飛んで居る、白地に黒い星のある翅を持つた、どつちかと言ふと夏向の装ひをして居る。此は澤山の蝶の中でも一番普通の蝶である。彼等はキツト菜畑か大根畑の上を飛んで居る、無論紫雲英畑や麥畑などの上も飛んで居るけれど、何と言つても一番多いのは大根畑である、何故彼等が大根畑に多いかといふと、それは此蝶の仔蟲は大根の葉を喰べて大きくなるためと、も一つは此蝶が大根の花が大好きだからである。菜種はどうかと言ふと、仔蟲は菜種の葉を喜んで喰べるけれど親の蝶は菜種の花は好かない。斯ういふと大變妙な事で、大抵な人は白蝶が菜種の花と仲好しな事は小學讀本にも書いてあるぢやないか、と質問されるに違ひない、然し其は昔からそう言はれ又思はれて居るだけの事で、白蝶と菜の花とは決して仲好しではない、誰が何と言はふと、これだけは私は私自身の

觀察から斷言する。白蝶は茶種の花は嫌ひだ。嫌ひでない迄も好かない事は確かだ。彼が好きなのは大根の花でなければ其他の白い花だ。今此處に茶種畑と大根畑と並んで居るとする、そして兩方共に花盛りだとする、斯ういふ場合は大根畑の上は白蝶の訪れで大變な賑かさなのに引きかへて茶種畑の方は氣の毒な程寂しい。又大きな茶種畑の周圍に心ばかりの大根が植つて花を開いてる事がある、斯んな時も眞中の茶種の爛漫たる花には眼も呉れないで、白蝶は皆な周圍の大根の花に集つてゐる。白蝶が大根畑の上を飛んでゐるのは大根の花から蜜を吸ふのが目的でもあるが、又雌は其葉に卵を産む仕事をもつてゐる。卵を産まふと思ふ雌はすぐ判る、それは只遊んで居る時と違つて飛び方がずつと落付いてゐる。靜かに低く葉の上を舞ひ乍ら時々そつと色の白い細い脚で葉に取り縋がる、翅を頻りと細かく震はせて體の位置を整へ乍ら、お尻をクルリと弓なりに曲げて葉にくつ付けてから又そつと離して飛び立つ、そして其後を見ると、青白い徳利形のものポツリと残されてゐる、此が白蝶の卵である。此卵からは七日も経つと、それはく、小さな二分程の青蟲が生れる、此青蟲は卵から出ると間もなく、今迄自分が入つて居た卵の殻をモリ

く、と嚙ちり始める、そして休んでは嚙ちり休んでは嚙ちりして、私の實見では大抵二時間位かゝつて卵の殻を喰べてしまふ、此が白蝶の子の第一の食物である、自分の入つてゐた卵の殻を喰べるとは一體どういふ積りなのだらう、そ



青 蟲 と 白 蝶

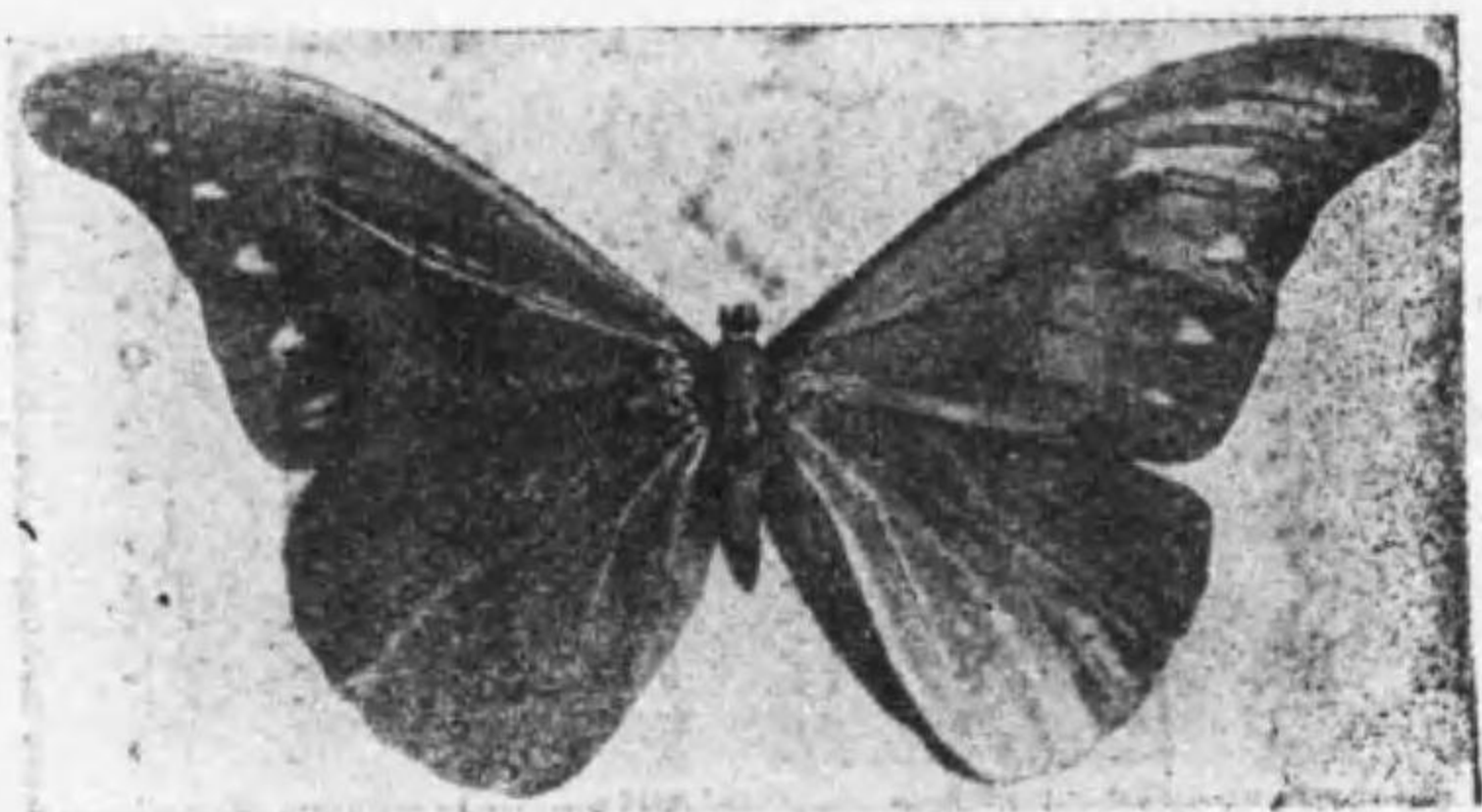
れは如何にもさもし根性の様に思へるけれど、或る學者は自分の所在をくらすためだと説明して意義をつけて居る、これは一應尤もらしい名説に聞えるけれど、そんなら何の青蟲でも皆自分の卵の殻を喰べてしまふかといふと、決してそうでないし又卵の殻の存在が他の蟲の攻撃を誘ふ目標と

なるとも思はれず餘り感心した説明ではない。

卵の殻を喰べてしまふと今度は葉を喰べる、それから四度皮を脱いで一寸ばかりの大きさの眞青

な蟲となる、そして充分大きくなると菜つ葉に暇を告げて近くの垣根や塀などに這ひ登り、絲で體を懸けて踊になる。踊になつてから十日もすると其背中が縦に割れ、其處から白蝶がとび出す。どんな蝶々でも皆な其經歷は卵、幼蟲、蛹の三つの時代を通つて初めて蝶になるのだ。見るから嫌らしい毛蟲や芋蟲が、青い樹や草の葉だけを喰べて、あの美しい模様や色のついた蝶になる事は何と言つても奇蹟である。普通の人達は蝶々と言へば白、黄、黒位しか知らないけれど、澤山の蝶の中には實に素晴らしい美しさのものがある。それはたゞ色や模様ばかりの美ではなくて、翅全體が金緑に光るもの、銀の延べ板のやうな光澤のもの、純紫の幻色を現はすものなど、實物を見なければとても想像も出来ないものがある。而もそうした珍品の總てが青い樹の葉一つの原料から製造されるのであるから不思議といふより他はない。何と言つても自然の仕事には人工の及ばない微妙さがある。

蝶の種類も随分ある。日本だけでも今四百五十種ばかり知れて居る、此澤山の蝶の中で誰でもよく知つて居るのに黄蝶といふのがある、眞黄色で翅の先が一寸黒く可愛らしい蝶である。この



蝶の産ルツラブ  
るみてい輝に色青淡の標屬金が面全の翅

蝶の幼蟲は萩を喰べて大きくなる。それから例の鳳蝶おひだてと言つて、淡黄色と黒のだんだらの大きな

蝶、眞まことつ黒くろな鳳蝶おひだて、二つとも優美な蝶だが此等の蝶の幼蟲は「からたち」や蜜柑の葉を喰べて居る見るから嫌らしい芋蟲である。然し斯ういふ氣味悪い芋蟲でも、自分で飼つて餌をやつて見ると、段々に愛情が湧いて来て却々可愛らしい所があるもので、決して憎めたものでない。彼のお蠶かみこだつて決して氣味のいゝ蟲ではない。青白いムク／＼した癩病やみ見たいな色澤からしていゝ感じはしない、しかし絹といふ貴重品を提供してくれる事と、長い間飼ひ馴れた事のために誰も嫌がる者はないのだ。序でだから話して置くが、蟲の中で蠶位だらしの無いものはあるまい。それは蠶が悪いのではなくて罪は人間に在るのだが、長い間の貴族的贅澤生活は蠶から總ての獨立力を奪つてしまつてゐる。食べ物は一々鼻先へ運んで

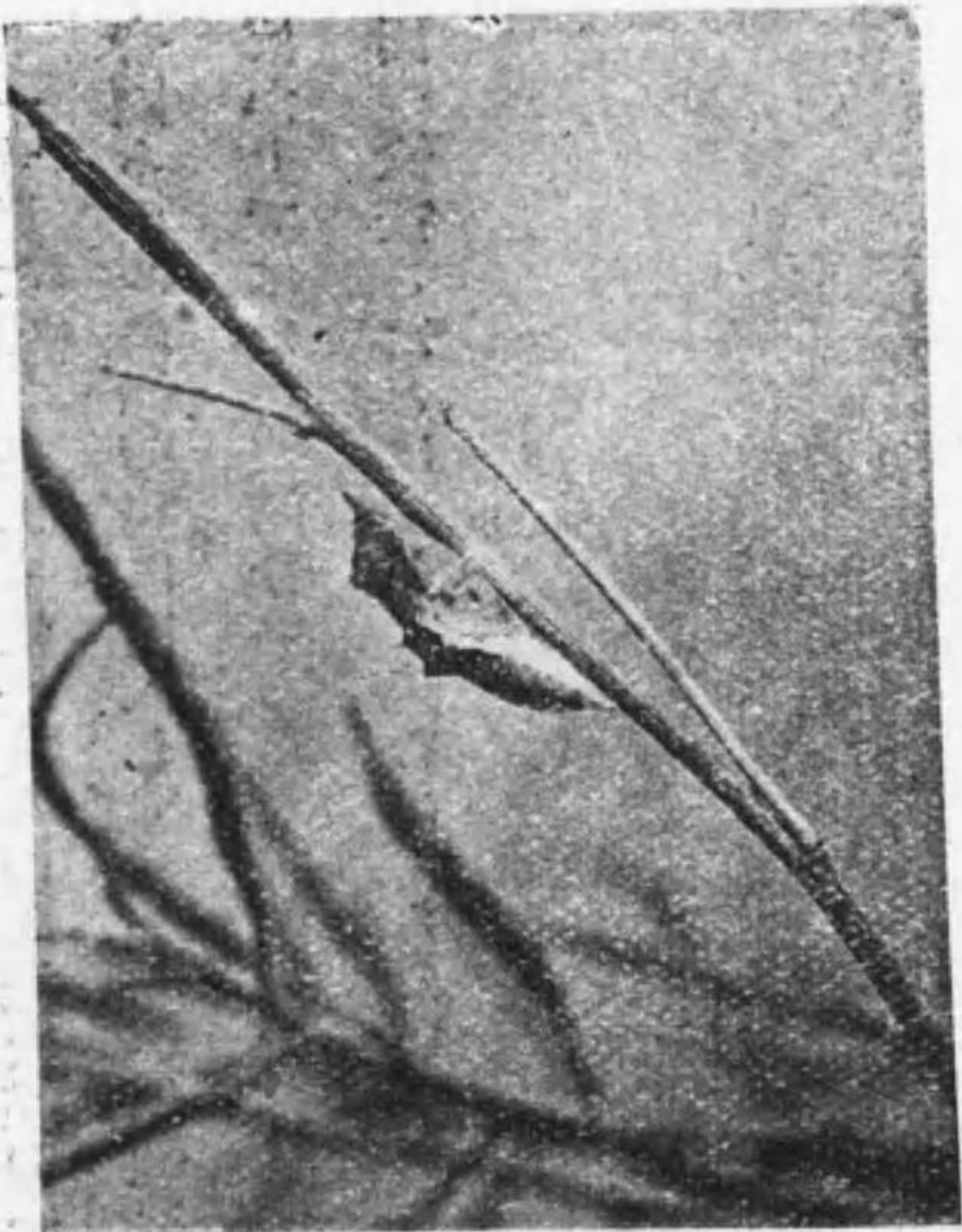
貰ふ、糞便は奇麗に掃除して貰ふ、少し寒ければ火をたいて暖められる、暑ければ風通しをよくして貰ふ、果ては結婚の手傳ひまでして貰ふ贅澤さである。彼等には足はありながら殆んど役にたかない。若し屋外の桑の樹にたからすと皆なボタ／＼地面に落ちてしまふ。蠶と言ひ其親の蛾と言ひ、無能遲鈍な事はお話になつたものでない。たゞ彼等は絹といふ贅澤品を出す事だけが感心と言へば感心な點だ。蟲ですら餘り贅澤生活の結果は斯の通りである、セチ辛い世の中に立つて激しい生存競争の勝利者となるには、贅澤生活は大禁物である。働らく事、苦しむ事、これが生活の根本義でなければならぬ。

蝶の世界を見ても、澤山居て平凡な蝶程性質が鈍く、數の少ない珍らしい蝶程敏捷だ。例の白蝶や鳳蝶、黄蝶などは何れも何處へ行つてもゾロ／＼居る蝶で、飛び方からして實にノロ／＼して居る。私はよく此等の蝶をステツキの一撃で叩き落す事が出来る、然し少し珍らしい蝶たはまなどになると、却々敏捷で網で捕まへるのでも容易でない。彼等は憶病なのか或ひは猜疑心が強いのか却々人の近よる事を許さない。少し注意すると斯うした所にも蝶の個性といふものを窺ふ事が出来る。

然し假令蝶風情でも餘り猜疑心の深い奴は憎らしくなる、又性的行爲のたしなみ等も蝶によつて大いに違ふ。前に「しでむし」の所で書いた「べにしじみ」のやうな慎しみ深いものもあるけれど、又例の白蝶などになると、それは

だらしない。花園、庭先到る處で醜態を見せてゐる。假令蝶かけらでも慎しみのあるものと無いものとは品かが違ふ。

一寸見ると蝶の生活は實に香氣で何の屈澤もなささうに思へる、毎日花の間を飛び廻つて蜜を吸ひ、自分の好きな戀人を追つかけてゐればいゝわけで、苦勞などはまる



紋白蝶の蛹

でないやうに見える、然しあれで蝶の生活も却々樂ではないので、激しい雨や強風の日には随分惱まされる。それにいろいろな敵が居て彼等を苦しめる。寄生蜂と言つて、蝶の幼蟲の體の中に卵

を産み込んで幼蟲を殺すものがある。又卵をつけ覘つて食ふ奴がある。そういう敵のために先づ七、八割は途中で死んでしまふ。

一寸見には如何にも愉快其ものゝ様な蝶の一生涯も、内輪に入つて見ると大變な違ひである。帝國ホテルの舞踏場に入出して、美しい異性を追ひ廻はして居る連中の生活だつて、決して愉快ばかりではない。随分いろんな寄生蜂や、其他の害敵に惱まされて居る事だらう、そう思ふと外面の愉快などは決して羨むに當らない。

### 秋の蟲（あきのむし）

風鈴の買ひ損ひで失敗した自分は、その不満足を鈴蟲で取り返へさうと思つた。豫而から風鈴を一つ軒下に下げたいと思つて居たが旅行から歸つて見ると、椽側の手洗鉢の上の所に銀色に光つて赤い丹冊の下がつた可愛らしい風鈴が、月形のしのぶに絲でつるされて風に揺られて居た。私の旅行中に姉と姪とが神樂坂の夜店から買つて來たものだが、其風鈴はいくら風が吹いても鳴らなかつた。下の丹冊が風でヒラつくとかチ／＼といふ如何にも餘裕のない堅い音を義理のやうに立てた。

「餘り大きなのは、持つて來るのが大變だからと思つて小さいのを買つてしまつて、詰らない事をして終つたよ」姉は斯う言つて辯解した。

「買つた時はちつとも氣が付かなかつたの、ねえ御母さん、歸つて釣つて見て鳴らないのでガツカリしちやつたのよ」姪は斯うつけ足した。

何しろ折角買つて来た風鈴は誰からも優遇されずに終つた。夫れから四、五日して姉と姪とが新宿の夜店に行くといふので鈴蟲と籠とを買つて歸る事を頼んだ。そして前の風鈴の事もあるので、どうせ買ふなら少し位高くてもいゝのをと注文した。一時間ばかりして歸つて来た姪の手に細い竹を組んで家根船の形に作つた籠がつるされて居た。家根の四隈には赤い硝子に青いセルロイドの丹冊をつけ提灯までが下げてあつた。そして中には二匹の雄の鈴蟲と一匹の雌とが入つて居た。

軒へつるしてから一時間も経つて少し落ち付くと鈴蟲は盛んに鳴き始めた。姉も姪も私も風鈴の失敗を取り返へした様な氣がして喜んだ。然し此喜びも長くは續かなかつた、翌朝起きて胡瓜をやらうと思ひ籠を覗いて見ると、昨夜あれ程元氣に鳴いて居た雄が二匹共仰向けに轉がつて死んで居た、そして残つた雌もいかにも元氣なく弱つて居た。何故二匹までも一時に死んで終つたのか不思議でならなかつた、一匹の雌を二匹で奪ひ合つて争つた結果かと思つて檢べて見たけれど、どつちの雄にも傷らしいものも見つからなかつた。それから三、四日して私は銀座通りから

又二匹の鈴蟲を買つて来た、之はよく鳴いたけれど一週間ばかりで死に、それから又一匹神樂坂で求めて来たのもよく鳴いたが、やはり一週間ばかりで死んで終つた。それつ切り私は鈴蟲を買ふ事を止めてしまつた。

蟲の種類も随分澤山あるけれど、所謂秋の蟲程昔から人々に愛でられて居る蟲はない。詩を見ても歌を見ても、俳句を見ても、數々の秋蟲が詠まれて居る、日本の自然文學の對稱の大半は此秋の蟲であると言つてもいゝ、けれども蟲を籠の中に飼つて其聲を楽しむといふ事は、今から二百五十年前頃だといふ、其頃越後の生れで忠藏といふ男があつた。彼は江戸へ出て神田で八百屋をして居たが、或る日の事商賣の歸り途に其頃蟲の名所として名高かつた根岸の里にさしかゝつた時、偶と數匹の鈴蟲を捕まへた。そして夫れを家に持つて歸つて商賣物の胡瓜や茄子の片端をやつて置いた處、夜になると頻りと美しい聲で鳴くのだつた、家の人々も皆喜んだが、やがては隣近所へも知れて蟲の鳴き聲を聞きに来る者が次第に殖へ、店先に市をなす程となり、夜毎繁昌をするやうになつた。そこで主人の忠藏氏も大いに乗り氣になり、益々鈴蟲を捕へて来てはそれ

を飼つて育てる事を始め、終ひには本業の八百屋はそつち除けですつかり蟲屋になりすまし、「蟲屋の忠藏」と言へば誰知らぬ者の無い程有名になつてしまつた。處が其後顧客の一人である旗士で青山下野守の家來の桐山某といふ者と共同して蟲の育て方を工夫し、殖やし方の秘訣を會得して大々的に蟲の販賣を始め二人共大儲をした。

其後右二人の金儲を聞き知つた神田の足袋商の安兵衛といふ男も亦本職を棄て、「蟲屋」を始め、之も亦大いに儲けた。そして安兵衛氏の友人で龜井侯の臣の近藤といふ人は、竹細工の美しい蟲籠を作つて安兵衛氏に見せ、共にいろ／＼新機軸を出して名を取つた。

これが江戸に於ける「蟲屋」の創まりである。近頃では蟲の育て方も飼ひ方も進歩し、凡ゆる野生の蟲を人工で育て、時ならぬ時に美しい蟲の聲を聞く事が出来る。即ち普通鈴蟲でも、松蟲でも九月以後でなければ出て來ないのを、人工で育て、六月頃に親を出させて鳴かす事も出来る。だが此人工で育て作つた蟲は皆な虚弱で長持ちがせず、せい／＼十日か二週間でコロ／＼死んで終ふ。私の姉が新宿の縁日で買つたのが翌朝死んで居たのは別としても、銀座のも神樂坂のも僅

か一週間はかりで死んぢまつたのは皆人工で育つた弱蟲だからである。

近頃縁日の蟲やの前を通ると、蟲籠に對して拂はれて居る意匠と技巧との優れて居るのに驚かされる。値段もすいぶん高いけれど、可なり賣れるらしい。斯ういふと蟲屋に憎まれるかも知れないけれど、私は蟲を一匹づゝ籠に入れて聞くよりは、夏の夕方散歩の折蟲屋の前を通りすがりに聞くいろ／＼な蟲の音楽のオーケストラに優るものはないと思ふ。私はいつも、買つても買はなくても、二、三分はキット蟲屋の前に足を止める。然し蟲がいゝ聲で鳴くからと言つて籠の中に閉ぢ込めて楽しむといふ事は、螢を籠に入れて眺めて喜ぶのと同じやうに寔に罪な事である。由來人間は身勝手な動物で、鳥の囀へづる聲でも蟲の鳴き聲でも、花の美しいのでも、皆な人間に聞かせたり見せたりする事に在るやうに獨り決めにして平氣で居るけれど、假令ドブ板の下で鳴く蟋蟀にしる、決して人間に聞かせやうとして鳴いて居るのではない。

夕ぐれの風にきほへる松蟲は

誰が妻琴の音に通ふらん (千 蔭)

あきのむし

といふ歌があるけれど、黄金の延べ板を叩く様な松蟲の音も、銀鈴を振るかと思はれる鈴蟲の聲も皆妻戀ふ雄蟲の呼び出しの歌である。であるから美しい音を立てるのは雄ばかりであつて雌は決して鳴かない。「きりぎりす」にしる、響蟲にしる、蟋蟀にしる、それから蟬でも、鳴くのは總べて雄の方で雌は決して鳴かない。否鳴かないのではなくて鳴けないのである。美音を出す蟲の雄を検べて見ると、何れも蟲々に依つて夫々特有な發音装置を待つて居る。そして鳴く蟲の發音器を調べて見ると大體次の四通りに分ける事が出来る。

第一は摩擦音と言ひ、これは摩擦によつて音を出すので、それにも二色あつて「きりぎりす」や「こほろぎ」の様に摩擦の發音器といふ特別な装置を具へて居るものと「いなご」や「ばつた」の様に後肢の腿を前翅に擦りつけて音を出すものがある、又或る「ばつた」では只前後の翅を御互ひに打ち合わせるだけで發音する。今「こほろぎ」類の發音器を検べて見ると、前翅の右左に別々の摩擦面がある、それで左の翅は右の翅の上に重なり、其左の翅の根元裏面には細かい齒が並び立つて居る鏝狀器といふ三角形の部分があり、右翅即ち下翅の根元の表には今の鏝狀器を擦す

る摩擦片といふ部分があり、此兩つの部分を擦り合せて音を出すのである、そして此摩擦片の中央は膜質半透明で之を發音鏡と稱へ、音を強くする役を務めて居る。

第二には振動音と言つて、蜜蜂、虻、蚊等の出す唸りで、之は何れも翅の振動によつて出すものである。

夫れから第三には打撃音と言つて體の一部を他の物に打ち付けて發音する方法がある。茶立蟲が上脛で障子の紙を打つて「サツサツサ、」といふ如何にも物寂しい音を立てるのは此例である。

又第四には爆發音と言ひ誰も知る「へひりむし」が肛門から瓦斯を放つて「プツ」といふ響を出す類の發音がある。

斯様に蟲の發音の仕方にもいろいろある。そして蟲の發音の意義も一樣でなく、敵を脅すため、苦痛又は哀愁を現はすため、又自身の楽しみのために發音するものと考へられる場合もあるけれど、大部分は所謂異性を誘ふためである。そして夫れも雌が雄を呼ぶのではなくて、雄が雌を誘



ふのである、誘ふといふよりも寧ろ雌の歡心を買ふ事に努めるのである、吾々男性から考へると此上ない屈辱に思へるけれど、總ての動物界を通じて雄が雌の歡心を買ふため、何れも優れた飾りや、音をもち、それを巧みに使つて美しい妻を得るのにアクセクして居るのは否む事が出来ない。獅子の雄が房々とした立髪をもち、孔雀の雄が眼の覺める様な尾を具へ「きりぎりす」の雄が優れた音楽家であり、甲蟲かぶちしの雄が嚴めしい角をもつて居るのも皆雌の心を惹くための具へである。只人間だけが雄性より雌性の方が奇麗に着飾つたり芳香を放つたりして相手の誘引に氣を碎いて居る傾のあるのは面白い。尤も人間の女性の裝飾は男性に見せるといふ目的の他に、同性間に對する誇と優越とを味ひたいといふ慾望が大分混つて居る事も見逃がしてはならない。兎に角人間以外の動物仲間を觀ても、雄性が美妙な聲を立て、美しい飾をつけ、嚴めしい装ひを凝らして雌性の愛を得やうと努めるのは、決して笑ふ可きではなく寧ろ自然な事なのである。殊に蟲では一般に雌の數は雄の數に比べて非常に少ないものである。従つて雄が雌を得るには大いに努力が要る、その代り雌の方は平然として居ても賣れ残る心配なんぞ少しもない。だから蟲の世界で

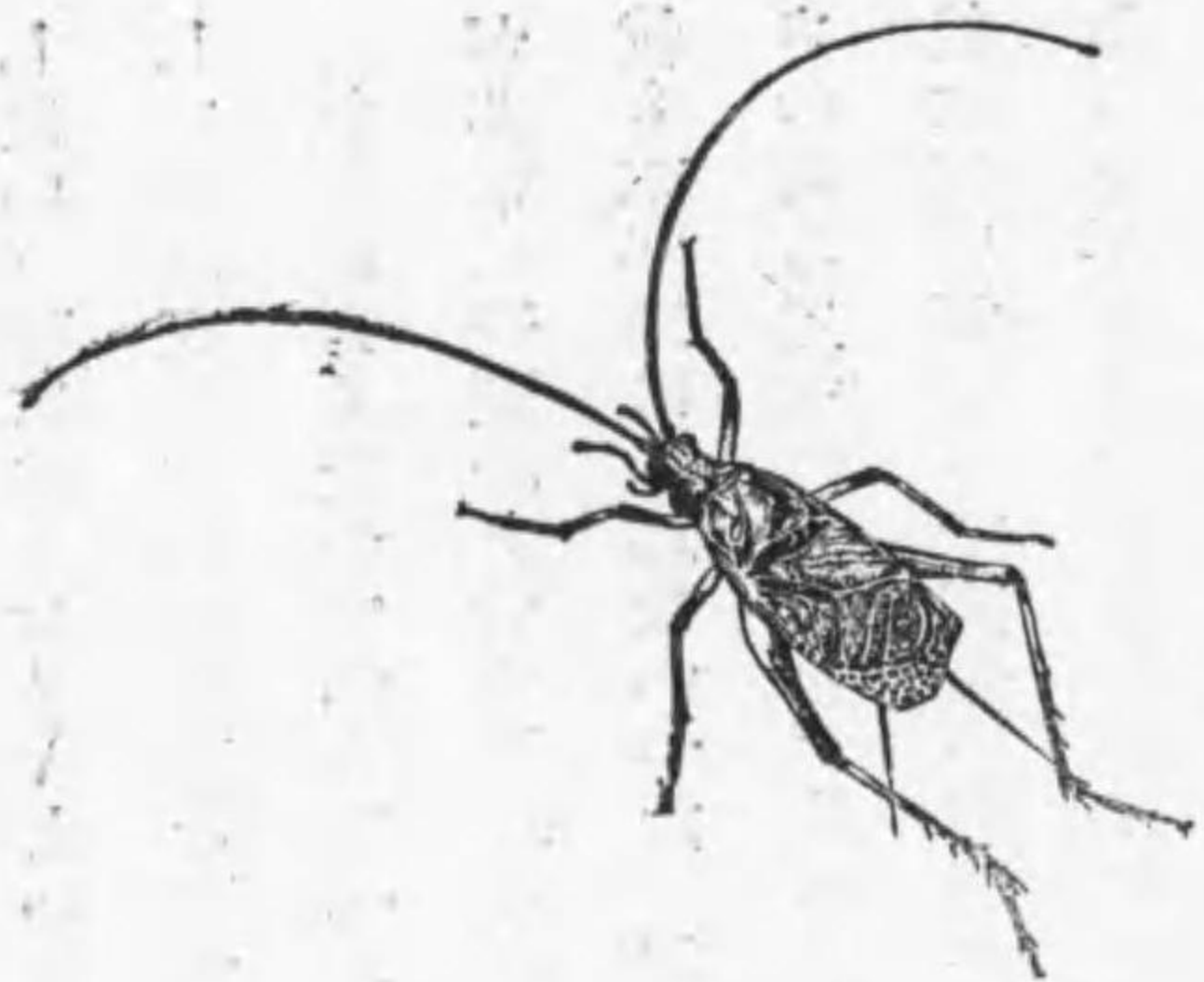
は雄は血眼になつて雌を口説くのに反して、雌は一般に冷靜で無表情である。人間の女性で男性に對して必死の反感を持つたり呪つたりする者は、又の世には蟲の雌に生れて來れば溜飲を下げる事が出来る。

右の様な譯故蟲を飼ふ時雌雄を一匹づゝ一つ籠に入れて置くと雄は満足して鳴かなくなつて終ふ。之は然もある可き事で、よく雄一匹では寂しからうと詰らぬ同情心から雌と同居させる人があるけれど、それは吾々には却つて不得策である。しかし多數の雄の中に雌を一匹混ぜて置くのは成績がよい、是は其雌に對して雄共が張り合つて互ひに競争するからである。蟲の聲を楽しむ人は斯うした蟲情ちゆうじやうの機微を解して置く必要がある。

鈴 蟲 (すずむし)

今夜も私の可愛い提琴家は日が暮れると共に彼の提琴を弾き始めた。然しそれは何遍弾き直してもよく鳴らなかつた。低い、まるで鐘でもこする様なシャ枯れた音を立てた、もう其音には柔か味も光澤もない。附木ツグキを擦り合せるのに似た堅さと錆の音しか残つて居ない。最初的美音に引き換へて又何といふ變り方だらう、毎朝起きると直ぐに胡瓜をやり、夕方になると又新しいのを取り換へてやる事を忘れなかつた姪も、此老いた音楽家に對して今は見向きもしない。籠を覗いて見る事もしない、そして最初の賞讃の聲は次第に輕蔑に移り、何時しか惡罵にさへ變つてしまつた。

「もう其鈴蟲は駄目ね、棄てしまふといふわ」最初一番の讚嘆者の妹が先づ排斥の聲を擧げた。「ほんと、いやな鈴蟲、私大嫌いになつちやつたわ」熱心な胡瓜の與へ手だつた姪も斯う言つて露骨に嫌惡した。



斯うした冷嘲と惡罵の中に立つても彼は其提琴を棄てないでゐる。そして未だ花嫁を呼んで居るのである。彼が私の家へ買はれて來た時は未だ若かつた。彼は琵琶形のうす黒い地に印度模様  
に似た浮彫の施してある二枚の翅を震はして徹き透るやうな音を立てた。その音は唳々として夏の夜の空氣に漂つて  
ス 家中に微妙な漣を漲らした。彼は鳴くたびに必つと五聲續  
ズ けて鳴いた、時には六聲まで鳴く事もあつた。蟲屋に言は  
ム せると七聲續けるのがいゝのだそうだが、私の鈴蟲は六聲  
シ 以上は鳴かなかつた。其一聲一聲は長く尾をひいて其終り  
は鞭の先のやうに細くなつて暗の中に消えて行つた。それ  
は實に何とも言へない涼しさと快よさとを與へた。

星の夜も雨の夜も、日が暮れさへすれば彼は調べを奏で始め、明け方まで奏でつゞけた。然し今やさすがの彼の樂器にも狂ひが出來た。撥は磨り減つて今では聞く影もない情ない音を立てた。

それに六聲は五聲に縮められ、五聲は四聲に節約された。その四聲を三聲につゞめ、三聲を更らに二聲に、又時に一聲に切り詰め、其一聲の音の長さを半分に切つても彼は尙彈奏を癡めやるとしない。時にはリン／＼といふ代りにキリ／＼と自暴氣味な亂調子を立る事すらある。斯うして彼は來るののない妻を呼びつゞけて七日目の朝此世を去つた。

彼が居なくなつてから考へると色々な事が思ひ出される、その中でも一番思ひ出されるのは彼が非常に奇麗好きで、又却々のおしやれであつた事だ。總じて蟲といふものは潔癖なものだが、彼も亦其例にもれなかつた。彼は間がな隙がな其觸角を磨くの怠らなかつた。體の何倍もの長さのある二本の觸角を、代る／＼根元から先端まで丁寧に口で嘗めて磨き拂ひ磨きをかける。又彼は狭い籠の中で其長い觸角が思ふ様振り廻せないのが如何にも不満らしかつた。兎に角彼は淋しさと不満との中に鳴きつゞけて死んで行つた。其後私はよその家で音のかすれた老ひた鈴蟲の聲を聞く度に言ひ知れない哀れを感じる。

松

蟲 (まつむし)



マ ツ ム シ

秋蟲の中で鈴蟲をバイオリンに例へるとしたら松蟲はマンドリンになぞらへる事が出來やう、其軽い細い調子は又鈴蟲と違つた優しさをもつて人の心を惹きつける。そして其調子には何處か粹な處があつて鈴蟲が一般家庭に向くの對して此蟲は料理屋、待合、長唄、生花のお師匠さんの家の軒下につるして聞くに適はしい氣がする。全體が茶褐色でお腹が黄色い餘り美しい蟲ではない、此蟲は松林に多い。そして鈴蟲よりも育てにくいそうである。其値段も鈴蟲の倍もする。此八月神樂坂の蟲屋で聞いた所が、鈴蟲の一匹十五錢に對して松蟲は三十錢だと言つた。そんな馬鹿々々しい値段を拂はなくても、牛込見附の

まつむし

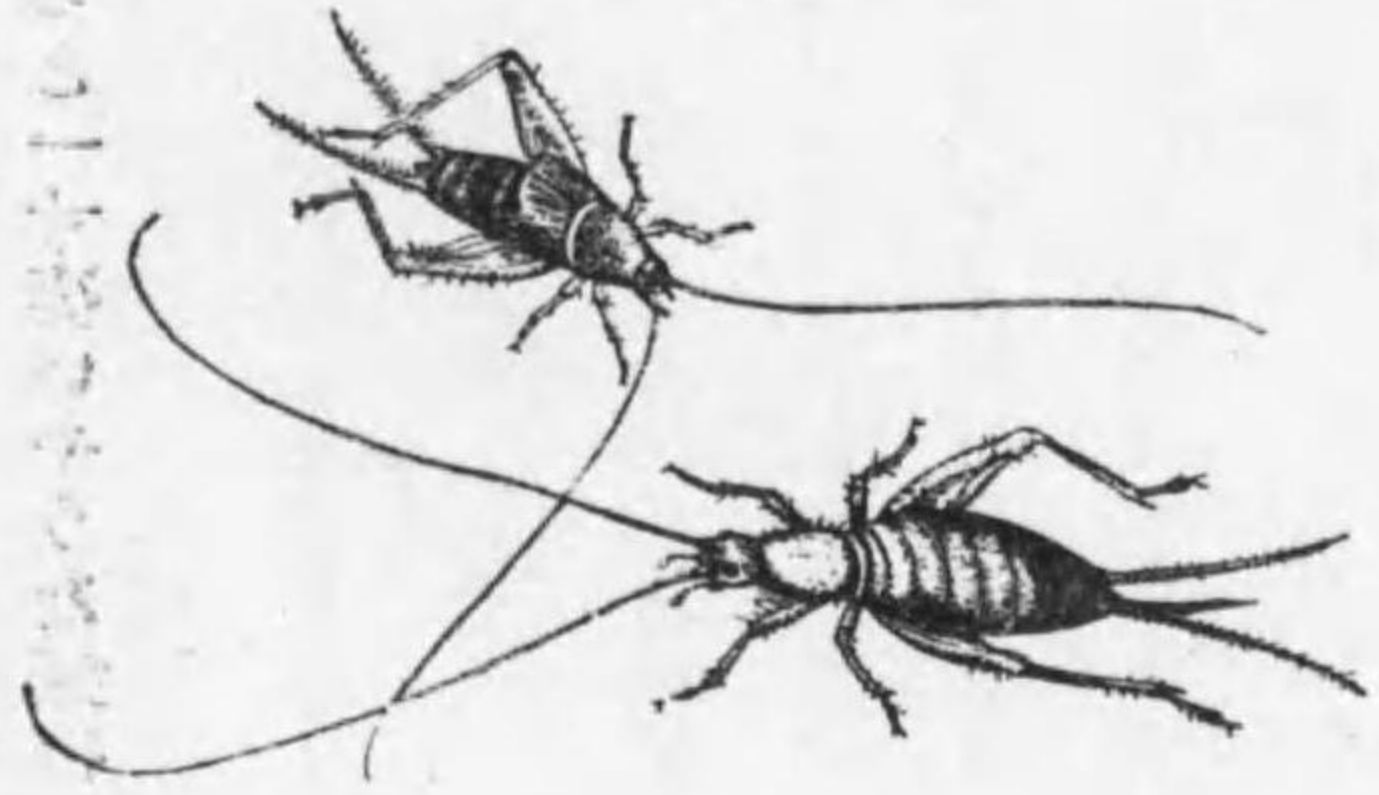
土手へ行けば只で彼の音楽を聞かれる。



鐘

叩

(かねたたき)



雌下・雄上 キタタネカ

此小さな可愛い音楽家は餘り人に知られて居ない。それは柄が小さいのと鳴き音が華美でないからである。然しいかにも落ちついた可愛らしい音をたてる。

涼しい秋の夜風を襟元に感じ乍ら讀書に耽つて居ると、室の中で突然チン／＼と銀の小鼓を叩くやうな音を聞く事がある。其小鼓は十五音か二十音續いては止み、暫らくすると又起る、時には五十音以上百音位も續く事がある。一寸見つけ難いけれど、音のする方をよく注意して探せば見つける事が出来る、身の丈二、三分の茶褐色の頭をもち、黄色のツンツルテンの翅を

つけ、一寸涎かけでも掛けてるやうに見える蟲である。普通籬や植込の中で鳴いてゐるが、又よ

かねたたき

く家の中へ入つて来る、廣い静かな室に一人で座つてゐる時など、突然此蟲にチン／＼とやられると一寸凄いやうな氣持になる事がある。

草 雲 雀 (くさひばり)

私は今日こそはと思つて立ち上つた、其と端に鳴き聲はピタリと止んでしまつた。私の一番愛した妹が私の室へ來なくなつてから今日で二日になる、毎日四時が鳴つて自分の仕事がすむと彼女は私の室を訪れる事を忘れなかつた。そして私の仕事を手傳ひ、私からいろいろ／＼な話を聞くのを楽しみとして居た。未だうら若い彼女は、私から自然界の生物の不思議な生活や神秘的な現象の説明を聞いて未知の新知識を得るたびに喜びの聲をあげ、美しい眼を見張つて驚いた。「何んて面白いんでせう、私そういふお話し大好きよ、早くそれがご本になるといゝわね、一體何時出るの？」斯う言つて彼女は兄の著作の出版を待ち遠しがつた。私は天にも地にも此妹を一番愛した。彼女は兄の爲には病體の苦痛も意としなければ、たまの休日の安息も犠牲にして仕事を助けて呉れた。そうした妹の可憐な心盡しに對して、私は終生の愛を以て酬ひやうと決心した。一日の中間でも妹の訪れない日の私は、荒寥とした冬の枯野に立つた様な淋しさを感じるのであつ

た。それが偶とした事から妹は私の室を訪れなくなつた、そして恐ろしい程な淋しさが一瞬も休まず私を襲ひはじめてから今日で二日になる。

熱愛する妹の訪れがなくなつた翌日から私は私の室の中に優しい蟲の聲を聞いた。殆んど失心に等しい程沈んで居た私の心は恰かも靈魂の顫動するやうな奇しき音の漣に呼び覺された。それは黄金の豆電鈴の鳴りひびくかと思はれる高い、細かい音である。私は靜かに立ち上つて音の源を確かめやうとした。其刹那、豆電鈴はヒタと鳴らなくなつてしまつた。五秒、十秒、二十秒私は待つた。やがて又鳴り出した、其細かい鋭い音律は天井に觸れ壁に反射し、窓硝子に傳はり室中一杯に擴がつて震へて居る、聞き定めやうとして少し歩きかけると直ぐに鳴り止み、又暫らくすると鳴り出す、室の西の隈かと思ふとさうも聞こえ、東の窓際から聞こえるのかと思ふとさうらしくもある。そして何うしても源を突き止める事は出来ない。

斯うして不思議な電鈴は私の室の中で今日で二日間鳴り通した、今も今私は書籍を覗いて居ると又しても謎の鈴が聞こえ出した。そして今日こそは見付け出してやらうと勢ひ込んで立ち上つ

た拍子に鈴はヒタと止んでしまつた。それは實に敏感である。私の體の僅かな動きによつて起る空氣の震へにも感じて止み、音の方へ振り向くだけの動搖にも脅えて鳴り止む。

私は此源の知れない音波に對して殆んど手の付けやうがなくなつてしまつた。終ひには窓のカーテンをめくり、額を裏がへして探がして見たけれど、やはり見つける事は出来なかつた。

草

秋の日は短かゝつた。五時になるともう薄暗が周圍の窓の隙間から流れ

雲

込んで眼に見えない速さで室の中に擴がつて行つた。私は此薄暗の中に椅子を並べて仰向けになり、望みのない待人の事を考へ乍ら天井を見詰めて居た、止めどない淋しさが涙となつて頬を流れた。その時私はふと天井の白壁の上に小豆大の黒いものを見つけた。初めは別に氣にも留めなかつたけれど、ジツト見て居ると其黒い點は確かに動いて居る様に思はれる。生

雀

き物の鑑別には、特に鋭い感能を持つた私は、次の瞬間には此小さい黒點の正體を完全に見届け

くさひばり

一五七



てしまった、私はすぐ室の隅に立てかけてある白絹の網を顧みて微笑した。

遂々私は草雲雀を自分のものとする事が出来た。彼は與へられた鉛張りの小さな籠の中で一片の胡瓜を喰べ乍ら晝となく夜となくよく鳴いた。殊に夜になると此可愛い、音楽師は家中を風靡した。總てのものが皆耳をすました。机上の花瓶に挿したカーネーションの花の精が脱け出た様な、又床の上のオペリスクの硝子塔が融けて流れ出した様な、其音律、げに此みすぼらしい小蟲の翅の震動は私を雲に乗せて、常春の樂園に伴れて行き、風に包んで澄み切つた星の國へ導いた。

それは何といふ奇しくも妙へなる音楽だらう。それにしても彼は何を目的に毎日毎夜斯うして美しい樂を奏するのであらうか、言ふまでもなくそれは美しい戀人を得んとしてである。そう思ふと私は自分の無情な行ひを心から恥ぢねばならなかつた、なぜと言つて、私は今彼を其戀人から全く距てゝ居るからである。どんなに彼が聲を限りに呼び續けるとも、籠の中に捕はれの身の永久へに戀人を迎へる由もない。それだのに彼はそうした哀れな境遇に在る事も全く知らずに、今日は来るか、明日は逢へるかと呼ぶのをやめないのである。おゝそれは私が訪れを絶たれ

たとは知らずに、今かくと妹を待ち侘びた三日前の日の心もちに勝るとも劣らない戀しさに違ひない。そう思つてその心根のいぢらしさを考へた時、私はとてもちつとしては居られなかつた。私はすぐ彼を籠から出して庭の暗の裡に放してやつた。

翌朝私は庭の隅の山吹の繁みからもれて来る彼の音樂を聞いた。それが彼の聲の聞き納めだつた。その晩私は用事があつて晩くまで家へ歸らなかつた。翌日は篠つく雨で小さな蟲などは洗ひ流される程だつた、夜になると雨は止み、星はまたゝいたけれど、もうあの妙へなる黄金の豆電鈴は鳴らなかつた。彼は果して望みの戀人を得て二人で何處かへ行つたのだらうか、それ共、雨に打たれて死んで終つたのではないだらうか、私は彼を逃がしてやつた事が果して彼にどれだけ  
の幸ひを與へてやる事が出来たか、何とも答へる事が出来ない。それは悪い事ではなかつたに違ひない、然し宜い事であつたかどうか私にはわからない。

蝻 (きりぎりす)

それは遠い遠い昔の事であつた。或る山里に一人の盲目の老爺が住んで居た。彼には玉とも愛づる二人の美しい娘があつた。二人の中姉の方は機織に秀で妹の方は裁縫が巧みである。二人共老ひた盲目の父を助けて忠實めく救く働らき、駘蕩の春は永久に此小さな家庭から去る事は無い様に思はれた。所がある年の秋の事、此年老ひた盲人は不圖した病から枕が上らなくなり、風なきに娑婆と音立てゝ散る梧桐の一葉と共に、彼も亦永久へに歸らぬ人となつて終つた。盲目とは言へ、杖とも柱とも頼る父親を失つた二人の娘の嘆きは筆や言葉には盡せなかつた。朝に夕に亡き父を慕ひ嘆き悲しんで居たが、果ては體をいたため、父が死んで三月ばかりの後二人共父の後を追ふて不歸の客となつて終つた。

平常交はつて居た里人達は相集つて此憐れな姉妹を懇ろに葬つてやつたが、其後月経ち、姉妹が死んでから早や一週年となつた。そして村人達は姉妹の墓に詣でゝ亡き二人の靈を慰める事を

忘れなかつた。所が墓參の折、姉の墓の前では頻りとギーチョンギーツチョンと鳴いて居る小蟲を、又妹の墓の前ではツツレサセ、ツツレサセと鳴いて居る虫を捕まへた村人達は、此二匹の小



民衆の師の蝻

蟲をば亡き二人の靈に違ひないと思ひ、姉の墓の前で鳴いて居た蟲を機織と名をつけ、妹の墓前の蟲を蝻と呼んで放してやつたのである。處が其後此蟲は段々と其近くに殖へ擴がつて今に至るまで絶えないのであるといふ。

斯うした優しいロマンスを持つた蝻は、實にデリケートな體と妙へなる音の持

主かと思ふと、實は案外頑丈な體格と男性的な鳴き音の所有者だから面白い。此蟲の特徴は晝間も鳴く事だ、大抵の蟲は夜鳴くけれど此蟲だけは晝間も鳴く、夏の盛りに塵

きりぎりす



埃を浴び乍ら汗を拭き、田舎道を行く時、路傍の叢や唐黍畑から、ギーチョン／＼と響いて來る聲を聞くと、一しほ暑さが迫るやうに感じる。場合によると、人の暑さも知らないのか、と思つて其呑氣さを忌々しく感じる事もある。けれども又人通りのない草原や古寺の跡などで聞く此蟲の音は、それこそ哀愁を誘ふものである。

然し何と言つても此蟲は民衆的の蟲である。鈴蟲や松蟲等の連中が帝劇あたりへ出るブルジョア音楽家なら、蜷蠃は大道を練つて歩く廣告の音楽師である。前者には氣品と典雅があるが、後者には野趣と雄大さがある。蜷蠃は其奏樂の音ばかりでなく、體格からして野人の風格を備へて居る、其角張つた體つき、ツツルテンの短かい翅、その下にはみ出して居る脂切つた腹の工合は、どう見ても田舎者だ。其音楽家らしい所は長い觸角をさも意味あり氣に動かす點位なものである。然し此不粹な風采の持主が音楽家としては却々馬鹿に出來ないのである。此蟲が他の蟲と一寸違つた處は合奏をやる點である。此場合にはきつと一匹の音頭取が居る、それが皆の調子が狂はないうやうに音頭を取つて居る、そして先づ此指揮者が一聲高くギーツチョンと鳴くと、一寸間を置

いて他の連中が一齊に聲を揃へてギーツチョンと鳴く。

蜷蠃が一般から優遇されて居ないのは其入れ物が證明して居る。鈴蟲や松蟲が細かい竹細工の如何にも贅澤な籠に入れられて御殿住ひをして居るのに、此民衆音楽師は荒削りの竹で作つたバラツク式の安物の籠に入れられ、駄菓子やの店先などにつるされて居る。然し御當人はそんな差別待遇には一向無頓着で、田舎物らしい無骨な脚を踏む張つて、如何にも情るそうにギーツチョンと底力のある聲を立て、居るのを観ると、頼母しくもあるが又道がに氣の毒な氣もする。

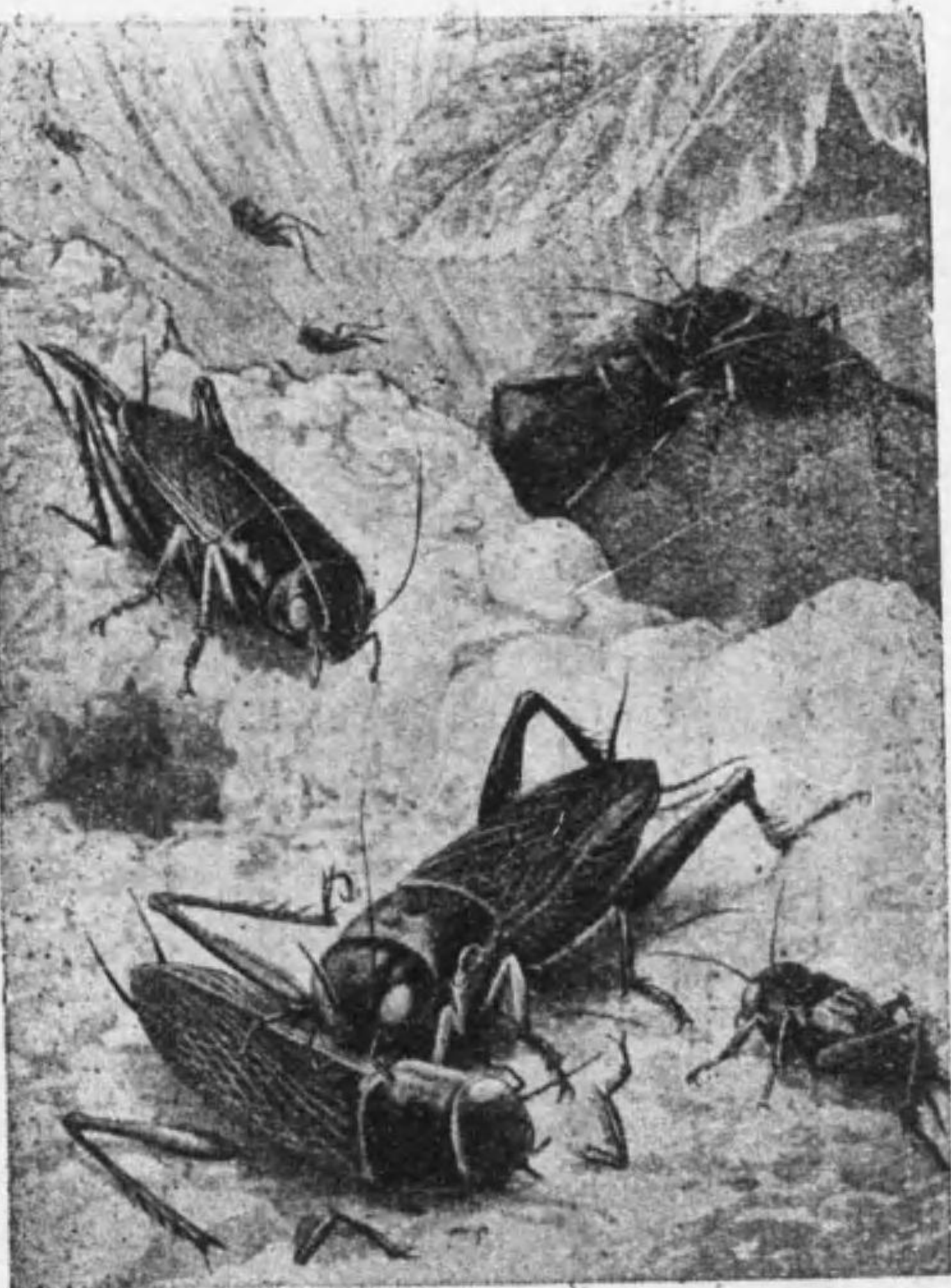
蟀 蟋 (こほろぎ)

夏も半を過ぎて暑さの峠もそろそろ先が見える時分になると、都會に於ての一番の民衆音楽家である吾が蟋蟀君は眞先に其提琴を弾き始める。

殊更らに夏負けのひどい私は、夜の散歩の歸りやお湯のもどりなどに、暗い石涯の間や小溝の蔭から恰かも湧いて来るやうな、クリクリといふ此蟲の聲を聞くとヤレ〜と思ふ、それは秋が近づいたといふ嬉しさから出る安心の溜息なのである。

私は小さい時分から蟋蟀が大好きである。鈴蟲が高い代價を拂はなければ、都會の人には鳴聲すら聞く事が出何ないので、又可なり民衆音楽家である蠅螽でも其聲を聞くには金を出す必要があるのに、吾が蟋蟀君は田舎は勿論都會の人にも無料でドン〜其交響樂を聞かして呉れるから嬉しい、物質文明の發展に伴れている〜な蟲が日に〜都會から逐ひ拂はれて行く、私の少年時代には未だ自然音楽家の樂園だつた王子でも、道灌山でも田端でも、今は蟲の聲どころでない

そこへ行くと蟋蟀君は未だ〜廣い世間をもつて居る。山手方面なら何處へ行つても彼の音樂を聞く事が出来る彼の音樂は松蟲や鈴蟲の音樂の様な上品さと人の心を澄ます様な涼しさとは持た



蟋 蟀 の ギ ロ ホ コ

ないけれども、賑かさの中に何となく一脈の哀愁を含んで居る。而も少しも上品振らない所に親しみがある。殊に私が此蟲に對し感服して居る事は、彼が住居に向つて少しも贅澤を言はない點だ。鈴蟲が萩の寢床を要求し、松蟲が赤松の下草を、邯鄲ヒバリが柔かい草の褥を家と

して居るのに、此音楽師は石の下とか、植木鉢の蔭とか、積葉の下なんかに住んで平氣で居る。

特に私を驚かせるのは溝板の下に大きな氣味悪いナメタジやミミズと同居して平然と奏樂に耽つて居る事だ。私は少年時代に此蟲を捕まへやうとして聲を目當てに溝板を剝がすと、當の音樂師のすぐ側に豪然と控えて居る大ナメタジの爲にヒヤツとさせられた事が何度あつたか知れない。兎に角此蟲は其生活にしる風采にしる書生流の所がある。そのブツキヤ棒な體の格好、クリ／＼した黒光りのする頭、キヨロ／＼した眼元は小憎らしさの中にも何處か可愛氣が潜んで居る。私は最も平民的な音樂家として此蟲を推賞する。

此音樂家が一番盛んに鳴く時は朝の三時、四時頃である。大抵な人達は白河夜舟の最中だが、其時分の此蟲の大合奏こそ實に素晴らしい、何百何千といふものが一齊に聲を揃へて鳴きたてる。寢心地のいゝ床の中で此大仕掛な合奏を聞いて居ると、拂曉の冷やかさが身に浸み朝霧に包まれた秋の夜明の景色を眼に見るやうな氣がする。五時頃になると彼等の聲はずつと落ちてしまふ、そして日が上つて明るくなるといつか合奏はやんで終ふ。

此吾が平民音樂家も其私的生活に入つて見ると却々凄い所がある。就中其戀愛戦は特筆に値す

る。優しい音樂家も其戀人を得るためには往々腕力を振ふ場合がある。それは一匹の雌に對して

二匹の雄が求婚した際だが、此二匹の男性は御互ひに「ヤットコ」で固めた様な堅い頭を釘抜の様な丈夫な顎で噛み合ひ、取つ組んでは放れる、斯うして揉み合ふ中にやがて力の弱い方は諦めてサツサと戀をゆづつて逃げてゆく、そして勝つた方は低い聲で鳴き乍ら戀人の周圍を嬉しさと得意さと混ぜ合せたやうな態度で駆け廻る、それから初めて戀人に正式に愛を要求する。

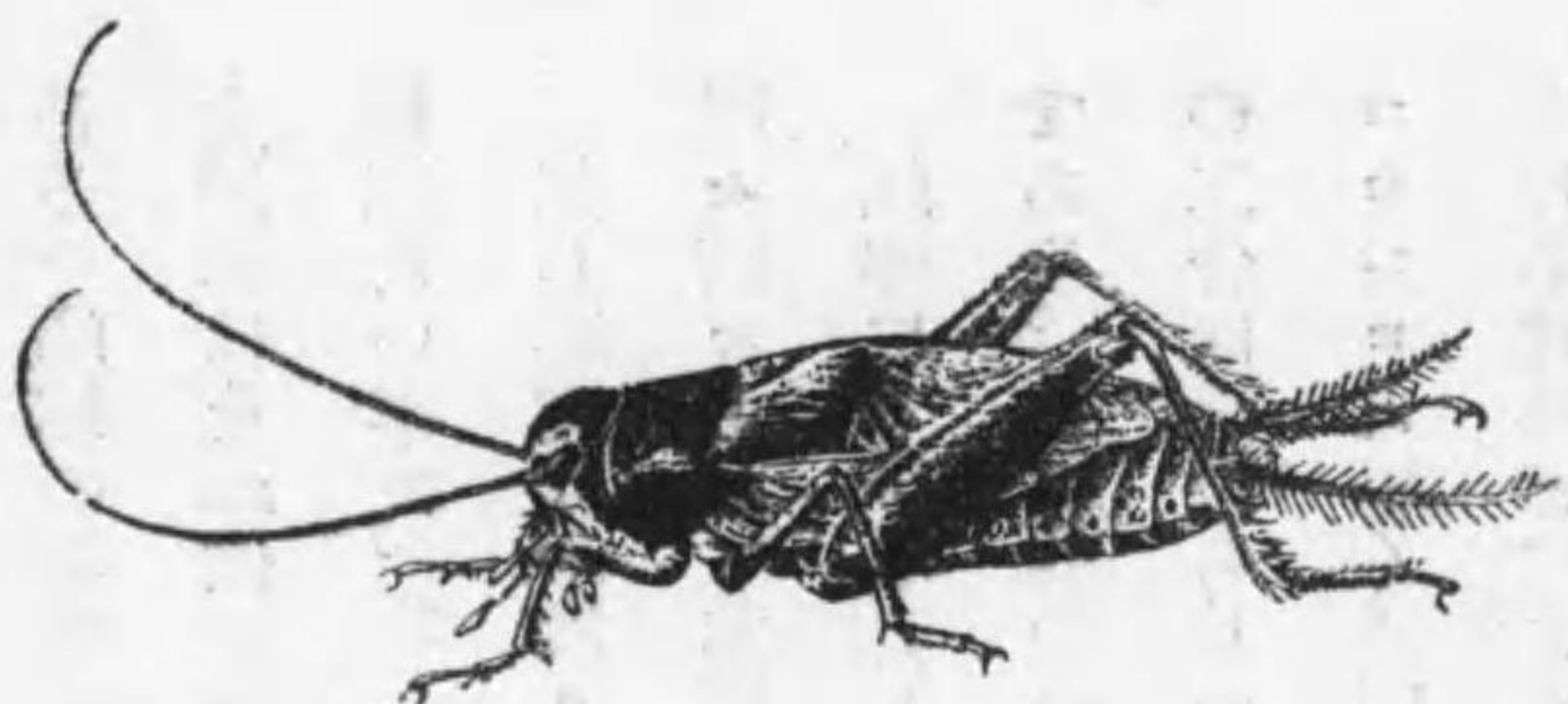
そして彼は暫らくは戀の歡樂に酔ひ夢我の境を遊ぶ事に成功する。

然しそれは決して長くは續かない、俗諺に

お前死んでも寺へはやらぬ

焼いて粉にして酒で嘸む

といふのがあるけれど、蟋蟀では此俗諺の逆で、交尾が済んで終ふと、今迄の優しい乙女は急に



鬼娘と變り、今が今まで總てを捧げて惜しまなかつた夫君を捕まへてムシヤ／＼と頭から嚙り始める。蠍螂の妻君が結婚後夫を喰つてしまふ事は有名である。けれどあの妖怪な姿をした蠍螂の女房にはそれ位の事はあり得るとも思へる、然し蟋蟀にもそうした悲劇があらうとは一寸想像が出来ない事だ。

然し事實はやはり事實で、吾が敬愛なる此平民音楽家も妻君の前には一向頭が上らないのみか、唯々諾々として其腹を肥やす餌となつて居るのを見ては轉た失望せざるを得ない。

蟋蟀にもいろ／＼變つたのがあるけれど、中でも一流の名手はエンマコホロギといふ名の持主である。此は普通の蟋蟀よりもずつと大形で、つや／＼した頭、黒光りのする體軀、白緑の眼玉の工合は小憎らしい様な可愛いさをもつて居る。非常な大聲でコロコロコロコロ、コロコロコロコロと鳴く。明るい中に落ち付きと淋しさとを持つた調子である。郊外へ出ればいくらでも聞けるけれど、よく思ひがけない街中で、此名手の奏樂を聞く事がある。兎に角樂界一方の重鎮として、蟲屋でも立派な朱の紐のかゝつた籠等に入れて賣つて居る、然し此先生は却々亂暴家である。

食物に困ると家へ上り込んで来て着物なんかを食つて困る事がある。此他にミツカドコホロギと言つて大きき七分位、黒褐色の體をして、額や頬が出つ張つて三角の顔をしたもの、それから更に小さいヒメコホロギなどゝいふのがある。ミツカドコホロギはチュー、チューと可愛い聲を出し、ヒメコホロギは草の下や小石の間などでチリリ／＼と鳴いて如何にも秋の哀愁を偲ばせる。

響 蟲（くつわむし）

澤山の秋の蟲の中で其體格から見ても、又鳴き方から言つても一番の覇者は此響蟲であらう、其奏樂は喧ましい嫌ひはあるけれど、他の蟲達の追従を許さない大きい所がある。又蝨螻の野人的な風格と比べると此蟲は烏帽子、垂直姿の上品さがある。

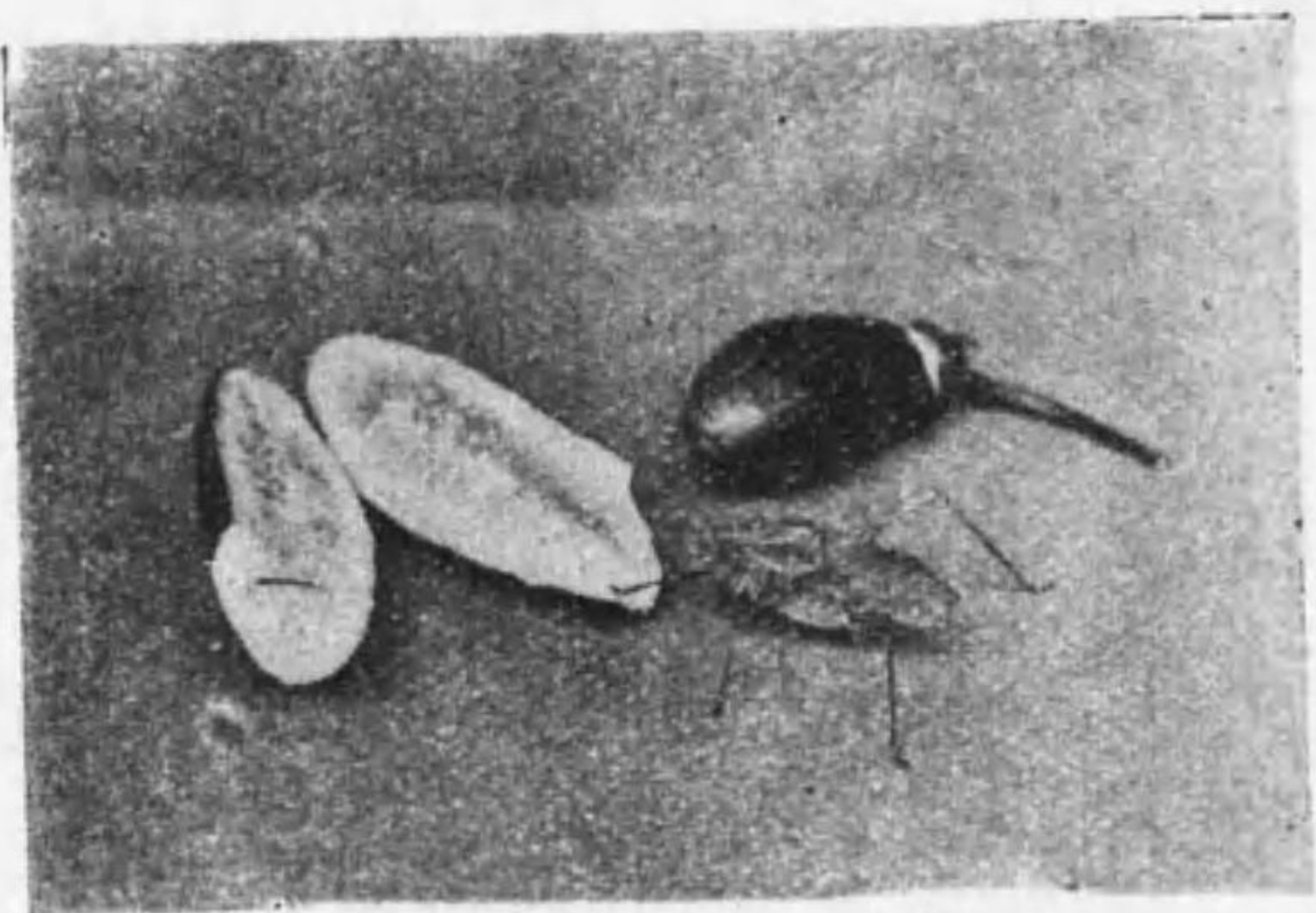
一體に秋蟲の奏樂が哀調を帯びて傾きのある中で響蟲の夫れは活氣に富み賑かだ。

吾が背子は駒にまかせて來にけりと

聞くにきかするくつわむしかな

和泉式部

といふのも此蟲の音の賑かさを語るものである。その他一般に此蟲の音を響の音に似てゐると言つてゐるけれど、私には何うしてもそうは聞こゑない。夫れより此蟲の鳴方は俗語のガチャ／＼が一番當つてゐる。其夢中になつて鳴いてゐる所はまるでガラクタの玩具箱を掻き廻はすか、釘箱でも振るやうな騒々しさで私はどうも此蟲の音楽を好かない。たゞ彼が奏樂を終る少し前の一



鳥朝子垂直姿の響蟲

寸の間だけが如何にも餘韻があつていゝ。秋の蟲としては壽命の長い方で十月一杯位は生きてゐる。寒さが近づいて來るに伴れて體が弱り、脚が折れたり翅が脱けたりして、跋足を引き乍ら大きな老軀を引きずつてゐるのを見ると、昔の勇壯振りに比べて言ひ知れない哀れを誘ふ。體の偉大と聲の騒々しさに引きかへて優しい蟲で、南瓜や胡瓜の軟かい所が好物である。

駒とめて麓の人をたづねれば

をくらにすだく響蟲かな

枕木集

螻 蛄 (けら)

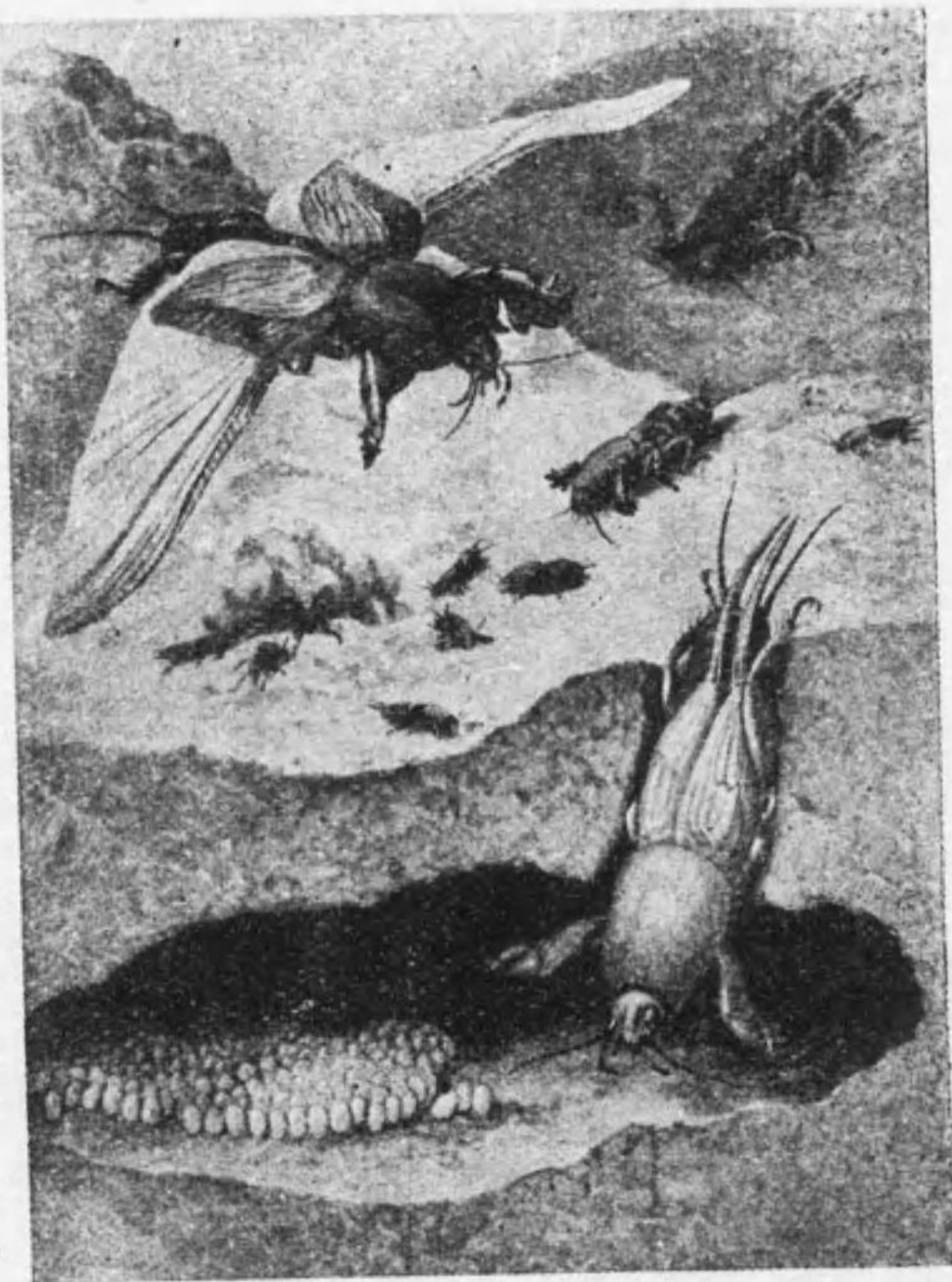
一年中で一番さわやかな氣持のする初夏の五月頃、それから涼風の立ち初める初秋の夕、路傍みちばたの小溝の蔭や臺所の落水の溜り場所から、ジジ……と抑へ付ける様な低い聲がもれて来る事がある。其聲は時に紐のやうに太くなるかと思ふと、又絲のやうに細くなる。地の底に蠢めく數知れない靈魂の囁きとでも言ひたい哀調を帯びて居る。地下の牢獄に閉ぢこめられた罪人の靈の唸きそれが僅かの地面の隙間を通つてもれて来るやうでもある。

夏私達が庭の石を起したり溝板をめくつたりすると、其下に一寸二三分の褐色の蟲を見る事がある。頭には二本の鞭のやうな觸角を生やし、クル／＼した眼、薄褐色の天絨で包んだやうな光澤々とした胸、その後ろには膨つくらしたお腹がつながり、其先には二本の尻尾がついて居る。背中には短かい前翅があつて、全體の格好は丁度金太郎が、ちゃん／＼こを着て四つん這ひになつたやうに見える。殊に此蟲の前脚が奇抜である、それは釘抜を思はせる様な形をしてゐる。此

前脚を使つて彼は巧みに土を搔いて穴を堀る、蟲仲間の土堀り、昆蟲界の土籠ちんろうと言つた格である。

此見るからに屈強な、コケ  
テイツシユな蟲がああ哀調の  
歌の主とは誰が想像し得るだ  
らう。

昔から蚯蚓鳴きといふ事がある。一體誰が蚯蚓にしてしまつたのか知らないけれど寔によくない誤りだ。生れつき盲目で啞の蚯蚓こそ果報者で



昆蟲界の「もらぐも」螻蛄の活生

あるが、折角咽喉を絞つて賞められたいと努める螻蛄こそいゝ面の皮である。前にも言つた通り此蟲の鳴き聲は一種哀調を帯びて大したものではないが、案外人々の注意を惹いてよく俳句など

に吟まれて居るのを見ても、此不幸な樂師のため、一言辨じてやらねば私の氣が承知しない。

古犬や蚯蚓の唄に感じ顔

一 茶

据え風呂や流れ溜りに蚯蚓なく

南 懶

夜機織る小窓の下や蚯蚓なく

甲 山

どれも皆なみ、ずとなつてゐる。

秋の夜椽に腰をかけて折柄の月を眺めて居る時など、何處からともなく微かに耳朶をかすめて響く靈魂の囁こそ、蝮蛤の雄が思ひに堪へかねて雌をよぶ戀の歌である。其切なさに震へた聲は異性を呼ぶに偉大な力を持つてゐる。やがて彼は美しい妻を得て其戀歌をやめる。

さて結婚がすむと、雌は地を堀つて深さ三、四寸の所に玉子大の室を造り其中に二百粒位卵を産む、此卵からは一週間程で幼蟲が生れ、此幼蟲は植樹の細い根を喰べて大きくなる。

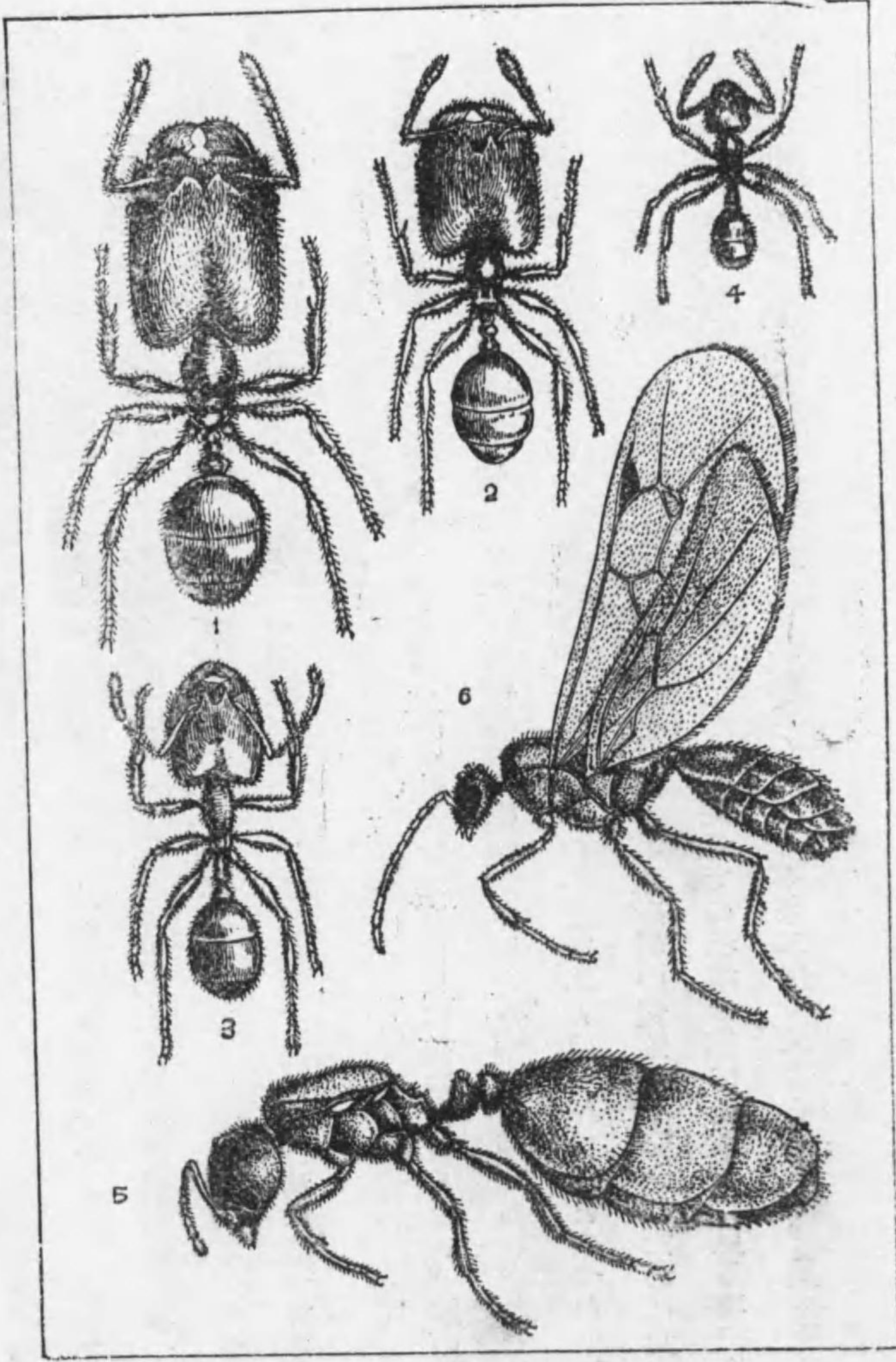
此蟲は大人よりも小供に可愛がられて居る。それはある質問に對して滑稽な身振りで答へるやうな態度をするからである。此蟲を捕まへて「誰々の××どの位？」と言つて少し強く指で抑へ

ると、彼は其無格好な兩手を振つてモヂ／＼してゐるが、やがて兩手を廣く擴げて其大いさなるものを示すかの如くに手を休める。その滑稽と無邪氣さとが徳となり惡戯小僧の虐待から脱れて命拾ひをするばかりか、小供は御の字を與へて「おけら」と尊稱してゐる。だが實は此「おけら」君は却々の惡戯者なので、先づ得意の墜道堀りで植樹の根を損ふばかりか、殊に若樹や苗の根を傷めて困る。それ故農業林業の方面では此蟲を嫌ひ、應用昆蟲學者は闇魔帳に載せて注意人物として呪んで居る。何處までも割の悪い蟲である。

蟻(あり)

私は今迄いろ／＼な蟲の生活と其個性に就いて書いて來た。蟲の生活も調べてみると實に面白く又蟲々によつて示す個々別々、十人十色の性格は寔に興味深い。そして蟲の生活とて却々馬鹿に出來ないけれど、何と言つても蟲仲間での王は蟻と蜂とである。此二つは昆蟲界の双壁で蟻が東の大關なら蜂は西の大關に座る可きものだ。何しろ其社會組織の整然たる事から、生産方法、社會道德と謂ひ、吾々人間に劣らぬのみか或る點では人間の方が却つて學ぶ可き事が少なくない。蟻の特徴として第一に擧げるべきは彼等が共同一致の精神の持主であり、又吾々人間と同じく全くの共同生活をやつて居る事とである。彼等の間にはいろ／＼な階級があつて、各階級の者は何れも専門の役目をもつて居て、忠實にそれを果たし、互ひに共同の實を擧げる事に努めて居る。目下此地球上に生活して居る澤山の生物の中で人間に亞ぐ程度の文明生活を營んで居るのは蟻である。今蟻の社會を観ると人間の社會にいろ／＼な階級があるやうに、それは人間のとは可なり

1兵蟻 2・3中間働蟻 4眞正働蟻 5雌6雄、此蟻の家族は大變多形で六つの個體を區別出來る。其中でも特に目立つのは兵蟻で、之は頗る大頭の持主で、いつも働蟻の間に立ち交つて了度監督者



族家のリアツホオ

のやうな態度で立働いてゐる。  
あり



違ふけれど、蟻の社會にもやはり若干の階級がある。そして各階級の者は一定の社會的事業を分擔して働らいて居る。一體どんな階級があるかと言ふと、先づ第一に生殖階級ともいふべき雌雄兩性の二階級があり、これは専ら子孫の製造をやつて居る。それから次には勞働階級があつて此は食料の供給、巢の建築、幼蟻の哺育等すべて蟻の生活に必要な仕事を司どつてゐる。尙蟻によると此他に護國階級といふ軍事を司どる一階級があつて戰鬥に従ひ、護國の任務に従つてゐるがある。

さて此等の中で雌と雄との天職は、子を造る事それだけで其他には何の役目もない。蟻の國の産業、教育其他一切の重要な仕事はすべて勞働階級の働蟻が中堅となつて行つてゐる。處で此蟻の國の中堅である働蟻といふのは一體どういふ種類のものかと言ふと、それは雌ともつかず又雄ともつかぬ、元來なら女として世に立つべきである處、其生殖器の發達が不完全なために女としても役立たぬ中性、平たく言へば石婦<sup>うまごめ</sup>である。だから此世での彼等の慾は食ふ事、見る事、働らく事だけで、色を求める慾は全くない。それ故よく食ひよく遊ぶ代り又よく働らく。巢も造る、

食物も集める、仔蟻も育てる、又時には戦ひもして國を護る。兎に角蟻の國の基石となり主腦となつて平和を保つ事に、繁榮を至す事に力を盡してゐる。

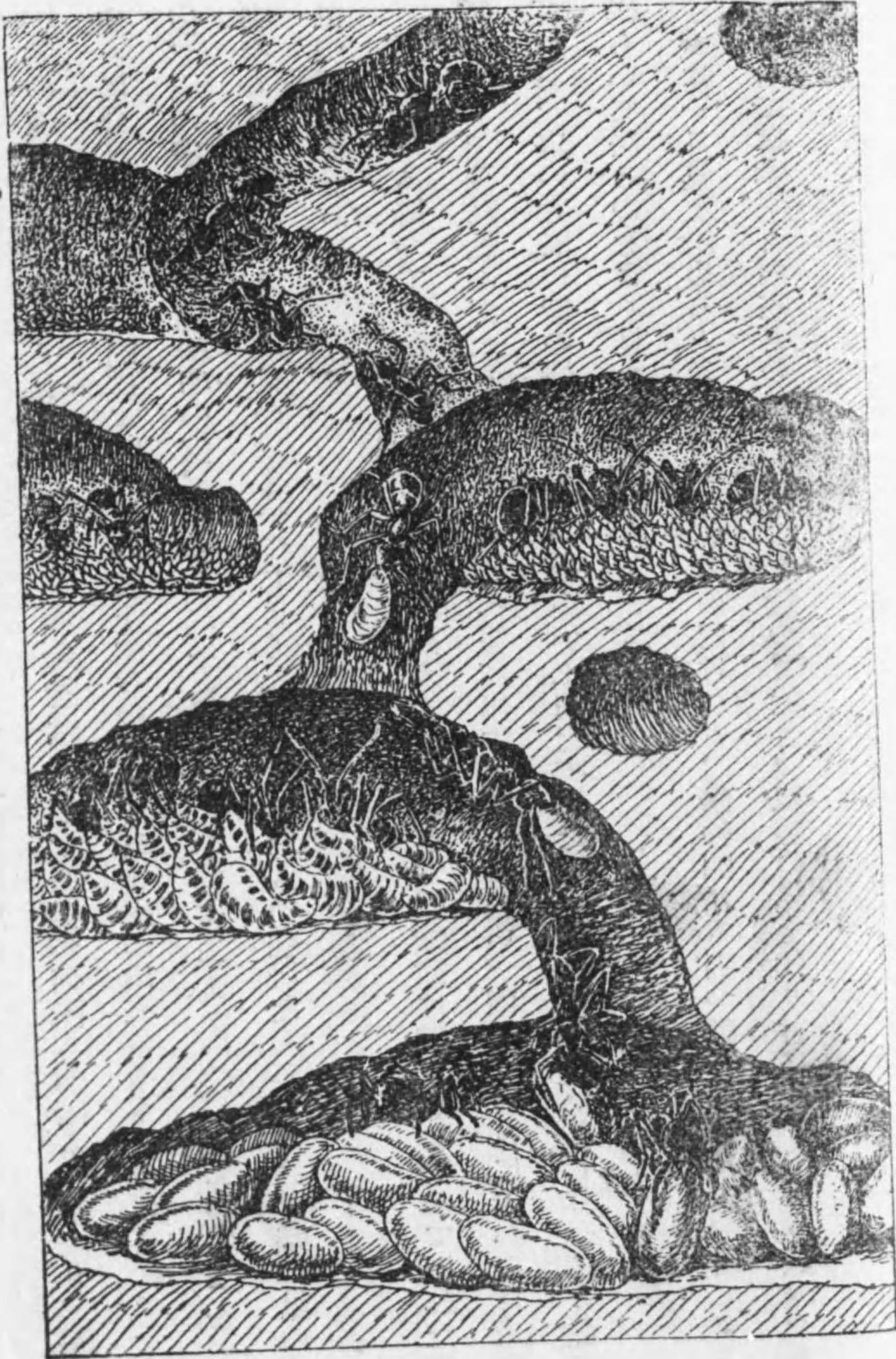
諸君よ、働らく者が、仕事をする者が、社會國家の基であり、中堅である事は、決して／＼人間社會ばかりの現象ではない。それは蟻の社會でも、それから蜂の社會でも同じである。社會國家が勞働階級を尊重しなければならぬ事は、斯うした蟲の社會を觀ても肯かれるではないか。巢。

私達が生活に家が必要だと同じく、蟻でも彼等が楽しく暮すにはやはり家が要る。何しろ彼等は私達と違つて道具といふものを持たない。だから結構な家を造る事は出来ないけれど、彼等は其親譲りの顎と脚を使つて却々巧みな住居を造る。大抵の蟻は地下に墜道を掘るのは誰しも知つて居るが、又或る蟻は地上に高い塔を築き上げる。そうかと思ふと樹の洞に住み又は朽木を巧みに削つてアパートメント式な住居を造つて居る蟻もあるし、又ジブシーのやうに定つた住居を持たないで、旅から旅への放浪生活を送つて居る者もある。だが何と言つても一番多いのは穴居生

活——それは私達の遠い——祖先も亦行つて居た——である。

私達は鋏を使ひ鋤を用ひて土を堀る、そして私達の遠い祖先もやはりそれ相當な道具を用ひて穴を堀つたに違ひない。處で蟻には何か穴を堀る道具があるかと言ふと、勿論そんなものゝある筈がない。彼等が自分の住居を造るのに用ひる事の出来る唯つた一つの道具は、親譲りの頑丈な顎だ。彼等は其強い鋭い録のやうな顎で土を堀つて深い墜道を穿つのだ。處で此際何處でも土の下でありさへしたらいゝかと言ふと却々そうでない。先づ彼等は位置から選んでかゝる。それから土質を選む、若し巢を堀らうと思ふ場所の土が乾き切つてゐて、ボロ／＼壁が崩れ落ちるやうな所だと避ける。そして近所に巢を堀るに適はしい濕つた土地がない場合には、故意に土を水で濕して置いてから仕事にかゝる事もある。兎に角斯やうにして場所が定まると早速穴堀りに取りかゝる。それには顎でもつて土の細かい塊を嚙み取つて、それを一つ／＼地上に運び出すのである。その仕事は私達から見ると實に氣の長い事で、所謂賽の河原の石積よりも尙々心細い程小さな行程に過ぎないけれど、數の力、熱心の凝る所は實に驚く可きで、幾百幾千といふ小蟻の協力

蟻の巢の内部は幾つもの小室に分れてゐて、卵を入れて置く室、幼蟲の室、食物庫とい



蟻の巢の内部の部

ふやうにキチンと區別されてゐる。

と忍耐とは、遂ひに成して廣大な地下の市街を造り上げるに至るのである。

其の地下市街は地の下十數尺にも及ぶ事がある、そして全體が何階も何階もから成り、澤山の室々に分れ、各室々は謂はゞ階段とか廊下やらの仕掛で往き來が出来るやうに仕組まれ、女王の室、王の室、幼蟲や蛹や卵の室、食物を納つておく室といふ様に一々區別がついて居る。食堂も、寢室も、親父の室も、小供の室も一つしよくたの習々貧乏人の住居なんかよりは、蟻の巢の方が餘つ程上等である。

若し雨でも降つて外の土が巢の中に流れ込んだりすると、働蟻達は御天氣を待つて崩れた壁を繕つたり、流れ込んだ土を口に咬へて外へ運び出す事を忘れない。雨上りの日に麗かな日光を浴び乍ら、庭の敷石の傍の蟻の巢から、細かい土塊を咬へた蟻が出たり入つたりしてセツセと立ち働らいて居るのをよく見かける事があるであらう。

蟻は一旦巢を決めると却々動かないものだけれど、蟻仲間にも引つ越し好きなのが居て、そういふ者では本宅と別宅との二つの住居を造つて置き、双方の巢を代り番に使つて居る贅澤やもある。

る。尙蟻の中には樹の上に巢を懸けて住つて居る者もある。

幼者の育て方。

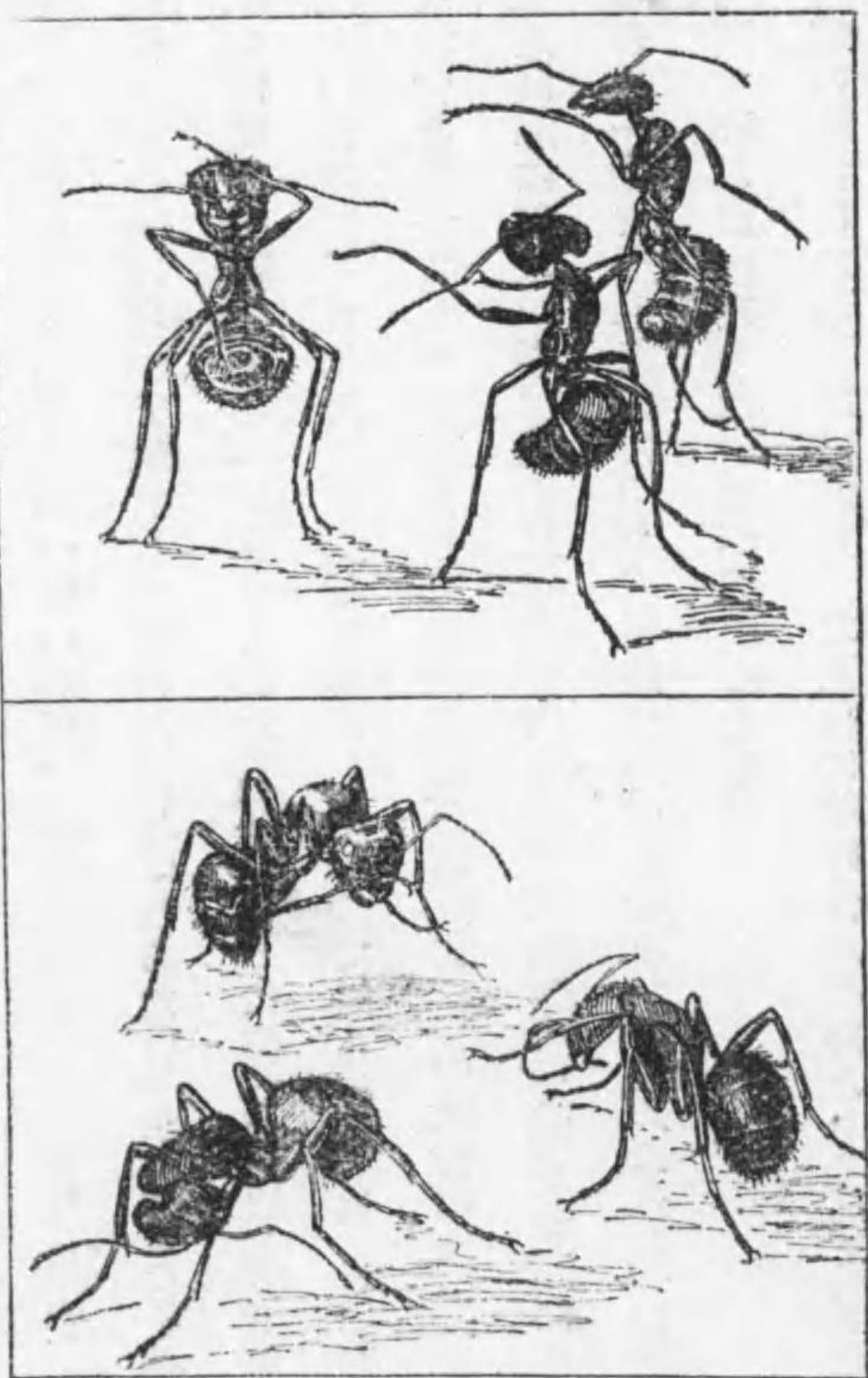
燒野の雉夜の鶴と言つて世の中に生きとし生ける者で子を思はぬ親はない。假令蟲けらでも自分の子を可愛がる事は決して高等な動物に劣るものではない。すでに述べた缺蟲の様なものさへある。然し蟻では親が子を愛し育てるのは社會の出来る極く初めの間だけで、家族が増し、國民が殖へると、母親は一切育児の仕事を働蟻に任せて自分は顧みないやうになる、だから蟻では親が子を育てるといふより、兄弟が其弟妹を慈しみ育てる場合が多い。

先づ女王が卵を産むと働蟻は其卵を直ぐ様特別な室へ運んで安置する。二週間も経つと、此卵から殆んど透き徹つた體をした可愛らしい仔蟲が生れる、すると働蟻達はこの幼い弟妹達に、自分の胃から出る滋養分に富んだ液をば口移しに舐めさせてやる、そればかりぢやない、毎朝旭が昇るのを待て、仔蟻を口に咬へて巢の外に伴れ出して快よい日光浴をさせる、それから又仔蟻の體を舐めて綺麗に掃除してやるなど、それはく厚い情と深い注意とを以つて愛し育てる様は、

決して他の高等な動物と比べても退けを取るやうな事はない。若し萬一にも亂暴者でもヤツテ来て巢を壊はしでもすれば、働蟻達は眞つ先に幼い弟妹を咬へて避難する。私達がよく倒れ木や、庭石や、ドブ板なんかを剝くると、其下に澤山の蟻が口々に白いものを咬へてアタフタと逃げ惑つてるのを見る事があるが、あれが悪者の亂暴に膽を潰した蟻達が、秘藏の弟妹やら蛹やらを咬へて避難する光景なのだ。

斯うして働蟻に手厚く護られて育つた仔蟻は、やがて灰色か黄色の繭を續いで其中で蛹になり、其から十日もすると愈々一匹前の蟻となつて繭から出て来る、此時も働蟻は外から繭を喰ひ破つて仔蟻の出るのを手助つてやるばかりか、この新らしく生れた若蟻に對して、尙數日の間は、歩くのを助けたり、食物を分けてやつたりいろ／＼と面倒を見て、ちやんと獨立が出来るまで何くれと世話を焼いてやる。

諸君、斯様に蟻の生活振りを觀て來る時、諸君は果して何う感じられるか、大體吾々人間共は自ら萬物の長など稱へていゝ氣になつて居るけれど、實は蟻にも劣つた冷酷無情な奴共が決して



(下) 雌化御と(上) スンダの蟻

て少なくない。昔も今も兄弟喧嘩は無論の事、親子喧嘩も到る處で行はれるし、同胞互ひに相喰

蟻は時々立つて踊る眞似をする、又彼等は却々おめかしやで、間がな隙がな觸角を磨き顔を拭く。

あり

むの醜態又絶える時  
 とては無いのは一體  
 どうしたものだらう。  
 私達は又宜しく蟻  
 に就いて學ばなければならぬ。  
 友情、記憶力。  
 凡そ小さくしては  
 一家から大きくして  
 は社會國家に至るまで、其平和の生活は